



月が綺麗なんて  
言わないで。

芳田尚哉

アルコールの匂いとうんざりしている。

もっとも、それだけじゃないんだけど。

ガヤガヤとうるさいけれど、中身のない会話。

こういう場が嫌いってわけじゃない。苦手だけれど。

中堅というには申し訳ない規模の商社。なんの資格もない私が、なんとか内定をもらえたのは、きっと景気が上向きとかで、新入社員の需要があったからだと自分でもよくわかっている。だからこそ、私を含めて五人も新入社員がいる。

新入社員の親睦会と銘打たれたこの飲み会は、当然ながら強制参加だ。なんとかハラズメントじゃないかと思っても、それを口にできるはずがない。もっとも、自分を含めた新入社員が主賓なわけだけど。否応がなしに主賓という立場上、そういう事もできないわけだ。

早く終わってくれないかな……。っていうか、私以外は盛り上がっているわけだし、こっそり帰ってもバレないかな……。むしろ邪魔な気さえしてくる。

「二十歳過ぎて処女って、ちょっとキモくない？」

テーブルの隅っこで、ちびちびとレモンサワーを飲みながら、脂っこいものたちを食べていると、ちょっと派手めで、整った顔立ちの女が言った言葉が耳に入る。茶髪なのにサラサラのロングヘアが揺れる。

染めた事のない私にはよくわからないけれど、染めると痛むってよく聞くんだけどな……。人によって違うのだろうか。

個室の居酒屋だからいいものの、普通のテーブル席だと問題だろう。個室だからっていいものじゃないけれど。

会話の内容は最低だとしても、この場の人たちは全く気にしていないようだ。

っていうか、どういう流れでそんな話になっているんだろう？

「そうかも。十代までだよな、そういうロマンがあるのって」

彼女の向かいに座っている男が同意する。爽やかな雰囲気はあるけれど、全身からチャライオーラが出ている。

「でしょ。やっぱそうだよな」

なにがそうなんだ？ どうせ、私には関係のない事だけれど。

「そもそも、二十歳過ぎて経験ないなんて、あり得ないっしょ。よっぽどのブサイクじゃねえ？」

「確かに。そもそも面倒なんだよな、そういう女って」

「さっきから女ばっかそういう風に言ってるけど、二十歳過ぎの童貞も面倒だからね」

切れ長の目が印象的な、クールって言葉が似合う女が言う。

「あんたはそういうの調教しそうだけど」

「えっ？ でも……それはそれで面白いかも」

調教しちゃえしちゃえ、と周囲が笑う。

くだらない会話は、徐々に広まっていき、みんなが会話に参加していく。

これってセクハラじゃない……んだよね。男女関係なく、みんなが参加しているものね。

大学のコンパってこんなノリだったのだろうか。そういうものに縁がなかったから知らない。

「そーいやさ、週刊誌で読んだんだけど、三十過ぎても経験ないのって、結構いるらしいんだよね」

ショートヘアの童顔女がそんな事を言う。

「なにその雑誌。っていうか、それってガセじゃないの？」

茶髪ロングが訊く。

「そうかもしれないけどね。ただ書いてあったっただけだし」

「なんて雑誌？」

訊かれて彼女が雑誌の名前を言う。男性誌ってわけでもないけど、よくあるゴシップが多い週刊誌だ。

「女性誌じゃないんだ。っていうか、なんでそんなオッサンが読むようなの読んでるわけ？」

「別にいいじゃない。タイトル見て面白そうだったし」

「そういう雑誌って、ヌードとかも載ってるよな」

爽やかチャラ男がそんな事を言ったのを聞いて、茶髪ロング女が顔をしかめる。

「もしかして、そんなの読んでるの？」

「違う違う。電車の広告とかで見たんだよ」

必死に弁解する。

「わたしだってそれで見ただけだし」

ここぞとばかりに弁解に参加する。

どうでもいいじゃない。っていうか、誰が読んでもいいじゃない。

ああ、帰りたい。

「ねえねえ、<sup>ときとう</sup>時任さんってもしかしてさ……」

茶髪ロング女がニヤニヤしながら私に話しかけてくる。

「おいおい、言ってやるなよ。訊かなくてもわかるだろ」

チャラ男が笑いながら言う。それに合わせるように、全員がクスクスと私を見て笑う。

私はレモンサワーを飲み干して、店員さんをお呼びして代わりをお願いします。

「で、実際のとこどうなの？」

どうしても聞きたいのか、童顔女が訊いてくる。

こいつら、なんだか幼稚。

「ないけど」

そう答えてやればいいんでしょ。本当なんだけどさ。なんとなく、そういう機会がなかったただけだし。そんなに興味もなかったんだけど。どうせ、ひつつめ髪の地味眼鏡ですから。

「だよな。これでそうじゃなかったら、マジ驚きだし」

チャラ男が私の答えを聞いて笑う。

ああ、どうして私はここにいるんだろう。



汗臭い。

それだけでも苦痛だけど、汗がベタベタする。気持ち悪い。

暑さは落ち着いてくるでしょう——そんな事を言った天気予報のキャスターは嘘つきだ。まだ午前中だというのに、こんなに汗だくになっている。絶対にアレは嘘だ。

ギュウギュウに押し寿司みたいに詰め込まれた電車に揺られながら、入社したばかりの頃を思い出した。

あれから六年が経ち、仕事がルーチンワークのようになってきている。新しい事もなく、淡々と同じ業務を繰り返すだけ。

もちろん後輩もいるし、新人気分であるわけにもいかず、かといってベテランって事もなく……中堅って感じでもない。中途半端だなと思う。

同期や先輩後輩も何人か辞めている。結婚だったり、一身上の都合という名の逃避だったり様々だ。

私だって、何度も辞めようと思った。だけど辞められないのは、やっぱり生活の保障が欲しいからだ。せっかく正社員として入社できたのに、この立場を手放すのは惜しい。中途採用なんか、特に資格がない私には難しすぎる。

だからあんな事を思い出したのか。

この状況から現実逃避したいってのもあるけど、きっとアレのせいだ。

電車の中吊り広告。

芸能人のスキャンダルとか、私からすれば低俗としか思えない記事がメインの週刊誌。とりあえず興味を引こうとしているだけのタイトルが、どうしても目に飛び込んでくる。ああ、出版社の思惑通りすぎるな、これ。

確かにタイトルだけ見れば面白そうに思うし、気になるから雑誌を手に取りたくなる。

だけど、ヌードグラビアなんか載っている雑誌を、女の私が手に取るのはなんだかハードルが高い。

そうこうしていると、目的の駅にもうすぐ到着するアナウンスが流れた。

ビジネス街のこの駅では、サラリーマンやOLが一斉に降りていく。私もその流れにのって歩いていく。後ろには、がらんどろになった電車がある。乗っている人はほとんどおらず、座り放題になっている。毎回見るたびに羨ましいと思ってしまう。さっきまであんなにギュウギュウだったのになんとか理不尽だ。

そんな事を考えてもしょうがないのはわかっている。

はあ……と深いため息を吐きながら改札を抜ける。

「うわっ」

ギラギラとした太陽の光が降り注いできて、思わず手で光を遮る。

「嘘ばっか」

紫外線を浴びまくって、ようやく会社に到着する。別に一番乗りというわけでもなく、既に仕事を始めている人がいる。

「おはようございます」

オフィスに入って自分の席に向かう。

バッグを置いてパソコンを立ち上げてから体をほぐす。

出勤するだけで疲れている。年のせい……とは思いたくない。

パソコンが立ち上がると、メールを起動させてチェックする。

メールの受信が完了する前に、モニターにペタペタと貼ってある付箋をチェックする。こうしないと、すべき事を忘れてしまう。

受信が完了したメールに目を通していき、返信が必要なものには返信していく。

資料や上司の判断が必要なものはいったんそのままにして、付箋に書いてモニターに貼る。社内メールで連絡を回すのも忘れずしておく。

とりあえずはこれでよし。

あとはひたすら事務作業だ。

商品手配のための数値入力。伝票発行のための数値入力。新商品のスペック数値入力やその他の資料。

とにかくひたすらパソコンに向かったの作業だ。

毎日同じような事をしている。

そのくせ、どうして終わらないんだろう。毎日こんな事をしていれば、なにもする事がない日があったっておかしくないんじゃないだろうか。だけど、そんな日があるはずもなく、終わりのない作業が待っている。

そんな仕事の楽しみといえば、お昼くらいだろう。終業時間の次くらいに待ち遠しく嬉しい時間だ。

なんだか小学校の頃から変わっていない気がする。基本的にお昼休みと放課後を楽しみにしていた。

大人になっても、そういうとこって変わらないみたいだ。

チャイムが鳴ると他の人たちは、次々と外に出ていく。ほとんどの人が外食だ。そのためか食堂はない。もしくは、食堂がないからみんな外に行くのだろうか。もっとも社員の半数以上が外回りの営業だったりするので、事務関係の人たちしかいないのも理由だろう。

外食派がほとんどだが、私は少数派のお弁当派だ。お弁当派でも半々くらいに分かれていて、手作り弁当派とコンビニ弁当なんかの出来合い派と、パンなどのその他派があったりする。

私は手作り弁当派だ。といっても、キャラ弁とかそういう凝ったものじゃなく、夕飯の残りが基本だ。というか、お弁当のためにわざと多めに作っているわけだけど。その方が経済的だし。一人分って余計に高くつく。

さて食べよう。

……とその前に飲み物を準備しようと、給湯室に向かう。

暑いので冷たい飲み物もいいけれど、食事時は温かいものの方がいい。それに、どうせ給料から雑費として天引きされているなら、お茶やコーヒーは飲んでおいた方がいい。

お茶の準備をしていると、外から話し声がした。どうやら、外食派が戻ってきたらしい。すぐに戻ってきたという事は、なにかを調達してきたのだろう。近くにコンビニがあるから、きっとそこだろう。声からするに、同じ事務の後輩二人だ。

「黒沢さんってさ、離婚したって聞いたけど、本当？」

久しぶりに聞いた名前に、ちょっと意識が向いてしまう。これは盗み聞きじゃない、聞こえてしまっているだけなんだ。——と、誰に対してなのか、意味のない言い訳をする。

「本当らしいよ。早かったよね」

「早すぎでしょ。っていうか、離婚の理由ってなんだったわけ？」

「さあ？ 性格の不一致とか、そういうのじゃないの？」

「でもさ、浮気とかだったりして」

「あり得るかも。でもさ、さすがに寿退社して、復帰するなんて無理だよ」

「そうか。無職になっちゃったんだ」

「寿退社の報告の時は、あんなに幸せそうだったのにね」

「そうそう。ちょっと羨ましかったな……。自分の時は、結婚しても仕事は続けようかな」

「その方がいいかも。主婦になってもリスク高いし」

「その前に、お互い相手がいないんだけどね」

あははと笑いながら、空いている会議室に入っていった。どうやらこっそり食堂感覚で利用しているらしい。

それにしても、本人がいないからって、あけすけすぎる気もする。

そこそこ慕われていた気がするけれど、所詮は上辺だけだったのか。それとも、女は結婚した女には冷たいのか。今回はどっちのパターンだろう。

「女の会話って、相変わらず怖い」

自分も女だけれど、それは棚上げだ。

っていうか、茶髪ロングって離婚したんだ。

あの二人じゃないけれど、早すぎでしょ。だって、寿退社したのって夏前だったから、三ヶ月か四ヶ月くらい前だったはず。

スピード結婚なんだ、なんて自慢そうに言っていた茶髪ロングの顔を思い出す。すごく幸せそうで、私も少し羨ましく思った。その時は、まさかスピード離婚をするなんて、想像もしていなかっただろうな。そもそも、離婚するかもなんて思って結婚はしないか。

別れる事を前提に付き合わないよね、普通は。経験がないからよくわからないけれど。

「どっちにしろ、私には関係ないか」

茶髪ロングが結婚しようが離婚しようが、私の生活にはなんの影響もない。彼女が担当していた仕事は、別の人が引き継いだので、本当になんの影響もなかった。デスクが一つ無人になったな……と思っただけだ。そのデスクは、しばらくすると物置状態になった。これは現在進行形だ。

そんなどうでもいい事は、本当にどうでもよかった。

お茶を煎れると、自分のデスクに戻ってお弁当を食べた。

その日は、仕事帰りにドーナツ屋さんに寄ってみる事にした。なんだか無性に食べたくなった。誰だってそういう事があるはず。普段はこういう寄り道はしないのだけれど、今日は舌がドーナツになっている。

久しぶりに入ると、夕方セールとやらをしていた。ちょっとラッキーかも。

そもそもどういうドーナツがあるか覚えていないので、ショーケースを見ながら選んでいると、突然ポンと肩を叩かれた。

「すみません」

もしかして購入の邪魔でもしてしまったのかと思い、ほとんど反射的に謝る。

「ごめんなさい。……やっぱり時任さんだ」

へっ？ と予期せぬ場所で自分の名前を呼ばれ、本当に鳩が豆鉄砲を食らった顔になった。

一瞬わからなかった。

「……黒沢さん？」

黒髪になっているけれど、その相手は茶髪ロングに見えた。髪色だけでもイメージは全然違う。間違っていたらどうしようと思いながら恐る恐る名前を言うと、相手は顔をほころばせる。どうやら正解だったらしい。

「久しぶりじゃん」

そのテンションの高さに、私はとてもじゃないけれどついていけない。

黒髪になっていたのも記憶よりも落ち着いた雰囲気になっていたが、内面がそう簡単に変わるわけじゃないらしい。

「そうだ。久しぶりの再会を祝して、ここは奢っちゃおう」

そう言うなり、彼女は勝手に二人分のドーナツとドリンクを注文する。

そういえばドーナツを選んでいる最中だったのを思い出す。

「ほら、あそこ空いてる」

と、彼女はトレイを持って、空いているテーブルに向かう。私は流されるままだった。

「みんな元気してる？」

彼女は開口一番そう言った。無難だ。無難すぎる。そう思ったが、自分は会話の糸口さえわからなかったのも、彼女をどうこう言う事はできない。

「まあ、変わらないと思う」

実際そうだと思う。そもそも彼女が退社して数ヶ月だ。そんなに変化があるとは思えない。

いやいやそれよりも、私は彼女が苦手だ。そもそも正反対のタイプだ。同じクラスにいたとしても、絶対に接点のないグループだ。会社だと仕事上どうしても接点はあるし、会話もあるわけだが、できればそれすらしたくない。

そんな彼女とテーブルを挟んでドーナツ？　なんて状況だ、これ。一種の拷問だ。私なにかした？

この罰ゲームタイムをどうにかして。

どうすればいいのかわからず、とりあえず目の前のドーナツをパクつく。

「あっ」

かぶりついた途端、中のクリームがピョット出てきた。クリームが中に入っているものだったのか。自分で選んだものじゃないからな。

「なにしてんの」

茶髪ロングが笑う。あっ、今は黒髪ロングか。いやいや、どうでもいい。

私は慌ててペーパーナプキンで口元を拭う。

「あんたって、そんなドジキャラだっけ？」

「……………」

ドジキャラってなんだ、キャラって。あんたのせいだ。

言ってやりたいけれど言葉にできない。

「仕事辞めてさ、本当に失敗したかもって思ったんだよね」

唐突になにを言い出すんだ？

「いきなりね」

「いいじゃない。ちょっと話聞いてよ。ドーナツ奢ったんだからさ」

勝手にした事で、奢って欲しいと思ってもいなかったんだ。いっそドーナツ代を渡してこの場を去ろうかとさえ思った。

「仕事ってつまらないと思ってたんだけど、辞めてみると懐かしいんだ」

完全に語りモードになっている。しょうがない。諦めて聞くしかないか。

「仕事を辞めて家庭にはいるって、女の幸せの一つだと思ってたんだよね。もちろんさ、キャリアを積んで、バリバリ働くのもありだと思うんだけど、ぶっちゃけあの会社でそれはないでしょ。そういうのってさ、大企業で働く人がする事じゃん」

彼女は抹茶ラテを飲む。

甘いものに甘いものという組み合わせに、自分が飲んでいないにもかかわらず胸焼けしそうだ。

。

そう思いながら自分のドリンクを飲む。

「うっ」

思わず吐きそうになった。私のも同じ抹茶ラテだった。忘れていた。ドリンクも彼女が注文したんだ。こんな組み合わせで飲めるなんて、彼女の舌は死んでいるんじゃないだろうか。

なにか口直し……と、別のものを買に行こうとしたが、彼女は話を続ける。

「だからさ、主婦もいいかなって思ったんだ。好きな人のために家庭を守る。結構いい感じじゃない」

私が相づちすら打たないのに、気にせず話を続ける。席を外すタイミングがない。

私にとってどうでもいい話よりも、今はこの甘ったるくなった口をなんとかしたい。苦めのエスプレッソが恋しい。

「主婦ってさ、適当にすれば基本は自由じゃない。掃除と洗濯はぶっちゃけ毎日じゃなくても

いいわけだし、旦那は夜が遅いから外食も多かったから、基本は自分のご飯だけだし。ニートってこんな感じなのかなとか思っちゃったり」

なにが面白いのかわからないけれど、彼女は楽しそうにしている。

ちょっと羨ましいかも……と思えなくはない。収入があればそうしたいくらいだ。

だけど……とも思う。それはそれで退屈そうだ。なにかしら受動でもいいから、する事がないとなにをすればいいのかわからなくなる。年末年始やお盆なんかの、一週間くらいの休暇だって、私はなにをすればいいのかわからないのに。

みんなは旅行に行っているようだし、私もそうした事はあったが、それはそれで楽しいけれど疲れる。

だいたい、そういうのは数日だからいいのだ。さすがに毎日には厳しい。でも——お金の心配さえなければ、世界一周とか面白そうだ。いろいろな場所に行けば飽きる事もないだろうし。しかし現実には厳しい。資金面もそうだけれど、私の語学力ではどうにもならない。やっぱり旅行するなら国内しかない。だとしたら、日本一周もいいかも——なんて考えている間も彼女の話は続いていた。

「でもさ、主婦業って大変な時もあるけど、時間を作ろうと思えば、基本は自由だからいいよ」あれ？　と思う。

彼女は楽しそうに新婚生活について話している。周囲にもそう聞こえるだろう。彼女もそのつもりだろう。

だからこそその違和感だった。

少し前に給湯室で聞いてしまった会話——あれがなければ、別になにも思わなかつただろう。新婚の人が楽しそうに語るの、ある意味では普通だと思うし、鬱陶しいけれどしょうがないと諦める。

「黒沢さんってさ、離婚したって聞いたけど、本当？」

あれが単なる悪口やデマの類じゃなくて本当なら、彼女がそういう生活をしているはずがない。

さて、私はどういう態度をとるべきなのだろう。

このままなにも知らない振りで、彼女に話を合わせるべきだろう。実際これが正解だろう。

だけど、心のどこかで彼女をやりこめたいという気持ちがある。別に恨みがあるわけではないけれど、なんとなくそう考えてしまう。

離婚したんでしょ——ああ言ってやりたい。

だけと言えない。そもそも、あの会話が本当だとは限らない。単に彼女を貶めるだけのものかもしれない。だったら、ここで迂闊な事を言うわけにはいかない。

「幸せそうね」

私がそう言った時、彼女は少し驚いた顔をしたが、すぐに笑顔に戻る。

「え、ええそうね。幸せよ。ところで、時任さんは今、彼氏は？」

彼女はいきなり話題を変えてきた。

「いないけど」

「もしかして、まだだったりするの？」

まだ？ 一瞬なんの事かわからなかったけれど、彼女の思考からなんとなく推測できた。性交渉の事でしょうね。

「……………言う必要はないと思うけど」

それは肯定と同じ意味だと気付いたのは、言うてからだった。それでも、実際に言うよりはマシだと思う事にした。

「そっか……………K I R I Nね。まあ、らしいっちゃらしいけど。あの職場じゃ、出会いなんてないしね。社内恋愛なんて考えられないし」

それには同意。後輩の男性社員は、女の子が入ってくる度にそういう視線で見ているようだが、実際にそうなったという話は聞かない。もっとも、私がそういう話題に疎いという事もあるわけだけれど。

「なんだったら紹介してあげてもいいんだけど、時任さんに合いそうなタイプってあんまり知らないんだよね」

余計な親切。

「遠慮しておくわ」

黒沢さんの知り合いなんて、私とは別世界の人たちじゃない。一緒にいても疲れるだけだ。

「う〜ん。そう言われると、ちょっと紹介したくなっちゃうわね」

どういう思考をしているんだ？ 断ったら紹介してくるなんて…………。嫌がらせだろうか。なにか、彼女に恨まれるような事なんかあつたらうか。それとも、特に理由のないイジメみたいなものだろうか。なににせよ、本当にやめて欲しい。

「そうだ。一緒に街コンに行ってみる？」

彼女は名案だとばかりに言う。

はあ〜。やっぱり大人の対応をするべきだろう。

「あれって既婚者は参加できないんじゃないの？」

私が指摘すると彼女は、しまった…………という表情になった。あからさますぎて清々しい。その表情で、あの噂が真実なんだろうと思えた。だからといって、なにか関係が変わるわけではないけれど。

「そ、そうだよね。でもさ、誤魔化しちゃえばいいんじゃないの？ そんなのいちいち確認しないでしょ」

確かに戸籍謄本でもない限り、既婚者かどうかなんてわからない。婚姻関係でなく恋人関係なら完全に自己申告だ。証明のしようがない。

「そうだろうけど、真剣な人たちに悪くない？」

「そういう人もいるだろうけど、ほとんどが単にやる相手を探してるだけでしょ。とりあえずのカレカノなんだし、いいじゃない」

偏りすぎというか、偏見もいいところだろう。真剣に結婚相手を探す人が大半だと思う。

「幸せなんでしょ。不倫はよくないわ」

テンプレとしか思えない事をあえて言う。彼女が求めているのは、こういう答えだろうから。

「ほとんど家にいないからさ、最近ご無沙汰なんだよね。バレない程度だったらいんじゃない」

よくないでしょ。

そんな事を言っても、どうせ聞きはしないだろうし、こういう雰囲気<sup>に</sup>酔っているだけだろう。本来なら相手にする必要もないんだけどな……。

とりあえず、残っていたドーナツをたいらげる。

「K I R I Nのあんたにはわからないでしょうけど、そういうのってあんまりないから。結構こっそりやってたりするもんだし」

「そういうものなの？」

別にそういうものに夢を持っているつもりはないけれど、さすがにそれは考えにくい。それが本当なら浮気問題で騒ぎになったりしないだろう。

ただ、彼女の周囲はそういう環境だったのだろう。所詮、人は自分の周囲の世界が基準になるわけだし。

「それよりも、さっきから言ってる『キリン、ってなに？』

私がキリンとはどういう事だ？ まさか首が長いとか、そういう事じゃないはずだ。

「あれ？ 知らない？ <sup>彼氏いない歴イコール年齢</sup> K I R I N」

彼女はサラッとそう言った。

「……………」

ポカンとしてしまう。

「そんな言い方するんだ」

一種の隠語だろう。それにしても、不思議というか、全く関係ない事に聞こえる見事なものだ。まったく誰が考えたんだろう。

「言わない？」

言われて私は首を振る。

「初めて聞いた」

そもそもそんな言葉を使う場面がない。

でも、私以外はそれなりに使うのだろうか。公の場でそんな事を言えなかつたりするから、そういう隠語ができたのだろうか？ いやいや、きっと私みたいに、意味がわからない人を小馬鹿にするためだ。後ろ向きというか、ヒネた考えかもしれないけれど、一度考えてしまうと、そうとしか思えなくなった。

「まあ、そんなのはどうでもいいの。せっかくだしさ、街コンに参加してみようよ。よさげなの探しておくから」

そう言って、彼女は携帯電話を取り出す。

ん？ と私が戸惑っていると、

「連絡先。よく考えたら、個人的な連絡先の交換って、してなかったじゃない」

そうなのだ。私は会社の人とは、ほとんど連絡先を交換していない。上司や業務上必要な人たちだけだ。なので、同期だからというだけで、交換はしていなかった。

「じゃあ、これ」

と、連絡先の交換を終えると、彼女は残っていたドーナツを平らげ、甘ったるい抹茶ラテを飲みきり、これから用があるんだ、と先に店を出て行った。

「……………なんだったの？」

なんだか嵐のような時間だった。

「はあ〜」

妙に疲れた。これなら普段の業務の方が楽かもしれない。

「そうだ。口直し口直し」

甘ったるくなった口の中をリセットしようと、私はカウンターに向かいホットコーヒーを注文した。さすがにブラックはつらいので、砂糖とミルクを少しだけ入れた。

## 街コンへの誘い

---

そんな嵐の様な出来事を忘れていた翌朝、携帯の電源を入れるとメールの受信があった。またどうでもいいダイレクトメールかと思いきや消しそうになったけれど、表示されている名前を見て指を止める。

黒沢さんから早速の連絡だ。

そういえば、交換したのだから挨拶くらい……と思ったけれど、時間を見てため息を吐いた。

なんて時間に送っているの、彼女は。

表示されているのは午前四時過ぎ。私にすれば……というか、世間一般的には眠っている時間だ。こんな時間に、彼女はいったいなにをしていたのだろうか。

きっと挨拶かなにかなだろうけれど、一応メールを開けて確認する。

「……………」

メールを読んで私は絶句した。そして、二度ほど読み直す。もちろん、内容が変わるわけではない。

「嘘でしょ」

そこに書かれていた内容は、結構な衝撃だった。

「よさげな街コンあったからあ、申し込んでおいたよお、

そこでようやく、昨日の会話の内容を思い出した。

「社交辞令じゃなかったんだ」

その場だけの会話と思っていたので、ちょっとどうすればいいのかわからない。

一緒に書かれている日にちは来週末だった。

「早すぎでしょ」

いやいや、それよりも参加決定とはどういう事だ。私に予定があったらどうするつもりなんだ

。

なにせよ断ろうと電話をかける……が留守電になっていた。

きっとまだ寝ているのだろう。しょうがないのでメールを送っておく。

昼休みになった瞬間、電話の着信があった。普段はほとんど鳴らない電話に、私は一瞬それに気付かなかった。画面を見ると黒沢さんからだった。

『今からお昼だよね』

もしもし、という前に彼女が話しかけてきた。

『電話じゃなんだしき、ちょっと出てきてよ。今ね、近くの公園にいるからさ』

どうやら彼女は、会社近くの公園にいるらしい。あそこで食べている人もいるようだが、私はあまり行った事がない。

以前に勤めていたので、会社のタイムテーブルを知っているからこそ誘いだ。しかも、私が常に一人で食べている事も知っているはずだ。

厄介だ。

率直にそう感じた。

私、行けない……と言う前に、

『待ってるからね』

そう言って切ってしまう。

「冗談でしょ」

私にできるのは、恨めしい目で電話を見るだけだ。

いっそのまま行かないのもありか……と思ったが、彼女の事だから乗り込んできそう。

これは絶対に行かないといけなさそう。

まるでストーカーに追いつめられているかのようだ。きつとこんな気分じゃないだろうか。

渋々私は、お弁当を持って外に出る事にした。

「おっ、来た来た」

私が着くと、彼女は立ち上がり手を振ってくる。恥ずかしいからやめて欲しいんだけど。彼女はもう少し羞恥心を身につけるべきだ。

「呼び出さないで欲しいんだけど」

「仕事が終わるまで待てないし、時任さんってずっと一人でお昼だったから大丈夫でしょ」

私の苦情を無視した挙げ句、なにが大丈夫だというのか。

「ほら、座って座って」

彼女はベンチに座って、隣をパンパンと叩く。そんな彼女の隣には、近くのコンビニの袋があった。

一緒に食べる事は決定事項となったようだ。

そもそも、一緒に働いていた時には、こういう事は全くなかった。それなのに、彼女が退社してからこういう機会があるとは。しかも全く嬉しくない。

「さて、お昼だお昼」

彼女は楽しそうにコンビニ弁当を取り出す。特撰弁当と書いてある。ちょっとした贅沢だろう。

「おいしそう……」

彼女は楽しそうにコンビニ弁当を食べ始める。

「時任さんも食べなよ」

「え、ええ……」

彼女に促されて、私は自分の手作り弁当を食べ始める。そこでふと思いついた事があったので実行する事にした。

「そういえば、黒沢さんってお弁当は作らないの？ ほら、旦那さんの分と一緒にとか」

そう言ってやると、彼女は一瞬表情を強ばらせたが、すぐにいつもの笑顔に戻った。

「旦那はいつも外食なんだよね。冷めたご飯が嫌いなんだ。それに、付き合いで食べに行く事が多いから、自由が利く方がいいんだって」

「そうか。そうなんだ」

見事な返しだ。

咄嗟にしては及第点の答えだから、きっと結婚時代は本当にそうだったのだろう。そうでもなければ、すぐにそういう答えが出てくるはずがない。

一瞬でも彼女のあんな顔を見れたのでよしとしよう。

「黒沢さんは、相変わらず手作り弁当なんだね。自分の分だけって大変じゃない？ 外食の方が楽じゃん」

ちょっとした反撃かな。

「慣れればそうでもないかな。外食だと高くつくからね。自分で作れば、ある程度やりくりできるから」

「すごいね。ちょっと無理だわ」

そうでしょうね——どれだけそう言いたかったか。その気持ちをなんとか抑える。

そう言いながら、彼女はコンビニ弁当を食べ続ける。たまに見ると美味しそうに見える。特撰だし。

私も自分のお弁当を食べる。

「今度の街コンなんだけどさ」

そうだった。それがメインだった。あまりに気乗りしなかったので、完全に忘れていた。そもそも、それで彼女に呼び出されたんだって。でなければ、こんな場所でこんな事をしていない。

「それなんだけど——」

断ろうとしたが、彼女がそれを遮る。

「時任さんって、彼氏もないし予定は大丈夫でしょ。ギリギリ滑り込みで申し込めたんだから」

妙に恩着せがましい気がする。頼んでもいないのにね。彼氏がいなくても予定がある事だっているのに、彼女の中では、彼氏＝予定という風になっているのだろう。

「それでさ、時任さんって服持ってる？」

勝負服ね。それなりの外出着はあるけど、ドレスチックなのはないな。

「その反応はなさそうね」

私が考えていると、彼女は畳みかけるように言うてくる。

「じゃあさ、今週末なんてどう？」

なにがどうだというのか。まさか、一緒に買い物とかそういう事じゃ……って、それしかないか。

「なにか予定あったりする？」

ここは本当の事よりも、優しい嘘の方がいいかもしれない。

「今週末はちょっと……」

断ろうとしたが、いい言い訳が思い浮かばない。

「なに？ デートってわけじゃないだろうし、まさか休日出勤なんてあり得ないでしょ」

彼女の頭の中では、休日＝デートになっているのだろう。そして業務状況を知っている彼女には、仕事という嘘は通用しない。

「ちょっと所用があって」

「なに？ 時間作れそうにない？」

どうして、そんなにしつこく迫ってくるんだ？ そもそも、どうして私なんだ？ 一緒の会社にいた頃は、目が合う事すらほとんどなかったのに。

そもそも、彼女とは世界が違うのだ。

「しょうがないか。でも、当日はビシッと決めちゃってよ」

彼女はニヤニヤしている。

ああ、なるほど。私を引き立て役にしようって魂胆ね。確かに地味な私なら、派手な彼女の引き立て役には最適だろう。とにかく、簡単に引き下がってくれてよかった。

「そろそろ戻らないと」

お昼休みもそろそろ終わりだ。

「もうそんな時間なんだ。しょうがないか。ねえ、また一緒にお昼どう？ たまにはどこかのお店に行かない？」

「えっと……」

「たまにはいいんじゃない？ お弁当作りだって休めるし」

どう断ろうか考えていると彼女が続ける。

「いいじゃない。大変でしょ？」

「別にお弁当作りは大変じゃないから」

日課になっているので、むしろ作らない方が変な感じだ。

「そう？ でも気分転換にはなるんじゃない？」

ならないならない。むしろ気が重くなる。

「しょうがない。じゃあまたお弁当にしようか。またね」

そう言うだけ言って、彼女は空になったコンビニ弁当を、公園のごみ箱にぶち込んで帰って行った。

「……………疲れた」

リフレッシュするはずのお昼休みが一番疲れた。とにかく、午後の仕事を頑張ろう。

それから、さすがに毎日は遠慮したのか、一日おきに彼女からメールで呼び出された。

ああ、同性でもストーカーでいいのだろうか。

付きまとわれているってほどでもないけれど、わりとそれに近い気がする。

なにを言っても聞かない彼女を相手に、私は耐えるしかないと悟った。

街コンさえ終われば、もうこういう繋がりはなくなるだろう。その程度の縁でありたい。

そんな平日が終われば、彼女に会わなくていい週末だ。来週は街コンだ。土曜日開催なのは、きっと翌日の日曜日に、早速デートができるからだろう。

「どうしたものか」

考えるだけで億劫になるけれど、それとは逆の思惑もあったりする。

引き立て役だと信じている私が、それを裏切ってやるのもいいかもしれない。

さて、どうしよう。

どうせ興味がなくて、本気で相手を探しているわけでもないのに、空気のように背景のようになっただけでもいい。私にはそれが似合っている。

「だからこそ、かもね」

イメチェンというほどではないにしろ、ちょっと頑張ってみようかな。

思い立ったら行動でしょ。

他の人にはわからない程度にしておこう。

そういうわけで、久しぶりに美容室に行く事にした。恋人がいれば頻繁に整えたりするのだろうけれど、基本は伸ばしている私は、あまり行く事が無い。普段はひつつめなので、髪型にこだわりもない。

だからといって、派手なイメチェンをするつもりはない。ヘアカラーを変えたりなんて、絶対するつもりはない。普段っぽさのまま、イメチェンをするつもりだ。だからしてもらったのは、髪を少し梳いてもらうくらいだった。ふわっと軽くして、野暮ったさを軽減させる。

その後、コンタクトレンズを調達に行く。基本は眼鏡なので、抜群のイメチェンになるはずだ。

初コンタクトなので緊張しつつ、なんとか入手できる手筈が整った。

その後は、普段は行かないブティックに行き、派手すぎないながらも、バッチリと決まっている服をチョイスする。上から下まで一式揃えると結構な出費だったけれど、これはこれで楽しかった。

こんなに買い物をしたのは初めてかもしれない。こういう休日の過ごし方ができた事だけは、彼女に感謝してもいいかもしれない。

休日が終わって出勤しても、私のイメチェンは誰にも気付かれなかった。元々私に興味がある人がいないという事も影響しているだろうけれど、黒沢さんも気付いている様子はなかった。彼女の性格上、少しでも気付けば、私が街コンに乗り気になっているとはしゃぐだろう。

もしかしたら気付かれるかもと思っていた彼女に気付かれなかった事で、当日が楽しみになってきた。先週と違い、彼女とのお昼もなんだか楽しかった。当日、彼女がどんな顔をするのか楽しみだ。

## 街コンを支配してやる

---

街コンは、駅から少し離れた飲食店街で行われる。

黒沢さんはまだ来ていないようだったので、先に自分だけ受付を済ませておく。

初めての事によくわからないままだったが、どうやら参加店舗でそれぞれテーブルに相席し、自由に会話をするようだ。同じ店舗に居続けてもいいし、違う店舗も回ってもいいらしい。

バル形式になっているようで軽食は可能だ。

受付で参加証となるシリコンバンドを受け取り、右手首に装着する。恋人探しだけだと思っていたのだが、どうやら友達や趣味仲間募集の人もいるらしかった。もちろん、本気で婚活をしている人も少なくない。

それぞれの目的によってバンドの色が違うようだったが、渡されたのはピンク色のものだった。どうやらこれが恋人募集の印らしい。

私としては趣味仲間とか友達募集でいいのだが、事前に申請しているものになるらしく、変更はできそうにない。前もって知っていれば……と思わなくもない。

待ち合わせの時間を過ぎても、彼女は現れない。一人でいる私は、受付に来た来た人たちにチラチラ見られている。まるで動物園かなにかの見世物になった気分だ。

街コンは同性のペアで行動しなければならないルールらしく、私は彼女が来るまでこの受付で待っているしかない。

彼女らしいといえればそれまでだが、自分で誘っておいて遅刻はないだろう。

参加できずに待ちぼうけのこの状況にイラついている自分に驚く。そもそも乗り気じゃなかったはずなのに。参加するつもりなんかなかったわけで、このままキャンセルでもいいはずだ。参加費が無駄になるけれど。

そうだったはずなのに、今は無性に参加したい。

——いや、正確には彼女の驚く顔が見たいんだ。それだけだ。出会いにそれほど興味はない。

結局、彼女が姿を見せたのは三〇分後だった。

当然私はすぐに黒沢さんを見つけたのだが、彼女は私を見つける事ができず、キョロキョロと辺りを見ている。そして見つけれずにいると、安堵しているように見えた。どうやら私も遅刻していると思ったのだろう。携帯を取り出してメールを書いている。

ちょっと面白かったので、そのまま見ている事にした。

携帯が震える。メールを受信したようだ。こういうイベントなので、音を消して正解だった。

私は届いたメールを見る。

「今会場だけど、もしかして遅刻？ ドタキャンは勘弁してよね、

遅刻したのはそっちでしょうに。ドタキャンしたところで、後から色々付きまとうでしょうに。

このままだと、彼女は永遠に私に気付かないだろう。

「遅かったわね」

私が近付いて声をかけると、彼女はキョトンとしていた。

「……………」

もしかして昔の知り合いだろうか——そんな風に考えているのだろう。この状況でも、まさか目の前の女が自分が探している相手だとは気付いていないようだ。

「ごめんなさい。ちょっと今、人を待ってるんですよ」

なんとかこの場をやり過ごそうとしているのが丸わかりだ。あまりにあからさますぎて滑稽だ。

してやったりという感じだが、ここまで気付かれないのも、それはそれで傷つく。自分でも面倒だとは思っただけけれど。

「こっちが待たされたんだけど」

あなたは待ってないでしょ、と目で訴える。

「えっ？ あたしが待ってるのは……って、もしかして時任さん？」

ようやく私の名前が出てきたが、まだ混乱しているようだ。

「そうだけど」

私はなんでもないように言う。

「嘘……でしょ。別人にしか見えないんだけど」

別人ね……。まあ、それを意識したわけだけれど、そこまでか。髪型を変え、化粧をして、着飾って、まさに変身といった感じだ。

眼鏡をかけている人がコンタクトにすると、それだけで別人感があるが、そういう事を除外してもわからなかったのだろう。してやったりだ。

「普段からそうすればいいのに」

「必要ないもの」

オフィス仕事にそこまで必要ない。別に社内の男を落とそうとも思わないし。

「そっか。そうだよ。あのオフィスじゃね……。でもさ、今の格好だったら、合コンとかセッティングするよ」

そもそも今は街コンの最中なのを忘れてるんじゃないだろうか。ここでそういう話題はどうだろう。

それに、私はこういうのが苦手だ。今日は特別。

「それにしても、本当に別人だよ。ちょっと想定外」

なんとか落ち着こうとはしているみたいだけれど、動揺はなかなかおさまらないらしい。少し声が震えている。

「せっかくだから。さあ、あなたが遅れたから少し出遅れてるし、早くお店に行きましょう」

「そ、そうね。今日はいい男を探さないかね」

私はそれには答えず近くの店に向かう。

そもそも興味のない私と、婚姻関係があるという設定の彼女では、ただの冷やかashiでしかないはずなのだ。それでも、今の私は楽しかった。興味がないのは本当だし変わっていないけれど、

今まで知らなかった世界だからワクワクする。

会場の一つである近くのバーレストランでは、あちこちの席で会話が盛り上がっているようだった。

もちろん一般のお客さんもいるが、やはり街コンスペースが設けられている事もあり、普段とは違う雰囲気なのだろう。どのみち、こういう機会でもなければ、私に来る事のない店だ。

「あっ、あそこ空いてる。疲れたからさ、飲み物もらって待ってようよ」

彼女が空席を見つける。

「そうね。そうしましょう」

ずっと待っていて疲れていたのも、とりあえずひと休みは賛成だ。

誰かがいるテーブルにいきなりは緊張するので、こうして相手を待っているのもいいだろう。

私たちは飲み物と軽食を受け取り、そのテーブルに座る。

「……………」

だけど、なんだか落ち着かない。

普通だと向かい合わせに座るのだろうけれど、この場ではそうはいかない。相手が来る事が大前提なので、二人は横並びに座らなければいけない。これはルールとして言われている。

「それにしても、やっぱり別人だとしか思えないんだけど。時任さんのお姉さんとかじゃないですよね」

ふざけ  
巫山戯ているのか、それとも本気なのか、微妙な感じで彼女が訊いてくる。

「本人よ。わざわざ替え玉を使うはずないじゃない」

私はジンジャーエールを飲みながら答える。爽やかなショウガの風味と炭酸が口の中に広がる。

。

「そうよね。せっかくの相手探しに別人はないよね。それに、気合いも入るか」

彼女はドバドバと砂糖を入れたカフェ・オ・レを飲む。

確かに気合いは入れているが、それは彼女が思っているものとは別方向だ。

「いい男いないかな……」

彼女が物欲しそうに見ていると、私たちの方に来る一組があった。

「こんにちは」

「ここいいよね」

それほど遊んでいるようには見えないが、それなりに場慣れしているようだ。二人は自然に私たちの前に座った。

「こんにちは」

彼女はサラッと笑顔で返すが、私は頷くだけだ。

二人は一見すれば真面目そうな爽やか系だ。だけど、どこかチャライ雰囲気がある。もしかすると、今日に合わせて爽やかキャラを作っていて、普段は違うのかもしれない。

「ねえ、いい感じじゃない？ 落ち着いてる感じだし、時任さんにも合いそうじゃない」

確かに派手な感じは苦手なので、こういう落ち着いた雰囲気の方がいい。だが、目の前の二

人は、そういう皮を被っている。しかし、彼女はそれに気付いていないようだ。

「こういうのって初めてで、すごく緊張してるんだよね」

そう言いながら、一人一人便宜上、チャラ男Aでいだろう——がグラスの水を一気に飲む。明らかにポーズだ。なのに彼女はそれに気付きもしないのか。

「そうなんだ。あたしたちも初めてで、ちょっと緊張してるかも」

嘘は言っていないが、妙にノリノリなのは、こういう場では当たり前なんだろうか。それにしても、ちょっとは年齢を考えた方がいいんじゃないだろうか。いい歳してどうかと思ってしまう。

「彼女、なんか、すごく緊張してたりする？」

私に向かってそんな事を言ってくるが、私は俯き気味で頷くだけだ。

本当に相手にしたくないという気持ちが半分、こういう方が受けるんじゃないかという思惑が半分。さて、どうなるか。

「わかるわかる。……って、そういや、俺たち自己紹介してないじゃん」

そう言って名乗るが、私は全く興味がないのでスルー。私の中ではチャラ男Aで充分だ。

もう一人も挨拶しているが、彼は便宜上チャラ男Bでいだろう。

チャラ男Aに少し圧倒され気味というか、少しだけおとなしそうな感じはある。だけど、充分すぎるくらいチャラオーラが出ている。

「あたしは美雪<sup>みゆき</sup>。で、こっちは美佐子<sup>みさこ</sup>。よろしく」

黒沢さんが勝手に紹介する。まあ、名前くらいはしょうがないか。

「よろしくお願いします」

最低限の挨拶だけを済ませる。

「ねえねえ、美佐子ちゃんってさ、本当にカレシいないわけ？ そんなに可愛いのに？」

「そうだよ。すっげえ可愛いのにカレシいないとか、マジ？」

チャラ男Bが話しかけてくると、チャラ男Aも便乗するかのようには話しかけてくる。

「いませんよ」

「この子、本当にいないんだって。っていうか、あたしも募集中」

私がぼそりと答えると、黒沢さんが妙に乗り気で会話に入ってくる。

「マジで？ つうか、別れたばっかとか？」

チャラ男Aがグイグイ質問してくる。

「それがね、この子K I R I Nだったりするわけ」

黒沢さんがいきなり突っ込んだ話をしだした。これって普通だったりするの？ なんだか恥ずかしいというか……とにかく、話題にしないで欲しい。

「マジで？ いやいや、冗談でしょ。ネタとしか思えないって」

チャラ男Aが本気で驚いている。冗談とかネタって、ちょっと失礼というか、無反応でもなんだか失礼な感じ。

それよりもK I R I Nって本当に使われているんだ。常識だったのかな。

「それが本当なんだよね……」

「それって、もしかして女が好きとか？ って、だったらこういう場には来ないか」

「それがさ……」

「くろ……美雪さん、自分の話の方がいいんじゃない？」

私の話でこれ以上盛り上がられても困る。確かに黒沢さんを脇役にしてやろうとは思っただけ、さすがにこういう扱いは無理だ。これでは私にとっての拷問だ。

ここはやっぱり、慣れている者同士で話してもらおう。

「そうだ。連絡先、交換しない？」

チャラ男Bが携帯電話を出してきた。

大人同士の事なので、連絡先交換などは自由だ。

「そうそう。オレもしよしよ」

「しよしよ。あたしのはね……」

そう言いながら、連絡先の交換をしている。

「ほら、美佐子も出しなよ」

あまりというか、全然乗り気はしないが、ここで拒否するのも大人げないと思い、渋々携帯電話を出して、それぞれ連絡先の交換をする。

「それにしても、美佐子さんみたいな綺麗な人がフリーとかさ、もったいないって。こうして会えたのって運命だと思うんだよね」

チャラ男Bが臆面もなくそんな事を言う。

「おいおい、抜け駆けはズルいだよ。運命だってんならオレだよ」

チャラ男Aまでそんな事を言い出す。

「いやいや、俺でしよ」

相手が相手なら嬉しい事なんだろうし、本当なら喜ばしい事なんだろうけれど、残念ながら今は面倒なだけだ。

ただ、完全に黒沢さんを蚊帳の外にできたのは、ちょっとだけ小気味いい。思惑通りだった。だけど、思惑通り過ぎるのは、自分にも精神的なダメージがあって、おあいこというところだろうか。

さて、どう断ろうか。選択肢なんかなく一択だ。

「あたしたち、まだ来たばっかだし、色々出会いを求めたいから。また連絡するね」

なんと黒沢さんが助け船をだしてきた。まあ、本人にそのつもりはないんだろうけれど。

「そうだね。また連絡してよ」

「待ってるからね」

そう言って、二人はまた別の相手を探して席を離れた。

「ったく、なんなの」

二人がいなくなった途端、黒沢さんが愚痴り始める。明らかに、自分が蚊帳の外だったのが不満なようだ。

「二人とも時任さんの話ばっかじゃん」

いやいや、あんたも私の事を話題にしていたじゃない。言ってやりたい。

「まあ、しょうがないんじゃないの」

つい本音がこぼれた。

一番強烈なものがクリーンヒットだ。

「それにしても、ホントに化けるわよね。普段、地味にしてる方が、ギャップがあっただけいいのかな……。でも、さすがに、あの地味キャラは、あたしには無理だわ」

彼女にとって最大級のイヤミなんだろうけれど、今の私は全く気にならない。

「見れば見るほど別人にしか見えない。ホントにさ、ずっとそのままではモテるのに。学生の頃とか、ホントになにもなかったわけ？」

「なにも——なかったわよ」

言われて一瞬だけ戸惑った。

「ちょっと間があったけど？ ホントにないわけ？」

「思い出そうと思ったけど、やっぱりないって気付いただけよ」

そう——本当にそういう浮いた話はない。

全くなかったかと問われると難しいけれど、あれは恋と呼ぶにもそこまで育っていない気持ちだった。

## 初恋未満の思い出

---

放課後の図書室は、私にとって楽園だった。

午後の日差しは気持ちよく、さらに夕暮れが迫って来るとするのがたまらなくいい。

ここならば、一人でいても自然でむしろ普通だ。

自習スペースでは、数人が教科書や資料を広げて勉強している。別に試験前というわけでもないのに熱心な事だ。これが試験前だと、自習スペースは満席になってしまう。そして、それ以外の場所にも、にわか勉強家で溢れかえる。そうなると、普段から本を読んでいるような私の居場所はなくなってしまふ。そういう時期を除けば、本当に楽園だ。

だからといって、別に本が好きというわけでもない。本を読んでもらえば時間が潰せるし、ついでに知識も得られる。物語を読む事でその世界を体験する事もできる——という、普通の楽しみ方ももちろんしているのだけれど。

熱心というわけではないので、好きな作家とかこだわりはない。

話題の本はたいてい入ってくるので、とりあえずそういう本をチェックする。熱心な読書家は少ないらしく、競争率は高くない。比較的すぐに読む事ができる。

そして、だいたい読んでいる人が同じなので、なんとなく顔を覚えてしまふ。お互いそうだろうけれど、特に言葉を交わすわけでもない。

彼もそんな一人だった。

彼に限らないのだが、いつも同じ時間に同じ場所にいる。自然と定位置というものができる。それが当たり前この空間だからこそ、一度気になってしまえばどうしようもない。

適当に読んでいる私とは違い、彼は真剣に読んでいるようだった。大衆文学から純文学まで、様々なジャンルを読んでいる。雑多と言ってしまうとそう、特にどんな本が好きなのかはわからない。

色々なものを読んでいるという点で、私と似ていると思っていた。

言葉を交わさず、会釈すらもなく、視線が合う事もほとんどない関係。そもそも学年やクラスもわからない程度だ。

だからこそ、恋心というものもなく、それぞれの時間を過ごすだけ。片想いですらなかったと思う。

それが当たり前すぎて、だからといってなにかを変えるつもりもなく、なにかを期待していたわけでもない。

青春——そう呼べるものではなかった。

そんな彼との関係に、少しだけ変化があったのは学年が変わってクラス替えがあった時だった。

同じクラスになってはじめて、私たちは同じ学年だとわかった。

彼は大人びて見えたので、てっきり先輩だと思っていた。

少し会話をした時に、彼は私を先輩だと思っていたらしい事がわかった。どうやらお互い様だったらしい。他人からはお互いそんな風に見えていたんだな……と笑い合った。

同じクラスになっても、特に親しく話すわけでもない。特に教室では、全くといっていいほど接点はなかった。

ただ図書室では少しだけ距離が縮まった。

かといって、会話をするには不向きというか、そもそも会話が禁止の場所なので、親しく話すというわけじゃない。お互いに読んでいる本とか、あれが面白かったとか、情報交換をする程度だ。

それだけだったが、そのお蔭で読書の幅が広がったし、今までよりも楽しくなった。

それでも、それ以上の関係にはならなかった。あくまでも図書館だけの関係。逢瀬と呼ぶようなものはなかった。今思い返しても、そういう気持ちは全くなかった。それは断言できる。

ふとそんな事を思い出してしまった。

「どうしたの？　なんだか楽しそうじゃない。やっぱりあるんじゃないの？　初恋くらいあるでしょ。聞かせなさいよ」

「本当になんないんだって」

「嘘でしょ？　カッコいいとか、ないわけじゃない」

「そういうのと恋って違うでしょ。そもそも、そんな風に思った事もないかも」

「同じ学校とかじゃなくてもいいからさ、外を歩いていて、あの人カッコいいとか……」

私は首を横に振る。

「じゃあ、アイドルとかさ。イケメンいっぱいいるじゃない」

「ないわね。そういうのは綺麗な顔だとは思うけど、きっと期待しているものじゃないわね」

ああいうものは、憧れる事こそあれ、恋愛対象じゃないでしょ。世の中には、ファン感情と恋愛感情を勘違いしている人もいるみたいだけれど。

「信じられない。でも、時任さんだったら、そういう事もあるかもって思えるんだよね」

そう言う彼女は、そこはきちんと分別がありそうだ。さすがに恋愛感情はないだろう。

「そう思っていて結構よ」

彼女は見た感じと実際も同じで、ずっと恋をしていたのだろう。付き合っていない期間はあったにしろ、いつも誰かに恋をしていたのだろう。

私からすれば別世界だ。だからといって、うらやましいと思う事はないし、それぞれの価値観があるというだけだ。

私に恋は必要なものじゃなかった——ただそれだけ。

「ここ、いいですか？」

低めの落ち着いた声が出て、二人して声の方を見る。

そこにはスーツ姿というわけではないが、清潔そうなシャツとジャケットを羽織ったきちんとした服装の、いかにも真面目そうな二人組がいた。

腕には私たちと同じものを着けているので、この街コンの参加者なのは間違いない。

さっきのチャラ男二人組とは真逆のタイプだ。この二人は、真面目を装っているわけじゃなく

、本当に真面目なんだというのが伝わってくる。

「どうぞどうぞ」

黒沢さんが席を勧める。

「ありがとうございます」

眼鏡をかけた方が答え、二人が私たちの前に座る。

「なかなかイケメンじゃない。時任さんってこういう方がいいんじゃないの？」

確かにそうだが、それを言うという事は、さっきのチャラ男がダメなのをわかっていたのか。

「堅苦しいのはダメだけど、たまにはこういうタイプもいいかも」

ちょっと見直しかけたが、やっぱり黒沢さんは黒沢さんだ。じっくりと二人を観察している。

「初めまして。僕は深田<sup>ふかだしんじ</sup>信二と言います」

眼鏡をかけた方が名乗る。

「俺は雛見<sup>ひなみこうたろう</sup>孝太郎って言います。こういうのは二人とも初めてなんで、結構緊張しているんですよ」

ちょっとはにかみながら言うのは、なかなか可愛らしかった。にっこりと笑うと、まるで子どもようだった。母性本能をくすぐる笑顔って、こういうのを言うのかもしれない。

「あたしは黒沢美雪っていいます。で、こっちは――」

「時任美佐子です。よろしく願います」

また勝手に紹介されそうだったので自分で名乗る。流れでフルネームだ。

「あたしたちも、こういうの初めてで、どうしていいのかよくわからないんですよ」

黒沢さんが笑いながら言う。今日は真面目そうにしているが、どうも私は彼女の普段を知っているので、普段の姿と同じにしか見えない。はっきりと言うと軽い印象だ。

「いやあ……なかなか合コンにも参加しないから、新鮮ですよ」

「お前はもうちょっとそういうのに参加すればいいのに。モテると思うぞ」

「肩書きだけしか見ないだろうよ、どうせ」

深田さんが肩をすくめる。

「肩書きって、お医者さんとか弁護士さんだったりするんですか？」

黒沢さんが前のめりで訊く。比喻とかではなく物理的に前のめりだ。

「そうなんですよ。こいつね、医者なんです」

「やめろって」

「どうしてだよ。そういうステータスはアピールしないと」

「僕はそういうのがイヤなんだって」

「いいじゃないですか。お医者さんなんて。素敵ですよ」

「しかもさ、こいつって個人医院なんだよ」

雛見さんって真面目そうに見えたけど、本当は結構チャラ系だったのだろうか。

「うわあ。すごく素敵じゃないですか。そうだ、連絡先教えて下さいよ」

黒沢さんが完全にロックオンしている。確かに医者ってだけでもそうなのに、個人経営となれば有望株だろう。彼女でなくても、狙おうと思う人は多いはずだ。

黒沢さんきっかけで、私たちはそれぞれの連絡先を交換する。ついでに――と、私たちはそれ

ぞれの名刺をもらった。

「児童福祉施設？」

深田さんが産婦人科の医者だということも気になったが、それよりも雛見さんの方がちょっと気になった。

「ああ、そうなんだよ。だいたいこういう場所じゃ、福祉関係ですって言うだけなんだけどね」

「勢いで名刺を渡す事になるとは思ってなかったよ」

深田さんは鼻をぽりぽりとかく。

どうやら誰彼構わず渡しているわけではないらしい。

「俺も。合コンで渡すなんてないからね。ホントなんでだろう？」

雛見さんは顔を真っ赤にする。どうやらチャラく見えていたのは、緊張しているのを誤魔化そうとしていたからのようだ。

「素敵な職業だと思いますよ。可哀想な子どもたち——」

「それは違いますよ」

雛見さんが鋭い声で私の言葉を遮る。さっきまでの、どこか人懐っこい感じは微塵もない。なにか、彼の逆鱗に触れてしまったようだ。

「おい。ムキになるなよ」

深田さんがなだめる。

「すみません。つい……」

雛見さんはテーブルに頭をつけて謝罪する。隣で黒沢さんがひいているのがわかる。

「いえ、こちらこそ」

私にはよくわからなかったが、とりあえずここは謝っておくべきだろう。

「世間じゃそうだってわかってるんですけどね。やっぱり、ムキになってしまうんです」

雛見さんが穏やかな声で話す。

「本当にすみません。さっきのは忘れてもらえると助かります」

「いえ、なんだかすみません」

謝ってみたものの空気が重い。これはもうどうしようもない。

やっぱりなにがスイッチだったのかはわからないけれど、それに対してこれだけ真剣になれるという事は、それだけ真面目だという事だから、むしろ好印象だったりする。

「お医者さんか……」

そんな重い空気の中、黒沢さんは院長夫人になった自分でも妄想しているのだろう。わかりやすすぎてなんだか可愛らしい。

「僕の職業はとりあえず忘れましょう。そんなつもりじゃないんですから」

深田さんが慌てている。どうやら、色眼鏡で見られるのがイヤらしい。しかし、一度聞いてしまったら、もう「医者、という肩書きは消えない。

「お前が余計な事を言うからだぞ」

「いいじゃないか。俺だって、医者友達って感じでさ。お前と違って、こういう場所で武器になるものってないんだよ」

「お前な……」

「いいだろ。せいぜい利用させてくれよ」

なんて会話を目の前でされている私たちはどうすればいいのだろう。二人だけの時にすればいいのに。

でも、そういう話を気にせずできるという事は、私たちは既にそういう対象じゃないという事だろう。まさか、少しでも気になっている相手を前に、ここまであけすけになるなんて、どうかしているとしか思えない。本気でそうならよほどの天然だ。

「ねえねえ、なかなかいい感じじゃない。まさか、お医者さんと知り合いになれるなんてさ」

ダメだ。彼女も本人を目の前にこんな事を言っている。そういう話は、二人が離れてからだろう。

「でしょ。もしよかったら、また連絡下さいよ」

雛見さんの耳にも届いたらしく、そんな事を言ってくる。どうやら彼はかなりの天然らしい。

「ったく……お前が余計な事ばっか話すから、もう時間がないだろ」

深田さんが腕時計を見て言う。

忘れていたが、こうして話すのには時間制限というものがある。

あまり話し込むと、他の人の出会いの邪魔になるというか、より大勢の人と出会ってマッチングの幅を広げるという事だろう。

もっと話したければ、後日会えばいい。

ただ、そこまでするからには、それなりに気持ちがないといけない。

これはこれで、出会いから次の一步へのハードルが高いような気がするんだけど。

ただこれが今回のルールなのでしょうがない。

「マジかよ。せっかく盛り上がってきたのに。絶対連絡下さいね」

「あたしも残念です。絶対連絡しますね」

黒沢さんは目を輝かせていた。医者の方にだけど。本当に彼女はわかりやすい。

「なんだか、あまり話ができませんでしたけど、楽しかったです。もう少しお話ができればと思います」

深田さんが丁寧に言うと、黒沢さんがますます目を輝かせる。ああ、完全に脈ありだと思っているんだろうな。社交辞令って言葉、彼女は知っているのだろうか。

そういうものだとわかっていても、私は楽しいと思っていた。確かにたいした内容はなかったけれど、肩の力が抜けた感じだった。少し空気が重くなった時もあったけれど、自然な状態でいられた気がする。

「それでは」

「楽しかったです」

二人はきちんとした言葉を残して、別のテーブルに向かった。

きっと次の人たちとも、同じように楽しい時間を過ごすのだろう。

それを考えると、ちくりと胸が痛んだ。

あれ？ どうしたんだろう？

まさか、あの一瞬で？

一目惚れが変とか、そういうものはないとは思わないけれど、私には無縁のものだと思っ  
ていなかった。これが本当にそうなのだろうか。黒沢さんならわかるのだろうか。だけど、彼女  
にそれを訊くのは、恥ずかしくてできそうにない。

「まさかこんな街コンで、お医者さんと知り合いになれるなんて思わなかったよ」

黒沢さんはもらった名刺を見つめて感激している。

「そうね」

私はそう答えながら、二人の姿を自然と探していた。

それからお店を変え、何組かと話をしたが、黒沢さんはどこか上の空で適当だった。どうもあ  
のお医者さんが気になってしょうがないようだ。

雰囲気からすれば、彼女には合わないと思えなかったが、彼女にはその肩書きが重要な  
だろう。

上の空ながらも場慣れしているのか、彼女はきちんと対応していた。

相手が主に私に話しかけていて困っていても、彼女が必ず割り込んでくる。それも自然に。彼  
女は意識しているのかわからないが、かなり助けられたのは事実だ。

「お姉さんたち、二人とも綺麗ですよ。セクシー系と清楚系で対照的で」

「しかもどっちもエロそう」

今日の前に座っているのは、私たちよりは明らかに年下の二人組だ。下手をすれば大学生にも  
見える。その見た目と一緒に、良くも悪くも子どもっぽい。

男ならしょうがないのか、それでも脳内も子どもっぽいというか……。肉食系すぎやしないか  
？

「そんな事ないって」

黒沢さんは、相手が年下だからか、今までとは違って妙にくだけた話し方だ。

「エロいお姉さんって、好きなんですよ」

「やっぱり、ちよい年上だよな」

「そんな事言って、結局若い子がいいんじゃないの？」

「いやいや、やっぱり年上でしょ」

「そうそう。年下だとガキっぽいし」

そういうあんたたちは、かなりガキっぽいけどね。

そう言ってやりたいが、ここはなんとかその言葉を飲み込む。

「そんな事言ってさ、どうせすぐにババアだとか言うでしょ」

「俺たち、年増好きだからオツケーですよ」

「そうそう」

ガキンちょ二人組は、楽しそうにそんな事を言っているが、その一言で黒沢さんのこめかみが  
ピクピクする。しかし、ガキンちょ二人は、その変化に気付きもしない。

ああ、こいつらやっぱり莫迦だ。私もちよっと……いや、かなりイラッとなった。

「ねえ、そろそろ他のお店に行こうか」

ひきつった笑みで私を見る。

あそこまでストレートに言われると、彼女でなくてもそうするだろう。ここで反論して彼女を困らせようとは思えない。私もこのガキンちよと一緒にいるのは限界だ。

「そうね。行きましょう」

言いながら立ち上がる。

「ええ？ もう行っちゃうの？」

「まだ話し始めたばかりじゃん」

こいつらは、まだ自分たちの失言に気付いていないのか。これはどうしようもない。元々興味がないから、こうして足蹴にできるだけありがたい。

「じゃあね、坊やたち」

私は冷たい笑顔を向けて、さっさと店を出る。

「もうちょっと大人になりなさい」

黒沢さんは小さく手を振って店を出る。

「んだよ」

「もうちょっと話そうよ」

背中からは悪態と引き留める声が聞こえてくるが、私たちが相手にするはずがない。完全に無視して、私たちは別のお店に向かう。同じ店だと気分が悪くなる。

「それにしても、さっきのガキどもは最低ね」

「そうね。しつけがなってないっていうか、完全に子どもね」

そう言いながら私たちは笑いあう。

こんなに意見が一致するのって、もしかして初めてかも。

「それにしても、まさか時任さんがあんな風に言うなんて思わなかった。じゃあね、坊やたち」

さっきの私の真似だろうか——いや、それしかないか。奇妙な手振りが加わっているけれど。

「変なの」

ぼそりと言うと、黒沢さんが抗議してくる。

「時任さんの真似だし。結構似てるわよ」

「そうかしら？ 全然似てないと思うけど」

「そっくりよ、そっくり。じゃあね、坊やたち」

また妙な手振りつきで言う。

「変なの」

何度も繰り返すようなら、私も同じ対応を繰り返す。

「まったく。とにかく、あのガキンちよたち、あたしたちを年増呼ばわりよ。こんなにピチピチなのに」

その言い方が既に若くないというのは、言わない方がいいのだろう。気持ちはわからなくないけれど。

「それ以前に、全体的にガキだったけどね」

「でも、ああいうのを、あたし色にするってのもいいんだよね。まあ、あれはちょっと生意気すぎるけど。ああ、あのくらいの歳で童貞とかいないかな。大人しそうな、いないかな……」

やれやれだ。思わず大きなため息を吐く。

「ああ、そうだ。時任さんはやめといた方がいいわよ。最初に童貞とヤると、痛いだけだから。好きな人にあげたいとか、そういうのはただの夢だし。最初は経験豊富な人としておいた方が、それからは楽しめるわよ」

突然どうしてそういう話になるのか。どうでもいい情報だ。まったく、そういう事しか頭にならないのだろうか。

でも……と考え直す。ここはある意味じゃそういう場だった。そういう関係を目指している人が集まる場所だった。

「なんだったら、よさそうなの紹介してあげようか？ あ、でも……処女って痛がるから嫌いつても多いよね。難しいかな……」

私が反応しないと、彼女はずっとそういう話を続けている。彼女の中で盛り上がっているようなので、好きにさせる事にした。

「あそこにしましょうか」

果たして、脳内で盛り上がっている黒沢さんに声が届いているのか疑問だ。

オープンテラスになっている店で、外のテーブルには参加者の男の人たちが座っているのが見えた。どうやら今はフリーらしい。

それほど遊んでいるようには見えない。もっとも、積極的に出会いたいというわけではないが、このままというわけにもいかないの、そういう意味では適当な相手だ。

脳内で盛り上がっている黒沢さんは、ふっと顔を上げてその男の人たちを見る。

「あのコンビ、なかなかいいじゃない。時任さんもガチでいっちゃおうよ」

「考えておくわ。とりあえず行きましょうか」

初めての人とこれだけ話す事なんかなかったの、そろそろ疲れてきていた。だけど、今日は頑張らないと。この場はなんとしても乗り切らないと。

そんな疲れを見せるわけにはいけないので、気丈に振る舞う。

「ここ、いいですか？」

黒沢さんは飲み物を手に、できるだけお淑やかに振る舞っている。相手に合わせて振る舞うのは、ある意味では礼儀かもしれないけれど、彼女の場合は無意識にそれをやっているようだから脱帽だ。私にはとてもできそうにない。

「ええ、どうぞ」

座っていてもスラッとした長身なのがわかる方が空いている席を指す。

「どうぞどうぞ」

もう一人の笑顔が素敵な人も席を指す。自然な表情が笑顔なのだろう。自然すぎて嫌みがない笑顔だ。

「ありがとうございます」

私はお礼を言って、笑顔の人の前に座った。というのも、黒沢さんが長身の人の上にさっさと陣取ったからだ。別に元々こっちに座るつもりだったのだが、なんとなく気分がいいものじゃない。

「初めまして。倉田<sup>くらた</sup>和俊<sup>かずとし</sup>といいます。よろしくお願いします」

座るとまず、長身さんが自己紹介をする。

「おれは三沢<sup>みさわ</sup>一也<sup>かずや</sup>です。よろしくお願いします。こんな綺麗な人たちが参加してるなんて予想外でした」  
言われて黒沢さんが照れる。

「あたしは黒沢美雪です」

「時任美佐子といいます。よろしくお願いします」

私たちも自己紹介をする。

「すみません。俺たちこういうのに参加するのって初めてで、ずっと緊張してるんですよ」

「そうなんですか。あたしたちもです」

笑顔浮かべながら言う倉田さんを見ると、本当に慣れていないんだな……と思う。

「そうですね。お二人とも綺麗だから、こういうのに参加しなくてもね……」

三沢さんの言葉に少し頬がひきつる。なるほど、こういう人たちか。

私はそこで見限ってしまっていた。

「すみません。おれたち緊張して、なにを話していいかわからなくて……。気を悪くしたらすみません」

三沢さんが即座にフォローする。どうやら相手の表情や空気には聡いようだ。

「こんなだからモテないんですよ。で、また失敗してのスパイラルなんですよ」

自虐ネタといえばそうだが、彼は自然とそんな話をしている。彼の中では鉄板ネタなのかもしれない。

「そんな事ないですよ。結構出会ってないんですよ。だから、こういうのって楽しいですよ」

「そうなんですか」

失敗したと感じていた三沢さんが、黒沢さんの言葉に心底安心した顔になる。

「ところで、お二人って、お仕事はなにをしてるんですか？」

こういう場所では当たり前だろうけれど、私からすればなかなか突っ込んだ質問だ。いまだに慣れない。

「私は事務系の仕事を」

端的に答える。というか、それ以外に答えようがない。

「あたしはフリーです。事情があって、少し前に仕事を辞めてしまって。彼女はその時の同僚なんです」

これまでも何度かされた質問なので、黒沢さんはすらすらと答える。まさか自称既婚者ですとは言えないだろう。かといって嘘はない。

「そちらは？」

「俺たちは二人とも自営業です」

思ってもいない回答だった。

「もしかして、社長さんとか？」

お金のにおいては敏感なようで、黒沢さんは目を輝かせる。

「いやいや、そんなんじゃないですよ」

倉田さんは苦笑いを浮かべる。ここまでがつつかれると引いてしまうだろう。

「またまた。謙遜しなくても」

「本当に違うんですよ。むしろ社長だったらよかったんですけどね」

三沢さんが答える。

「もしかして実家の手伝いですか？」

家業を継いでいたら、それも自営業だろう。むしろ普通はそっちを先に思い浮かべそうだけれど。

「まあ、そんなとこですね」

そんな倉田さんの言葉に、黒沢さんはとりあえず納得したようだ。隣で、実家の仕事か……安泰かも、などと呟いている。間違っただけなのだけれど、あまりに真剣すぎて滑稽だ。

「お二人って、昔からの友達なんですか？」

「いやいや、今の仕事を始めてからかな」

倉田さんが答える。

今の仕事を始めて？ という事は地元の知り合いってわけじゃないのか。

「そうそう。仕事で知り合ったから……ここ数年か」

「初めて会った時は、こうなるとは思わなかったけどな」

「こっちの台詞だったの。どうしてこうなったんだか。なにを間違ったんだろうな」

「よく言うよ」

懐かしさからなのか、突然饒舌になってきた。

「二人は、仕事の知り合いなんだよね」

三沢さんが唐突に話を振ってくる。

「そうですよ。同期なんです」

「こんな美人が一緒とか、職場が華やかそうでいいな」

三沢さんが遠い目をする。

確かに黒沢さんはそういう存在だったけれど、私は絶対にそういうものじゃない。むしろ努めて地味に過ごしてきた。

「でも、そんな事なかったですよ。地味な仕事でしたし、そもそも時任さんとは、部門が違ったのでなかなか会えませんでしたから」

実際、仕事で会う事なんかほとんどなかった。会わない日の方が圧倒的に多かった。もっとも、お互い会おうと思もしなかったけれど。と——この辺はオフレコ。

「それでも、社内にこんな美人がいるだけでいいよな」

三沢さんの言葉に倉田さんが頷く。

「俺たちの仕事って、色気とは無縁だからな」

「なに言ってるんだよ。お前んところは、可愛いアシスタントがいるだろ」

三沢さんが心底羨ましそうに言う。

「可愛い……ね。外面はいいからな、あいつは」

アシスタントがいるって、どういう仕事なんだろう？ っていうか本当に家業？ 職種が想像できない。

「ったく、これだからリア充は」

「勝手に言ってる。ただのアシスタントだぞ。お前が想像——じゃなかった、妄想するような事なんかないぞ」

「どうだか。って、おれらの話はいいんだって。お前となんぞイヤってほど話せるからな。今はこの美女たちと話すのが重要なんだよ」

「ったく……。本当にすみませんね。こいつ基本莫迦なんで」

「いえいえ、楽しそうですね。二人とも仲がよくて」

黒沢さんが苦笑いしながらも、愛想良く答える。

「仲がいいって、そういう風に見えるんだ、おれたち」

三沢さんは倉田さんを見て顔をしかめる。

「こっちの台詞だ」

そういう風に、気が置けない仲というのは羨ましいかも。今までそういう仲の人っていなかったし、これからもできるかわからない。

そんな楽しい時間だったけれど、終了の時間というものはあるわけで、連絡先を交換して別のテーブルに行く事になった。

「結構いい感じだったじゃない」

「そうね。素敵だったと思うわ」

好感触なコンビだったと思う。それぞれにいいところがあった。ただ、最後まで仕事が謎だったけれど。

その後も何組かと話をしたけれど、あまり印象に残る人はいなかった。

ちなみに黒沢さんは、ずっとあのお医者さんの事ばかりだった。確かに開業医っていうのはいいかもしれないけれど……彼女の場合、それがあからさますぎる気がする。一応は既婚者のはずだけれど。

こういう場は初めてだったけれど、なかなか面白かった。また参加したいかと言われると、少し考えるかもしれないけれど。

## 思わぬ告白

---

あの街コンが終わってからも、黒沢さんとのランチは続いていた。

慣れてきたからか、ああいう場所に一緒に行ったからなのか、少しだけ苦痛度が減ってきていた。

そんなランチも次第に週二となり、秋の気配が感じられる頃には週一になっていた。

私としては、本来は一人の方がいいので構わなかったし、彼女にだって用事はあるだろうからと、特に気にする事はなかった。

そんな日が続いていた時、全く彼女から連絡がない週があった。別にそんな時もあるだろうと思っていた。そもそも強制じゃないわけだし、別に約束しているわけでもない。これで黒沢さんとのランチから解放されたかな……と、ほんの少しだけ淋しさがあいつつ、それよりも解放感が大きかった。

しかし、そんな日はとても短かった。

自然消滅かという期待があったがそんな事はなく、明日のランチを一緒に食べようという連絡があった。

嘆息しつつも少し楽しみにしている自分に驚いた。

ほんの数日なのに、公園で食べるのがかなり久しぶりに感じる。夏は終わっているはずなのに、まだまだ日中は日差しが厳しい。

「久しぶり。ちょっと体調を崩しちゃってさ」

久しぶりに会った彼女は、確かに少し調子が悪そうだった。

「そうね。最近、涼しい日があったものね」

季節の変わり目なので体調を崩しやすい。職場でも体調を崩している人がいる。

「そうなんだよね……。ちょっとマシになったから、久しぶりに時任さんとランチしたくって」

「無理しなくても……」

そこまでして、私と一緒に食べたいものだろうか。最近は会うようになったものの、昔はそんな気配すらなかった相手なのに。体調がよくないならなおさらだ。

「いいじゃない。あたしがそうしたかったんだし」

「黒沢さんがいいなら、それでいいんだけど」

「そういう事。さあ、食べましょう」

「そうね」

私は自分のお弁当の包みを開ける。相変わらずの中身だ。

「相変わらずおいしそうね」

黒沢さんが覗き込んでくる。

「毎日似たようなものになっちゃうけど」

そう言ってから、彼女はコンビニ弁当が多かったのを思い出した。そっちの方がバリエーションはないだろう。色々なお店を回ればそれなりになるかもしれないけれど、それにも限界はある

だろうし、似ているものも多いはずだ。

そんな彼女のお弁当はなにかな……と思って見ると、彼女の膝の上には、カップに入ったパスタサラダがあった。

……それだけ？

さすがにサラダだけというのは今までなかったので、他にパンかおにぎりでもあるかと思ったけれど、どうやらパスタサラダだけのようだ。

「今日は小食なのね」

特に知りたいわけでもないけれど、なんとなく訊いてしまった。

「ちょっと食欲がね。ダイエットにもなるし、ちょうどいいかなって」

彼女は笑みを浮かべながら答える。

「そうなんだ」

病み上がりだし、食欲がないのはわかる。考えてみればわかる事だった。

それ以降は、特にこれといった会話もなく、黙々と食事を摂った。

「ごちそうさまでした」

食べ終わって隣を見ると、黒沢さんはまだパスタサラダを食べていた。私が早いというわけではないはずだが、黒沢さんのサラダは半分ほど残っている。ちょっと体調が悪すぎじゃないだろうか。

「ねえ、本当に大丈夫なの？」

さすがに心配になる。

「結構マシになったと思ったんだけどな……。ごめん、今日はちょっと帰るわ」

食事を片付けて立ち上がろうとしたが、ふらついてしまう。

「ねえ、大丈夫？」

パッと彼女の腕を持って支える。

「ありがとう。大丈夫だから」

なんとか笑顔を作っているが、顔色の悪さは隠しようがない。

昔の彼女なら、この程度の事はメイクで誤魔化していただろう。あまり気にしていなかったけれど、よく見ると今日はメイクをほとんどしていない。

「今日のごめんね。また連絡するね」

そう言って、彼女はふらつきながら帰っていった。

そのまま帰してもいいものか考えたが、職場に戻らないといけない時間が迫っていたし、彼女だって大人なんだから大丈夫だと判断した。

どうなったか気になりながら仕事をしていると、彼女からメールがあり、無事に家に戻った事を知り安心した。

意外な事に、翌日も彼女から連絡があった。まさか昨日の今日でランチとは思っていなかったので確認すると、終業後に会いたいというものだった。

体調は戻ったのだろうか？

そんなすぐに快復するとは思えないけれど、とにかく会えばわかるだろう。

少なくとも出歩ける程度にはなっているようだ。

ひとまず安心し、淡々と仕事をこなした。

特に残業があるわけではないので、待ち合わせの場所には私の方が先に着いてしまった。といっても、いつもの公園だ。日が沈むのが早くなってきているものの、まだほんのりと明るい。それでも、ちらほらと街灯が点き始めている。

急ぎの用事があるわけでもなし、待たされる事は苦ではない。

涼しさを感じるようになった風を受けながら、ホットの缶コーヒーを飲む。さすがに冷たいのは厳しい。

ゆっくりと飲んでいても飲み干す頃に、ようやく黒沢さんがやってきた。

「ごめんなさい。遅くなっちゃった」

彼女はゆっくりとした足取りでやってきた。普通なら急いで来なさいと思うところだが、さすがに体調が悪いというのがわかっているのですんなり思わない。

「別に構わないわよ」

「本当に今日はごめんなさい」

どうしたんだろう？ なんだか神妙だ。いつもならこんなに気にしないだろうに。

それになんとか深刻そうな顔をしている。

もしかして、なにか厄介な事を相談されるんだろうか。

そしてそれは見事に的中する事になる。

「なにか飲む？」

「ううん。いいわ」

黒沢さんは静かに私の隣に座る。

「……………」

そして、俯いて黙ったままだ。

これは余程の事なんだろうか。今すぐ帰りたい。

「突然呼び出してどうしたの？」

これは私から切り出さないとこのままになりそうだ。

「ごめんね。ちょっと相談したい事っていうか、聞いて欲しい事があって……」

いきなり謝ってから話し始められて、逃げ場をふさがれた状態だ。これはなかなか重い内容かもしれない。

「連帯保証人にはならないわよ」

先手を打つ。

借金なんかごめんだ。相手が親でも断る。

「そんなんじゃないわよ。でも、そういう時はお願いするかも」

「お断りだから」

いやいや、しないって宣言したでしょ。っていうか、そういう予定があるわけ？

「別にそういう予定はないんだけどね。でもそうね、どうなるかわからないかも。もしかしたら

必要になるかも」

彼女は一人で考え込んでいる。もしかして本当にそうなの？ 勘弁してよ。

「将来どうなるかわからないけど、今はそうじゃないの」

「将来どうなるかわからなくても、それは絶対に断るから」

「わかったわよ。そんなにマジにならないでよ。今はそうじゃないんだから」

借金じゃないならいったいなんだろう？ 私を頼るような事は、他に思い浮かばない。恋愛相談なんか以ての外だ。男女問題で頼られるはずがない。

「そのね、四ヶ月なんだったって」

その唐突な言葉に、私は彼女がなにを言い出したのかわからなかった。

「四ヶ月？ なんの事？」

さっぱりわからない。四ヶ月前となると、あの街コンよりも少し前だ。彼女と再会したのがその頃だったか。いや、私と再会する前か。とにかく、その頃になにがあったか思い出す。

……………特に思い浮かばない。

強いて挙げれば、彼女が離婚したらしいという噂を聞いたくらいか。それくらいしか思い浮かばない。

「ちょっと気分が悪くて、吐き気が続いたから病院に行ったのね。そしたら四ヶ月なんだったって」

「……どういう事？」

彼女の説明は説明になっていない。

「生理がなかったんだけど、いつも適当だったから気にしなかったのね」

……ん？ 生理？ 四ヶ月？

もしかして……って、冗談でしょ？

「ちょっと待って。なんとなくわかったけど、どうしてそれを私に相談するわけ？」

手のひらを向けて彼女を制止する。

「どうしたらいいと思う？」

「いやいや。どうしたらいいって、だからどうして私なわけ？」

大きな意味では男女問題だった。予想外すぎてどうすればいいのかわからない。

既婚者の黒沢さんが、未婚の私に相談するような事？ そもそも、私にはそういう行為の経験すらないのに。

そもそも四ヶ月って、なんだか中途半端な気がする。普通、そういう話を聞くのは三ヶ月だ。

普通はそういう行為があって、それだけ生理がなければ気が付くものだと思っていた。

……いくら黒沢さんだって、そこまで気付かなかったわけじゃないよね。きっと言い出せなかっただけだよ。……だよ。

しかし、黒沢さんの様子からして、そういう感じじゃない。だって、今までも週一くらいでランチをしていたわけだし、体調が悪そうでもなかった。話す機会はいくらでもあった。体調が悪く感じたのはここ最近だ。

どうやら、本当に今まで気付いていなかった感じだ。

「悪いけど、私に相談するような事じゃないでしょ。妊娠したならパートナーに相談すればいい

いじゃない」

もっとも、相談できるとは思えないけれど。

「……それができないんだ」

彼女はぼつりと言った。

「私に相談したところで、どうにもできないでしょ。やっぱり、そういうのはパートナーと話をしないと」

一応は既婚者という前提で話をしないといけない。私が彼女の離婚を知っているはずがないのだから。

「あのさ。時任さんには言ってなかったんだけど、あたし離婚したんだ」

彼女は覚悟を決めたように言った。こんなに深刻そうな彼女を知らない。

勝ち組だという自負があっただろうし、私なんかに弱みを見せたくなかっただろうから、それを言うには結構な勇気が必要だったはずだ。

ああ、あの噂は本当だったんだ。所詮は噂だから、もしかしたらデマかもしれない可能性があったけれど、彼女が宣言した事で証明された。

「そうなんだ」

淡々と返事をする。

「もしかして知ってた？」

こういうところだけ鋭い。もうちょっと感情を出した方がよかったかもしれない。いや、それでも気付かれていたかもしれない。

「噂程度にはね。別に信じていたわけじゃないわ。ただのやっかみの類だと思っていたし」

別に隠す事でもないだろう。どうせ後で知られる。

「そっか……やっぱ、噂になってたんだ」

彼女は納得したようで頷く。

「そうなんだよね。あの街コンの前——そうだな……時任さんと久しぶりに会う少し前に別れたんだ。だから、あの時はもうバツイチだったわけ」

そう言われても、私はどう反応したらいいのだろう。驚くわけにもいなかいだろう。

「だから時任さんの前じゃ、ずっと`黒沢さん、だったんだよね」

一瞬、彼女がなにを言っているかわからなかったが、少し考えて旧姓でずっと呼んでいた事に気付いた。本当なら`黒沢さん、じゃなかったのだ。姓が変わっているはずなのに、ずっと旧姓で呼んでいた。もっとも、最近ではあえてそうしている場合もあるので、不自然ではなかったと思う——というのは言い訳で、私は全く意識していなかった。

そもそも、彼女は最初から訂正しなかった。結婚しているのだから、違うよとでも言って訂正するものだろう。夫婦別姓という事も考えられるが、わざわざそうするような人じゃない。それ以前に私は、彼女の結婚後の名字を知らなかったただだけれど。

「そうなんだ。じゃあ、あの街コンは問題なかったわけだ」

わかっていた事だけれど、あえて話題に出す。そうでもしないと、どう反応していいかわからない。

「そうなんだよね……。あれはマジだったんだけどな。何人か連絡してみたんだけど、なんか違うんだよね」

連絡したんだ。

そういえば、私も数人からメールが届いたっけ。いくらかやり取りはしたけれど、続いている人はいない。というのも、会いたいという内容ばかりだったので、なにかしら理由をつけて断り続けたからだけれど。

「そういえば、時任さんはどうなわけ？ 相手は見つかった？ ……って、見つかった感じじゃないか」

毎週のようにランチを一緒にしていれば、なんとなくわかるだろう。

「そうね。あまり合いそうな人はいなかったから」

元々本気じゃなかったし。

「そっか。……って、それはいいの。ねえ、どうしたらいいと思う？」

別の話題を挟んだせいだろうか、彼女はリラックスしていつもの調子に戻ってきている。

でもって、話題は戻ってしまうのか。どうして私なのかわからないうえに、重い内容なので遠慮したいところなのだけれど……。

「それにしてもシングルマザー……。ね。そういえば、相手は誰なわけ？」

その辺ははっきりさせておくべきだろう。まさかわからないなんて事はないでしょうし。行きずりの相手なんて以ての外でしょ。さすがに相手がわからないと、もうどうしようもない。

「前の旦那」

彼女は淡々とそう言った。

「はあ？」

思わずそんな声が出た。

信じられない。離婚したんじゃないの？

思わず指を折って数える。四ヶ月前でしょ？ それって、もう離婚していたの？ それともまだ？

微妙すぎて私にはわからない。

「ちなみに訊くんだけど、それともう離婚していたの？」

そう訊くと、彼女はゆっくりと首を横に振った。

どうやら、一応は婚姻関係があったようだ。

「別れるって決めた時に、最後だからって」

「……………」

その言葉は信じられなかった。

「ちなみに、別れるって決めたのってどっち？」

「向こう……。かな。私もかなり冷めてたけど」

えらく曖昧ね。はっきりしないって事は、もしかすると彼女からかもしれない。別にどちらからだろうと構わないんだけれど。

「そうなんだ。もうひとつ訊いていい？」

彼女はゆっくりと頷く。

「離婚の理由ってなに？」

どうせたいした事じゃなさそうだけれど。

「えっと……浮気とDVかな」

なんでもない風に笑いながら言うので、逆にどうしていいのかわからなくなった。結構な理由じゃない。ありふれているのかもしれないけれど。

どうでもいいけれど、既婚者で浮気っておかしいんだけどね。それって不倫だし。

「充分な離婚理由じゃない。なのに、どうしてそうなったわけ？」

経験のない私からしても、そんな相手とそういう事をしようとは思えない。

中には誰とでもできるって人もいるんでしょうけれど、私には絶対に無理だ。

「まあ、最後の記念ってヤツかな。あの人、すごく上手で気持ちいいんだよね」

うっとりとしながら言われても……。私は頭を抱える。

「時任さんは処女だからわからないだろうけど、気持ちよかったらそれでいいやっとなる時ってあるんだよね」

なるんだよねって言われても、とてもじゃないが想像できない。

好きって気持ちのない相手と？ 私なら一緒にいるだけでもごめんね。

「やっぱり、テクニックは重要だと思うんだ。まあ、だからこそ、他に女がいたりするんだけどね。それでも気持ちいいと、それでいいやっとなるんだよね……」

妙にうっとりしているが、やっぱり私には想像できない。

「時任さんもさ、経験しなきゃ損だよ。なんだったら紹介しようか？ やっぱ初めては上手い方がいいからさ」

「遠慮しとく。気持ちのない相手と、そんな事をするつもりないから」

「もったいない」

きっぱりと断っても黒沢さんはすすめてくる。本当に残念そうだ。

「好きでもない相手と、どうしてそんな事をしないといけないの？」

「そういうのとは別なんだって。こればかりは、処女にはわからないか。まあ、経験がなければ、そういう夢もあるかもね。でも、実際は気持ちよさ重視かな。夢見てるのって、中学生くらいまでだけれどね、普通は」

私の感覚は中学生だって？ 特定の人としかそういう事をしたくないのが異常なの？

というか、そこまでして経験したくはないんだけど。そういうのって、やっぱり好きな人と、自然とそういう雰囲気になって……って、それを言ったら、また処女がどうのとか乙女だとか言われるのだろう。けれど、やっぱり私はそういう風にしか思えない。

「とにかく、別れた相手との子どもなわけね」

私の事とか、そういう倫理観は、この際どうでもいい。今大切な事だけ確認する。

「ええ、そうね」

行きずりで誰ともわからないよりはマシだ。特定できれば、なんとかなるかもしれない。

けれど相手がわかって、今回の場合は面倒だな……。

「だったら、相手に認知させればいいんじゃないの？ 養育費はもらわないと」

「そうだよね。普通はそうなんだよね」

黒沢さんは静かに頷く。

「だけど、それはちょっと厳しいんだよね。絶対に出すわけない」

「裁判してみたら？」

実際に裁判といっても、検事と弁護士がどうこうでなく、調停なんだけれど。

「そんな大げさな事できないって。そこまでしたくないし」

黒沢さんはぶんぶん手を振る。

でしょうね。私でもそこまでしたくないかも。嫌いで別れた相手と、ややこしい事はしたくない。

「だったら出産を諦める？」

出産を前提に話をしていたが、どうしてもという場合なら中絶も選択肢としてはある。

「……やっぱりそうなる？」

黒沢さんもそれは考えたのだろう。

個人的には中絶というものに抵抗がある。やむを得ない事情はあるにせよ、それはひとつの命を消す事だ。殺人となにが違うのかわからない。

外の世界には出てきていなくても、この世界に存在している命を、意図的に消すなんて考えるだけで怖い。

もちろん、そうしなければならぬ事情だってあるのはわかっている。だったら、なおさらそうなくていいようにするべきだ。自分ではどうしようもない場合もあるだろうけれど。

同じ女として、少しシビアかもしれないけれど、やっぱり嫌悪感がある。

「あたしも考えたんだけど、この子は命があるわけでしょ。それをあたしの勝手に殺すなんてできないかなって」

黒沢さんの口から意外な言葉が出てきた。まさか、彼女も同じだったなんて。

「驚いた」

思わず声に出してしまった。

「ん？ どうしたの？」

「ごめんなさい。黒沢さんも同じだったんだって。ちょっと驚いただけ」

「同じ？」

黒沢さんは意味がわからないようだ。もっとも、私がそっちの立場でもそうだろうけれど。

「中絶に対して、殺すって言葉が出るなんて思わなかったから」

私が言うと、彼女は不思議そうな顔をする。

「当たり前じゃない。この子は生きてるわけだし。まだ動いてるとか、そこまではわからないけど、確かにここにいるんだよ」

黒沢さんはお腹を押さえる。

「生きてる相手なんだから、当たり前だと思うんだけど。特に女ならそうでしょ」

そうなのかもしれないけれど、彼女なら別に気にしないと思っていた。

「中絶するにしても、そろそろ限界らしいし、決断しないといけなかったんだけど、やっぱり産まないとだよ。あたしは殺人者になりたくないから」

親になるからだろうか、それとも女は元々こうなのか、とにかく強いなと思う。

「産む事が前提だったら、やっぱり相手からの援助は必要だと思うんだけど」

離婚の際の慰謝料は知らないが、子育てをするならお金は必要になってくる。もらえるものはもらっておくべきだ。これがあるのとないのとでは、これからの生活が全くの別物になるだろう

。

「やっぱり難しそうなんだよね」

やっぱりそこがネックか。

「そうだ。育てられない子どもを預ける場所ってあったよね」

彼女は必死そうな顔で訊いてくる。

「もしかして、赤ちゃんポスト？」

「そう、それ」

色々と呼び名はあるだろうけど、出産はしたものの事情があって育てられない場合、病院などが設置している場所に預けるというものだったはず。

「そういう施設に預ける前提って、それはそれで問題あると思わない？」

そもそも育てる気がないって事になるじゃない。それは無責任すぎるでしょ。育児放棄じゃない。

「だって、それしかないじゃない。今のあたしに育てるのは難しいんだって」

本音というか、それが現状のようだ。

それも無理はないだろう。離婚したばかりだし、仕事も結婚を機に辞めてしまっている。自分だけならともかく、子どもが生まれれば色々制限されてしまう。やっぱり女は不利だ。

「中絶はダメ。出産も先が見えない。どうしようもないじゃない」

もともと出産自体は、彼女みたいな事情がなくても不安になるでしょうけれど。

「だから時任さんに相談してるんじゃない」

「私に相談されても……」

相談されるという行為自体は、頼りにされていると感じて嬉しいと思う人がいると思うが、私はそういう人種じゃない。厄介事を押しつけられるという、学生時代からのトラウマのせいだろう。

「本当に時任さんしか、こういう事を話せる人がいないの。だからお願い」

顔の前で手を合わせて頼まれても、やっぱり私にはどうする事もできそうにない。

第一、彼女には多くの友人がいるはずだ。

それでも話せないという事は、上辺だけの付き合いだったか、弱みを見せたくないかのどちらかだろう。

どちらの理由にせよ、こういう話ができるという事は、私は彼女の中でどうでもいい位置にいるのだろう。

それが悔しいわけではないし、特に感情はないが、改めて思い知らされると多少は傷つくとい

うものだ。

「とにかく状況を整理させて」

うん、と彼女が頷く。

「黒沢さんは妊娠四ヶ月でいいのよね」

「うん。病院に行ったら一七週って言われた」

そういう風に聞くと、もう後戻りができそうな気がしてこない。それほど気付かなかったというのは、やはり問題だろう。

「もちろん中絶はできない」

「うん。そんなのはイヤ」

私も同じ考えだが、自分が同じ状況だったらどうだろうと考えてしまう。綺麗事だけを言えるとは思えない。

「出産するにしても、パートナーからの金銭的援助はもちろん、他の援助も期待できない」

「絶対に無理。そもそも知られたくもない」

うわっ重傷だ。

認知すらしてもらえないのか。

彼女はそれでいいとしても、生まれてくる子どもが可哀想だ。

父親の事を知る事すら拒否されるのか。

私の勝手な想像だけれど、片親というだけでも世間は冷たいと思う。死別ならともかく、離別に関しては特にだ。

学校に通うようになれば、親についての話題が必ずある。それは幼稚園や保育園でもそうか。父の日など、どうしても意識しなければならない日がある。

そういう時に、自分はその存在を知らないというのは、周囲から奇異の目で見られる事は想像に難くない。

彼女は相手に知られたくないからと、そういう理由だけで済むかもしれないが、やはり子どもには大きなハンデとなるだろう。

「援助は無理でも、相手には知っておいてもらう方がいいと思うわよ。せめて、生まれてくる子どもに、父親の存在を教えてあげた方がいいと思う」

私が言うと、彼女は強く首を振った。

「絶対に無理。なにを言われるか、なにをされるかわからない。きっと、彼はこの子を無理にでも流産させようとする。だから無理」

黒沢さんはお腹に手を当てる。

お母さんなんだ。

未熟というか自覚すら危ういけれど、やはり母性本能というものがあるのだろう。私もいずれはそうなるのだろうか。

「わかったわよ。どんな事になっても知らないからね。全部の責任を負うのを覚悟しないとけないわよ」

「……………」

彼女は押し黙る。強く言い過ぎただろうか。過激すぎたかもしれない。

だけど、そのくらいの気持ちでないと、これからの道は険しすぎる。

「まあ、その心づもりはこれからしないといけないわね」

彼女は小さく頷く。本当にわかっているのかは怪しいものだ。

「とにかく、出産するまでと、それからをどうするかでいいのよね」

黒沢さんは大きく頷く。

「お願い。助けて」

必死な顔で言われると、突き放すのが躊躇われる。卑怯だ。

「わかったから、どうするかこれから考え——」

「あれ？ 珍しい組み合わせじゃねえ？」

唐突に聞いた事がある声がした。

黒沢さんも反応して、声がした方を見る。

そして次の瞬間、彼女の顔から血の気が引くのがはっきりとわかった。

「あれ？ 本当だ。ワタシの見間違い？」

「黒沢さん……あれ？ 今はなんだっけ？ まあいいや。本当に珍しい」

曇みかけるように言われると、私まで青ざめてくる。

そこにいたのは、同期の残り三人だ。

会社近くの公園なので、三人がここにも不思議ではない。むしろ、こういう危険があった事に気付かなかったのは、完全に私たちのミスだ。

「美雪って、えっと……名前なんだっけ？」

同期の竹下くんが私を見る。そこになんの悪気もない。単純に私の名前を覚えていないようだ。

名前すら覚えていないなんて、失礼を通り越している。同じ会社で働く同期なのに。もっとも、彼に覚えられていても嬉しくはないけれど。

「ちょっと佐門。さすがにそれは失礼でしょ」

同じく同期の加藤さんがクールな眼差しで私を見る。

「ええ？ でも、わたしも覚えてないかも」

入社時から歳をとったとは思えないくらい幼さの残る顔で、工藤さんは首を傾げる。こういうのを可愛いと思う男は最低のクズだけだろう。

「時任さんだって」

さすがに私は苗字だった。親しくもないのに、名前で呼ばれたくなかったのでよかった。

「そうそう、確かそんな名前だった」

竹下くんは手を叩いて納得している。

「ともかく、美雪と時任さんって、意外な組み合わせよね」

加藤さんがしげしげと私たちを見る。確かに妙な組み合わせだろう。それは私もいまだに思っている事だ。

私でもそう思うのだから、今までの経緯を知るはずのない三人には、どう見えているのか想像

に難くない。

「久しぶりね。三人はどうしてここに？」

黒沢さんは真っ直ぐ三人を見るが、足が震えている。彼女のプライドからすれば、私なんかと一緒にいるのは見られたくなかっただろう。

それに加えて、現在の状況をこの三人に見られたくなかったはずだ。

「オレたちは同期会だって。もう忘れたわけ？」

同期会？　なんだそれ。

「まだ続いてたんだ」

黒沢さんはそれだけでわかったらしい。私の知らないところで、そういうものがあったのか。

後で黒沢さんが教えてくれたのだが、どうやら定期的に同期で集まっているらしい。部署が異なると終業時間が同じという事でもないの、普段はなかなか一緒に……というわけにはいかない。なので日にちを決めて、その日だけは揃うようにしているらしかった。それが入社頃から六年、今までずっと続いているらしい。

知らされていなかった事を悲しく思うべきだろうけれど、とてもじゃないがそうは思えない。決して負け惜しみではなく、誘われても断っていただろう。

ただやはり、存在そのものすら知らなかった事は、少し悔しく思う。ただそれだけだ。

「黒沢さんじゃないよね、なにさんか忘れたから黒沢さんでいいかな？　いいよね。黒沢さんが辞めてからも、同期会は続いているんだよ」

工藤さんが笑みを浮かべながら言う。今まで名字じゃなくて名前と呼んでいたくせに。

この子ってこんな子だったんだ。想像以上だ。

「みづな、そのくらいにしなさいよ。美雪だって色々あるんだからさ」

加藤さんがフォローするように言うが、果たしてそれはフォローになっているのだろうか。そもそも、そのつもりすらないだろうに。

「別に今まで通りで構わないわ」

黒沢さんは気丈に振る舞う。

「そうなんだ。じゃあ、美雪でいいかな」

工藤さんはしれっとそう言う。

隣を見ると、黒沢さんは拳を握りしめている。さすがにスルーする事はできないわよね。

「でさ、話は戻るんだけど、どうしてこの組み合わせなわけ？　美雪ってさ、時任さんと親しかったっけ？」

加藤さんが訊いてくる。

どう答えたらいいものか。私は黒沢さんに呼ばれただけなんだけれど……。

チラッと黒沢さんを見る。

「あたしたちも同期会よ。時任さんも同期なんだから、別におかしくないでしょ」

咄嗟にしても、それはないだろう。あながち間違っていないだろうけれど。

「へえ。オレたちとはさすがに無理だもんな。だからって、そこまでして同期会したいかね」

黒沢さんと私を同時に貶めるとは、竹下くんはすごいわね。最低。

「いいでしょ。あたしはこれが楽しいの」

さらっと受け流せばいいのに。ここで主張すると余計に惨めになる。

「変わったんだね。まあ、他に相手にしてくれそうな人はいないもんね」

工藤さんが笑顔で言う。他の二人も顔を見合わせて笑い合う。

ああ、早くこの場から離れたい。もうどこへなりと行ってくれないかしら。ここぞとばかりでしょうから、やめるつもりはないでしょうけれど。

私でさえそう思っているのだから、黒沢さんはそれ以上だろう。

なにかしら理由をつけて、この場から離れようか。

そう思っていると、黒沢さんが立ち上がった。

「今日はこれから約束があるから。じゃあまた今度ゆっくりとね」

さすがにこれ以上は無理みたいね。

「じゃあね、時任さん」

黒沢さんは私だけを見て、早足でこの場を離れていった。

さて、取り残された私はどうなるのだろうか。別に彼女を恨むというわけではないけれど、居づらい事には変わりはない。

「本当に用事なのかなあ」

工藤さんが黒沢さんが歩いていった方を見て言う。

わざわざ言う事かと思ったが、あえて言う事で余計に貶める事ができる。どこまでも黒い。

さて、私もこの場を離れよう。

そう思ったけれど、一瞬遅かった。

「ねえ、今日が久しぶりの再会ってわけじゃなさそうだけど、前から会ってたの？」

加藤さんが訊いてくる。

ああ、厄介な事になってきた。ここで無視をすると、これから先の仕事に……ああ、それほど変わらないかも。

それでも、黒沢さんには迷惑をかける事もあるだろうし、なかなか難しい事になったかも。

さて、どう答えたものか。

「そうね。最近になってからね」

「最近……ね。確かに頻繁に会うようには思えないけどね。それにしても、時任さんとね……美雪もよっぽどなわけね」

「仕事辞めてから、付き合い悪くなったしな」

竹下くんがそう言うが、それは結婚したならしょうがないと思う。しかし、彼にはそういう考えはなさそうだ。

「それにしても、時任さんも大変ね。美雪って離婚したんでしょ」

加藤さんが率直に言う。やっぱり知っているのか。

「どうでしょうね」

ここは言葉を濁しておこう。

確かに面倒に思う事もあるけれど、彼女たちにそれを言うほどではないし、言えばもっと大袈

褒な事になるのは目に見えている。

このまま私の事は、いなかった事にでもしてくれるのが一番ありがたい。

早くどこかへ行ってくれないかな。もうそろそろ限界かも。

「そもそも、離婚の話って知ってたわけ？」

私はそもそも社内の誰ともそういう話をしていないので、知らない可能性もあると思ったようだ。

「最近聞いたわ」

そう言うと彼女は、ふうんと頷いただけだった。

あの黒沢さんが、そういう話をした事が意外だったのだろう。

噂程度ならば、ずっと前に聞いていたのだけれど、それを言う必要はないし、彼女から直接聞いたのは実際最近だ。嘘は言っていない。

「まあいいわ。そうだ。せっかくだし、今日の同期会、あなたも来る？」

加藤さんは予想外な事を口にした。

「おいおい、マジかよ」

竹下くんがあからさまに怪訝そうな顔をする。そりゃイヤでしょうけれど、もう少し配慮をしてもいいのではないかしら。もっとも、彼にそういうものがない事はわかっているけれど。

「いいんじゃない？ 美雪の事を色々聞けそうだし」

工藤さんは乗り気だ。

私から色々聞き出して、黒沢さんの事をこれからどうしようかと話したいのだろう。

私からどういう事を聞き出そうとしているのだろうかは容易に想像できるが、果たしてどのくらいの情報があると思っているのだろう。

少し考えて、もしかすると彼女たちが期待している以上にあるかもしれないと気付いてしまった。なにしろ、街コンと一緒に参加したわけだし。

そうだとすると、私が苦痛なのを我慢してまで、この人たちに提供する情報ではない。

「ごめんなさい。ちょっとこれから――」

「本当に用事なんかあるの？ 帰りたいただけなんじゃない？」

加藤さんが冷たい目で私を見る。

凶星だ。

さすがというべきか、女の勘というだけでなく、的確に感情を読みとってくる。

「いいじゃないたまには。同期なんだし、親睦を深めましょうよ」

白々しさを通り越しているし、むしろ拒否を認めないオーラが出ている。そのオーラに一瞬怯んだが、ここで負けるわけにはいかない。

「参加するつもりはないわ。それならいいのかしら？」

言い訳なんか必要ない。率直に言ってやった。

「結構言うじゃない。それじゃこっちも言うわね。美雪の情報、なにか聞いてたら教えてよ」

互いに遠慮がなくなっている。

別に黒沢さんを庇うわけではないが、彼女たちに余計な情報を与えたくない。

「別にたいした情報はないと思うけれど。世間話程度しかしてないから」

「本当かしら」

加藤さんが私の心の中を見ようとするかのように、鋭い視線を向けてくる。

ここは動揺せずに、さらっと受け流そう。

「加藤さんも知っているでしょうけれど、私は別に黒沢さんと親しいわけじゃないもの。彼女の味方をする必要があると思う？」

真顔で返すと加藤さんは少し考える。

「……そうね。あなたが彼女を守る必要なんかないわね。そもそも、美雪があなたに重要な事を話すとは思えないし」

やはりそう考えるだろう。それが普通だ。

まさか、誰にも相談していない妊娠という話題があるとは思ひもしないだろう。

「わかったわ。どうせ美雪の暇つぶしでしょうし。もしなにか聞いたら教えて」

加藤さんは笑みを浮かべる。

「いいわよ」

そういう口約束で、この場から解放されるなら問題ない。

「そういう事だから、今日はいつも通り三人になっちゃったけどいいよね」

加藤さんが二人を見る。

「まあ、しょうがないか。どのみち、オレは三人の方がいいけど」

「ちょっと残念かも。せっかくやらみそちゃんをいじれると思ったのに」

工藤さんが余計な事を言ったせいで、竹下くんが反応してしまう。

「そっか。こいつやらみそだったっけ。めちゃくちゃレアじゃん」

「そうだ。佐門が相手してあげなよ」

工藤さんが竹下くんをけしかける。

「ヤだよ。勘弁しろって。オレだって相手は選ぶぞ」

「それは失礼じゃない」

工藤さんはケラケラと笑う。

私だってこんなヤツなんかお断りだ。

「その辺にしときなよ。もう行こ」

意外にも加藤さんが二人を止めた。

「今しかいじれないけど、反応がないからつまんねえか。それに腹も減ったし、さっさと店に行こうぜ」

「そうね。今じゃなくても色々できそうだし」

竹下くんと工藤さんは、加藤さんの言葉に従うようだ。どうやら、そういう力関係のようだ。

「じゃあ、今日はこの辺で。また明日」

そう言うと、加藤さんを先頭に三人は去っていった。

はあ～。

疲れた。

あんな連中と付き合うのは大変だ。黒沢さんもよく付き合えていたものだ。あそこに彼女が入ると、カオスとしか言いようがない悲惨な状態になりそうだ。

それにしても、思いもしない事になってしまった。

どうして私がこんな目に。

黒沢さんの妊娠と離婚。そこからのこの展開。

一時間にも満たないはずの時間なのに、一週間くらい拘束されたような疲れだ。

思い返すと、なんと内容が濃い時間だったかと驚く。

この手の話題がないどころか、そもそもそういう話をする相手がない私にとって、全くの未知だった。

「疲れた」

今日は厄日だろうか。

なんとも重い内容を知ってしまった。

私には関係のない事のはずなのに、どうしても関わらざるを得なくなってしまった。

「損な役回り」

とにかく、私にできる事はなさそうだし、今日はもう帰ろう。そして、できれば忘れたい。

## 落ち着いて考えよう

---

部屋に帰ってくると、どっと疲れが押し寄せてきた。

お腹は空いているはずなのに、食べるのが面倒で、結局なにも食べなかった。

その代わりとってはなんだけど、珍しく入浴剤を入れる事にした。

適当に入れたのでよくわからないけれど、とにかく黄色くなったお湯にゆっくりと浸かる。

ざばあっとお湯がこぼれる。

「ふあ～、気持ちいい」

思わず声が出る。

肩まで浸かり目を閉じる。

そうしていると、思い出したくもないのに、今日の事を思い出してしまう。

「妊娠か……」

私には縁のない事なのに、無意識に自分のお腹を触っていた。

どういう感じなのか、同じ女のはずなのに想像できない。

お腹の中に自分ではない命が存在する。

「わからない」

スプラッター要素があるSF映画で、エイリアンがお腹を突き破って出てくる——そういうイメージしかなかった。

「女としてどうなんだろう」

そういう想像をしてしまうというのは、女として問題があるのだろう。それでもやっぱり、妊娠というものが想像できない。

そもそも、そうなるには男と交わらないといけない。

「無理無理」

交際した事もない私には、それすらも想像できない。

もしかすると、中学生の方が詳しいんじゃないだろうか。

きっとそうだろう。こういう事に関しては、私は義務教育の子たちに教えてもらわないといけなくらいだろう。よくネットニュースなどで話題になる援助交際をしている女子高校生なんか、私の大先輩となるのだろう。

だからといって、そういう事をしたいわけじゃない。

する必要がないとさえ思っているくらいだ。

性欲というものがない私は、草食系ですらなく絶食系なのだそう。特に意識した事がないので、そういうカテゴリすらよくわからなかった。

私みたいな人が増えているからなのか、世間では少子化が問題になっている。

そういう観点からすれば、妊娠して出産する黒沢さんは、世間のためになっているのだろう。そして、私みたいな女は必要ないのだろう。

女は子どもを産むための道具だ——というような主旨の事を政治家が発言して問題になったりもしたが、女からしてもそう思う事がないわけでもない。かなり少数派だろうけれど。

結婚と出産が女の幸せ——それは昔から慣習のようにあった。それを否定するつもりはないし、それ以外にも幸せはあると思うだけで、そういう幸せだってあると認めている。幸せなんか人それぞれだ。誰かに決められる事ではないし、誰かの考えを基準にするものではない。

それでもやっぱり、今の私には縁遠い事でしかない。

「どうしてこんな事を考えないといけないんだろう」

湯船のお湯をすくって、ぱしゃぱしゃと顔を洗う。

忘れちゃおう。

考える必要はない事だ。

私には関係のない事だ。

黒沢さんになにを相談されても、私にはどうにもできない事だ。それは彼女だってわかっているはずだ。他に話せる相手がないから、仕方なく私に話したただけだ。

そう——私しかいないから。

「私しかいないのか」

それは重いな。ただでさえ内容が重いというのに、その事実がさらに重くさせている。

そう考えると、彼女は彼女で寂しいのかもしれない。

派手に遊んでいて、知り合いも多いけれど、それはあくまでも`知り合い、という事なんだろう。決して`友達、という存在ではないのだ。だからこそ、一緒の時間は過ごせても相談はできない。

結局、私と一緒にか。

どれだけ派手で楽しそうでも本質は空っぽだ。見せかけだけで変わらない。別に彼女だけでなく、多く的人是うなのかもしれない。

私にはその見せかけすらないわけだけれど。

「もうやめよう」

もう彼女の事を考えるのをやめようと思うのだけれど、最近の私の生活は彼女が中心になっている気がして、どうしても考えてしまう。

親しくもなかった人の事ばかりなんて、彼女の思うつぼすぎて悲しい。

聞かされてしまったからには、なかった事にはできそうにない。

こんなの、完全に私の負けだ。意識的にしろ無意識にしろ、彼女は見事に手駒を獲得したわけだ。

だけど、私だって無償で協力するつもりはない。別に金銭を要求するわけではないけれど、無理だと思えば突き放すつもりだ。

そもそも付き合いがあるわけではないのだから、彼女に恨まれて疎遠になっても問題ない。むしろ、その方が楽になれていい。

「とにかく、彼女がなんとかしないとイケない問題だし。ちょっとくらいは手伝ってあげましょうか」

そうこうしていると、思ったより長湯になっていて、あやうくのぼせてしまうところだった。

お風呂を出て常温の水を飲む。

じんわりと水分が体中に広がっていく気がする。

「ちょっとお腹が空いたかも」

お風呂に浸かって少し疲れがとれたのか、急に空腹感がおそってきた。

「なにを作ろうかな」

明日のお弁当もあるので、それを考えて作らなければいけない。かといって、今から時間がかかるものは却下だ。

そして、がっつりとした重たいものも、就寝前には遠慮したい。

そうなる……オムレツにしよう。たしか卵は冷蔵庫にあったはずだ。

「うん、数はあるか」

冷蔵庫を開けると、ちょうどいい感じにあった。

「あとは……と」

プレーンだとさすがに物足りない。かといって、今から買い物に行くのは億劫なので、冷蔵庫に残っているものを使うしかない。

ごそごそと探すと、小さなパックの豆腐が入っていた。

「これはいいかも」

お味噌汁の具材に使おうと思っていたけれど、消費期限もあるので今使おう。

他に使えるような具材はなく、ピザ用のとろけるチーズがあっただけだが、これで充分だ。

豆腐をぐちゃぐちゃに潰して玉子と合わせると、隠し味でマヨネーズを加える。そこにチーズを入れて混ぜたものをフライパンでじっくりと焼く。

ふっくらと焼けたので満足だ。

お弁当用に小さいものも作っておく。

「うん、ぼっちり」

トマトケチャップをかけて熱々を食べる。ふっくらふわふわのオムレツは、私を中から包んでくれるみたいだ。我ながら大成功。ほどほどにボリュームもあって満足。

簡単に食事を済ませて休む事にした。

## 終わらせるための突き放し

---

翌日、黒沢さんからメールがあった。

また一緒にお昼かと思ったけれど、仕事が終わってから会いたいというものだった。それも会社近くの公園ではなく、会社からも駅からも離れた場所を指定してきた。

確かに会社近くや駅周辺だと、またあの三人に見つかってしまう。

頻繁に会っていると知れば、どんな追求をしてくるかわかったものではない。

彼女はもちろん会いたくないだろうし、私も会いたくない。なのでそれは構わないのだけれど、いったい昨日の今日でなんだろう。

妊娠に関して相談されても、私にはなにもできないし、解決策も思いついていない。

それともまだ他になにかあるのだろうか。

とにかく行けばわかるか。

少しもやもやしたまま仕事を定時に終える。

あの三人は、それぞれまだ仕事をしている。私はいつものように片付けて会社を出る。

「ねえ、今日も美雪と会うの？」

工藤さんが追いかけてきてそう言った。

「私が黒沢さんと会うのを楽しみにしているように見える？」

率直に言ってやると、工藤さんは黙ってしまった。

「……まあ、時任さんの性格だと、美雪と話すのはね。そもそも、誰かと話しているのもあまり見ないし」

精一杯の皮肉だろうか。それともただの確認だろうか。どちらでもいいけれど。

「ごめん。急いで帰ってるみたいだったから」

「私はいつもこうだけど」

私は基本は定時にきちんと仕事を終えている。翌日に持ち越すのではなく、当日中にきちんと片付けているだけだ。

「そうだっけ。うん、そうかも。ごめんね、呼び止めて。わたし、まだ仕事あるから」

普段が普段だけに、どうやら信じてくれたようだ。

そう言うと、工藤さんは戻っていった。

はあ、と大きなため息を吐く。

確かに今の黒沢さんは、話のネタとしては充分すぎるくらい面白い。気になる事がわんさかある。

なので、どこからでも情報を得たいと思うのは普通だろう。特にあの三人なら。

そして、その情報源として、私はかなり重要なポジションにいる。

黒沢さんは基本的には、私にしか話していないようなので、彼女の情報は私が言わない限り知る事はできないだろう。

そして私は他に話す相手がいないので、話が広まる事がない。

噂を広めるつもりはないし、彼女を庇って黙っているつもりもないけれど、話せば余計に面倒になる事だけは明らかだ。

「面倒だわ」

あの三人に見つかった事が、やはり失敗だった。どうしようもなかったのかもしれないけれど、会社の近くはやめておくべきだったかもしれない。

「でも、お昼は無理か」

そもそもの始まりは、一緒にお昼を食べる事だったので、それなら会社の遠くというのは無理だ。自然と近くになるので、やはり時間の問題だったのかもしれない。

結果的に、時間の問題ただだけで、諦めるしかない事のようにだ。

「それにしても、結局なんだろう」

仕事でも少し考えたけれど、やはり思いつかなかった。

「ごめんね、遠くまで呼び出して」

彼女に指定されたのは、喫茶店でも居酒屋でもない。郊外にある複合型のショッピングモールだった。

最初にメールを受け取った時は、なんの冗談かと思った。

普通に考えれば、二人で話をするには、全く向いていない場所だ。じっくりと話をするなら、個室があるようなお店がいいような気がする。

しかし、少しだけ考えて、なんとなく想像できた。

匂いか。

飲食店だとどうしても匂いがある。妊娠中の彼女には、耐えられないものがあるのだろう。

だからといって、この場所はどうかんどうかなんかとは思わない。

映画館や様々なお店が入っている巨大なショッピングモールは、平日だけれど夕方だからだろうか、多くの人が通路を歩き交っている。

そんな人々を眺めるように、私たちは休憩スペースとして設けられたベンチに座っている。行き交う人々が私たちを気にする様子はない。当たり前だ。

まさか深刻な話をしている――これからするとは思えないだろう。

私が逆の立場なら同じだ。他の人の会話を気にする事はない。

そう考えると、これほど秘密の話に適した場所はないのかもしれない。

もともと、彼女がそこまで考えたのかはわからないけれど。

そもそも、そこまで思慮深ければ、こんな事にはなっていない気がする。

「今日はどういう用件かしら」

黒沢さんはなにも話さないの、私から切り出すしかなかった。

「あたしは、一晩考えたんだよね」

うわっ、深刻な雰囲気だ。

まさか、昨日は出産するつもりだったのに、中絶するとか言い出すんじゃないでしょうね。

どうするにしろ、彼女の問題なので、最終的には彼女が決めなければいけない。私がとやかく言う事ではない。特になにができるわけもなく、こうして話を聞く程度だ。

「うん、それで」

彼女が話しやすいように相づちを打つ。

「この前の街コンでさ、お医者さんいたじゃない」

「お医者さん？」

彼女に言われるまで、街コンの事は完全に過去の事で、すっかり忘れていた。

お医者さん、お医者さん……。

街コンで会った人たちを思い出していく。結構な数の人に会ったが、そういえばそんな人がいたような気がする。

そうそう、黒沢さんが結構本気になっていた人がいた。職業が医者だったはずだ。

確かあの人は……。

その時に名刺を交換したはずだ。名刺ホルダーを確認する。

名刺を見つけるのに時間がかかった。というのも、名前を忘れていたのだ。仕事関係の人たちのものを除外して、ようやく二枚の名刺を見つけた。一緒にいた人は福祉関係だった。そして、そのお医者さんは――

「産婦人科医」

冗談でしょ。

あの時はなにも意識しなかった。ただ「お医者さん」という程度だったのだが、ここに来てこれほど頼りになるとは思いもしなかった。

しかし、だからといってなにか変わるのだろうか。

確かに知らない人よりは――って、私ならちょっとイヤかも。妊娠出産はかなりデリケートだ。それを、知っている人に――それも男の人に知られるのは、相手が医者であっても恥ずかしさがある。

「これって運命だと思わない？」

黒沢さんは目を輝かせている。

運命ですって？ 思わない思わない。

都合がいいというだけで、これは決して運命なんかじゃない。

少なくとも、これから進展するような関係にはなれないだろう。むしろこの場限りの関係だ。黒沢さんは、堂々とあの時の彼に会えるという事で、まるで少女のように胸をときめかせているようだ。

しかし、この状況はやはり逆効果だろう。

妊娠をしているという事は、通常ならば相手がいるという事だ。そういう行為があったという事だ。

もちろん、行為の有無でどうなるわけではないが、彼女の場合は妊娠している。

果たして、自分が知らない男との子どもをこれから産もうとする女と、付き合っていこうとする男なんかいるだろうか。いたとしたら、よほどのお人好しだろう。いや、ただの愚か者か。

だが今の彼女には、そういう考えはないのだろう。とにかく、会えるという事が重要らしい。

「それでお願ひがあるんだけど、時任さんも一緒に来て欲しいの」

「はい？」

彼女がいきなりなにを言い出したのかわからない。一緒に行く？ どこに？

……って、この流れだと産婦人科って事？ それもあの人の？

「黒沢さん、本気なの？」

「なにが？ あの人に会えるんだよ。プライベートじゃないけどさ、堂々と会いに行けるんだよ」

ダメだ。完全に周囲が見えていない。

「これがきっかけで、二人の子どもとして……素敵じゃない」

黒沢さんは指を組んで目を輝かせている。考えるだけでも恥ずかしいが、夢見る乙女といったところか。

「……なんて、もちろんそれは無理でしょうね。そのくらいわかってるわよ」

と思えば急に冷静になる。

なんなの。情緒不安定なの？

「さすがにコブ付きと付き合う男なんかいないわよね。そりゃ、付き合いたいって思ってたけどさ、こうなったら諦めるしかないでしょ。さすがにそこまでじゃないわよ。それでも、なにかしらの繋がりくらいは欲しいじゃない。担当してもらったら、色々相談したりで会ったり話したりできるでしょ」

情緒不安定かと思ったが、意外と冷静なようだ。しかも、自分の武器を利用するつもり満々だ。利用できるものは全て――それは正しいのかもしれない。

ともかく、きちんと考える事はできるようだ。その常識は、彼女の物差しではあるけれど。

「黒沢さんは恥ずかしくないの？」

「恥ずかしい？」

彼女は私の質問の意味がわからないようで首を傾げる。

「だって、産婦人科でしょ。色々見られるわけじゃない」

口には出せないけれど、普通ならそれでわかるでしょ。

私にとっては重要だが、彼女にとってはそうではないらしく、ため息が返ってきただけだ。

「確かに綺麗な感じじゃなくなってるかもだけど、いいじゃない見られたって。それで興奮させられたらあたしの勝ちだし」

勝ちって……。興奮させられたらとか、信じられない。

「……って、そうか。時任さんは処女だっけ。誰にも見せた事がないんだった。そりゃ恥ずかしいって思うか。そんなのって小学生くらいしかいないと思ってた」

処女だろうが経験があろうが、一般人に見せる事のない部分を見せるのだから恥ずかしいはずだ。

「たいしたものじゃないって。そんな深刻に考えるようなものじゃないし。みんな同じようなものだしね。まあ、男は男で、自分のサイズがどうか考えるみたいだけど、女の場合はそんなの

あまり関係ないんじゃない？ むしろ上の方でしょ」

そう言いながら、黒沢さんは自分の胸を触る。

確かに女としては、そっちの方が気になる場所ではある。

だからといって、下半身が恥ずかしくないかどうかというのは別だ。

「そういうわけじゃなくて……」

「そういう事でしょ。あたしは、知らないおっさんに見られていじられるなら、知っている人がいいの。だからお願い。一緒に来てよ」

最近は女性が増えているでしょ……と言いたいが、相手が同じ女であっても恥ずかしい。多少はマシというだけだ。

「まあ、別に私が見せるわけじゃないから、黒沢さんの好きにすればいいと思うけれど……。それで、どうして一緒に行くって事になるわけ？」

「だって、心細いじゃない」

彼女は少し上目遣いで言った。

相手が男だったら、これで全て納得して受け入れるのだろう。しかし、相手は女である私だ。

「一人で行きなさいよ」

きっぱりと断る。

「どうしてよ。一人だときつついんだって」

「そもそも、一人で行くものじゃないの？」

パートナーと一緒にいく事もあるだろうが、ほとんどは一人だろう。産婦人科に男というのは、まるで下着売場に一緒に行くくらい、男にとっていづらいものではないだろうか。

「そうかもしれないけど、あたしは一人はイヤなの」

「相手は知っている人じゃない」

会いたいと思っている相手のはずだ。だったらなおさら、一人で行く方がいいだろう。

「それはそうなんだけど、だからこそ気まずいじゃない。だって、妊娠週がわかったらさ、逆算されたら……」

なるほど。

こういう事には、考えが回るようだ。

確かに妊娠週を計算すると、あの街コンの時には、既にそうだったという事になる。

つまり、偽っていたという事が明らかになる。

「時任さんが一緒だったらさ、なにか事情があるかもとか思ってくれるかもしれないじゃん」

どういう考えだ。思えるものなの？

「いいから、とにかくお願い」

顔の前で手を合わせて頼まれる。

どうしたものか。

別に断ってもいいはずなのだが、どうにも断りづらい。

完全に彼女のペースになっている。

そもそも、私にはこうして頼まれるという経験がないので、断り方がよくわからない。

そういう事も含めて、完全に私の負けだ。

「わかったわよ。一緒に行つてあげる。でも、ついていだけだからね。事情の説明とか、そういう事はしないから」

きっぱりと言うと、ええ〜と抗議の声を上げるが、しょうがないと納得してくれたようだ。

一緒に行くだけでも、かなり協力的だと思って欲しい。充分すぎるだろう。それ以上の事をする義理はない。

「それともうひとつお願いがあるんだけど……」

と、珍しく言いづらそうにしている。

「なに？」

これ以上なにがあるのか想像できない。いったい、なにを頼むつもりなんだろうか。

「電話してくれない？」

小首を傾げながら言われる。

「電話？」

電話とはどういう事だろうか。どこに電話をかけると？

「うん。あたしからするのってさ、なんだかって感じじゃない。だから、友達の事で相談が……みたいな感じでさ。時任さんから電話して欲しいんだ」

「……………」

絶句。

これほど当てはまった瞬間はないだろう。本当になんの言葉も出てこない事があるのだと知った。

「自分でしないさいよ、それくらい。自分の事でしょ」

あまりの事に、取り繕おうとすら思わなかった。率直な言葉しか出てこない。

「きついなあ。お願いだって。今度だけ。ね」

ね、とか言われても、どうして私がそんなお膳立てをしなければならないのか。

「今度だけとかじゃなくて、そういうのは自分でしないと」

「あたしがするより、時任さんがしてくれる方がいいんだって。そうしたらさ、一緒に来てても不思議じゃないでしょ」

……一緒に行く事が前提なら、確かに私が電話をした方が自然だろう。

だからといって、彼女の論理に付き合う必要はない。

「電話は自分でして。心細いから一緒に来た——それだけで充分でしょ」

「そんなあ。友達でしょ」

拜むように頼まれてもね。そもそも、黒沢さんと友達になった記憶はない。元同僚——それが私たちの関係だ。

「申し訳ないけど、友達って関係じゃないから」

「はっきり言うわね。少くく、そういう感情があってもいいと思わない？」

「あいにくと。とにかく、一緒に行つてあげるから、連絡は自分でして」

「時任さんって、ホントにクールっていうか、はっきり言うよね。わかったわよ。わかりました

。自分で連絡します。それでいいんですよ」

どうして駄々っ子みたいなんだろう。

話しにくいのはわかるけれど、だからこそ自分でさせないと。正直なところ、頼られる事すら勘弁して欲しい。なんというか、頼られているというよりも、巻き込まれているという感じだからだ。

「そうと決めたら、すぐにした方がいいんじゃないかしら」

私は早速電話するように促す。

「えっ？ 今ここで？」

「もちろん。事前に予約しておかないと」

ここで日和られると、結局この場だけの話になってしまう。せつかく、そういう人脈があるならば、使わないわけにはいかないだろう。彼女の場合、そうでもしないとどうなるかわかったものではない。

無理矢理にでもさせないと。

「でもさ、明日でもよくない？」

「よくない。予定を立てるなら、早い方がいいでしょ。今すぐしなさい」

どうせ彼女だって、こうしてけしかけられないとできないとわかっているはずだ。だからこそ、私にこの話をしているのだろう。本当に心細かったというのものもあるのだろうけれど。

「わかったわよ。わかりました」

彼女はスマートフォンを取り出して、街コンの時に交換した番号に電話をかける。

「……………」

おや？ すぐに出ないみたいだ。

「ちょっと待って。それって、プライベートの番号じゃないの？」

当たり前だろうけれど、仕事中に携帯電話に出る事はないだろう。

「出ないみたい。しょうがないから明日に……」

「ここに掛けて」

名刺を彼女の前に出す。

そこには病院の番号が書かれている。

「いいじゃない。かけたんだし」

「よくない。きちんとかけなさい」

なんだか子どもを叱る母親みたいだな、と思いつつ、絶対に妥協させない。

「わかったわよ。わかりました。しょうがないな……」

ぶつぶつ文句を言いながら、電話をかけなおす。

自分の事でしょうに。いい大人のくせに、どうしてここまでしてあげないといけないんだろう

。

「もしもし……」

どうやら繋がったらしい。まあ、病院にかけているわけだから、そうでないといけないんだけど。

「はい。深田先生はいますか？ ええ、ちょっと相談したい事があって……はい、お願いします」

どういふ話をしているのかわからないけれど、もう少し電話の仕方というものがあるでしょうに。

「ああ、深田さんですか。この前の街コンでお話しさせてもらった黒沢です。お久しぶりです」  
相手が覚えている前提で話している。こっちもそうだったけれど、向こうもそれなりの人たちと話しをしているだろうし、連絡先の交換もしている。果たしてどこまで覚えているものか。  
「……はい、そうです。少し相談したい事があって。週末って大丈夫ですか？ ……はい。……はい。わかりました。ありがとうございます」

どうやら話はできたらしい。彼女は緊張した感じだが、徐々に安心した表情になってきている。

こういうものは、一度話してしまえば楽になるものだ。もっとも、その最初のきっかけが難しいのだけれど。

「……………はい。わかりました。それじゃ」  
通話が終わる頃には、彼女は笑顔になっていた。抱えていたものがなくなり、すっきりした表情になっている。

「きちんと話ができたいね」  
「うん。週末に時間を作ってくれるって。あたしだけ、特別に相談にのってくれるって」  
「そ、そうなんだ」  
黒沢さんがあまりにテンション高く話すので、思わず気圧されてしまう。しかもその内容だ。まさか病院の予約をするわけでなく、個人的に会う約束になっているとは。  
これが彼女のテクニックなのだろうか。どうすれば、そういう流れになるのか、私には全くわからない。

「よかったんじゃない？ じゃあ、私は――」  
「時任さんも一緒に行くって言ってあるから」  
「……………そう」  
そうなんだ。逃げる事はできないらしい。  
個人的に会える約束となれば、お邪魔虫の私はお役御免になるかと思ったのだけれど、どうやらそうはならなかったようだ。

ここまで巻き込まれたら、もう抜け出る事はできないらしい。  
「そういうわけで、今週末だから。駅で待ち合わせしましょ」  
一方的に言って、彼女は立ち上がった。  
「せっかく来たんだし、ちょっと見て回ろうよ」  
「えっ？」

話が終わったら、すぐに帰るつもりだったのだけれど……。  
と、そんな事を言ったところで、どうにかなるとは思えない。  
「冬物のブーツとか、ちょっと見たいんだ」

ブーツ……ね。一応は持っているけれど、バーゲンで安く手に入れた品だ。オススメ扱いされていたので、特に考えず購入した。

それから数度履いたが、シューズボックスの中で眠っている。

「時任さん、行こうよ」

話をして楽になった黒沢さんは、やけに積極的だった。

「私は別に……」

「いいじゃない。ほら、せっかくなんだし」

ダメだ。なにを言っても、今の彼女には通じそうにない。

はあ……と大きなため息を吐いて諦めるしかなかった。

結局ブーツだけでなく、冬物の服やコートなど、いくつかのショップを見て回った。黒沢さんはブーツとコートを買っていたが、私はもちろん見ているだけだった。

疲れた。

一人で買い物に行く時は、ある程度お店を決めているので、こんなに回る事はない。

よくデートで、女の買い物は疲れると男はぼやけらしいが、まさにこんな気持ちなのだろう。

確かに疲れる。すぐに決めてしまわず、色々と検討する気持ちはわからなくはないけれど、このショッピングモールに入っている全ての店を回りそうな勢いは、同じ女でも私には無理だ。

今日のお礼にと、ファストフードでホットサンドを奢ってくれたが、果たしてこれでよかったのかどうか。

## 再会と診察と

---

週末までは、ランチは一人だった。私を呼び出すと、例の三人に色々と感じられる可能性があるので控えているのだろう。そういう事はきちんと理解している。

黒沢さんからの連絡がないのか、加藤さんがたまに私の方を見てチェックしているので、この行動は正解だったようだ。

私としても、余計な事を聞かれないので助かった。

そんなわけで、わりと週末までは平穏だった。

あまりに平穏だったので、これからどうなるのか不安にもなった。そして、それはほどほどに現実となった。

当日は、街コンの時ほどではないけれど、少し化けてみた。さすがに普段の私だと、あの時の姿と一致しないだろう。本当に同一人物かと思われてしまいそうだ。とにかく、わかってもらうためにも、それなりにしておかないといけない。

それにしても――

「遅い」

待ち合わせの時間になっても、なかなか黒沢さんは現れない。

逆の立場ならともかく、どうして付き添いだけの私がこれほど待たされないといけないのか。

五分や一〇分なら多少は許容範囲としたものだが、既に三〇分は待っている。

時間前行動で早く来たわけではなく、私は待ち合わせ時間ちょうどに来ている。

「遅い。どうなってるわけ？」

ちなみに電話をかけても、留守電になるだけだ。この一〇分ほどの間に、何度かそれを繰り返している。

こうなってくると、携帯電話はなんの役にも立たない。持っていないのと同じだ。

昭和の時代は、携帯電話がなくてこういう感じが当たり前だったらしいので、こんなヤキモキした気分が普通だったのだろう。今まさにそんな気分だ。

恋人同士ならば、それも甘い時間になるのだろうけれど、恋人でもない相手に対してこれは理不尽だ。

あまりきっちりしているようには思っていなかったけれど、まさかここまでとは思わなかった。

昼休みや終業後に会う時は、たいてい彼女の方が先に来ていた。

もしかしてなにかあったのか……と心配になってきた。

事故にでも遭ったのかしら。

さすがに、なにかの事件に巻き込まれたとは考えにくい。

緊急の用事ができたのなら、連絡くらいあってもいいだろう。そのくらいの常識はあると思い

たい。

一度考え出すと、ますます心配になってきた。

家に行けば解決しそうなものだけれど、あいにくと彼女の住所は知らない。

そういえば街コンの時もかなり待たされたな……と思い出す。

「待つしかないか」

結局それしかできそうにない。

これほど多くの人が行き交っているのに、肝心の人はいないのだから不思議だ。

時計を見ると、あれから一〇分——待ち合わせ時間からは四〇分が過ぎている。

予約の時間が迫っているにも関わらず、彼女はなかなか現れない。

私としても、彼女を待つほど暇ではない。誰かと会う予定はもちろんないけれど、ここで無為に時間を浪費するつもりはない。

あと二〇分。待ち合わせから一時間待てば充分だろう。それ以上は、待ってあげる義理はない。そもそも遅刻する方が悪い。

そう決めたら、少しだけ苦痛が和らいだ。

そうして待つこと一〇分。

自分が決めた期限には少し早いけれど、そろそろ帰ろうかと考えた頃、ようやく黒沢さんがやってきた。

「それじゃ、行こっか」

やってくるなり、彼女はそう言った。

なに、それ。

なにか言う事があるんじゃないの？

「黒沢さん、まずは言う事がありそうなものだけど」

彼女との関係に亀裂が走ろうが、私には関係ないので問題はない。

てっきり言い訳でもするかと思いきや、彼女はなにを言われているのかわからないようで、首を傾げて不思議そうに私を見る。

「どうしたの？ ああ、おはよう」

ピント外れもいいとこだ。挨拶は大事だけれど、今はそれよりももっと大事なものがある。

「そういえば、今日はちゃんとキメてるじゃない。やっぱり、時任さんもあのお医者さん狙いだったりするわけ？」

いったいなにを言っているのか。

「そんなわけないでしょ」

「そっか。よかったよかった。本当にやめてよね」

「そんな事はどうでもいいの。はつきり言うわね。遅刻して言う事はないわけ？」

どうしてこんな会話をしないといけないのか。

「遅刻？ えっと……」

彼女はスマートフォンを取り出して時間を確認する。

「待ち合わせって、今じゃなかった？」

「一時間前ね」

彼女から受け取ったメールの画面を見せる。

「……ホントだ」

彼女はあっけらかんとしている。

「ごめんごめん。っていうか、それ書き間違いだから」

「……………」

書き間違い？ 書き間違いってなに？

遅刻の言い訳にはなかなか斬新だ。

素直に寝坊とでも言ってくれた方がまだいい。

「ホントだよ。だって、アポとってる時間まで、まだ一時間くらいあるし」

えっとね……と約束の時間を教えてくれる。

「今から移動したら、ちょうどいい感じでしょ」

悪気というものはなくそんな事を言う。

確かに彼女が言う時間が本当なら、確かに今くらいで充分だ。

だとしたら、本当に書き間違いなのかしら。

しかし、だからといって許されるというものではない。

「だから、別に遅刻じゃないし。書き間違っちゃったのはごめんけど」

ごめんと顔の前で手を合わせる。

イラッとなる。

ふつふつと怒りがわいてくる。

そんな事で、私は一時間を無駄にしたというのか。

当の本人は、さして悪いとは思っていない。

書き間違いは問題だが、遅刻はしていないという事になるし……この怒り、どこにぶつければいいのか。

「わかったわ。とにかく行きましょう」

とても許せるものではないけれど、これを引きずってもいい事はない。忘れるというよりも、一旦保留という事にしておこう。この埋め合わせになにか要求してもいい。

「ちょっと怖いけど……」

と、逃げ腰気味の黒沢さんが逃げようとする前に、なんとか到着しておかないといけない。

「いいから行きましょう」

駅から少し離れた場所に目的の病院はある。

「緊張してきた」

そう言いながら、黒沢さんは私の手を握ってくる。こういう事を自然にできる女って、やっぱり男は好きなのかもしれない。

「ここまで来てなに言ってるの。女は度胸でしょ」

ええい、と手を振り払う。

「時任さんって、ホントにクールなんだから。まあいいけどさ」

そう言いながらも視線が泳いでいる。そんなに緊張するんだ。

こうして独立している病院——最近クリニックって言うんだっけ？ ——に行く、目的って丸わかりだもんね。

耳鼻咽喉科とか泌尿器科とかも、ちょっと恥ずかしいって思っちゃうかも。産婦人科っていうのも、やっぱりそうなのかも。

妊娠って恥ずかしい行為って感じはないけれど、そうなるにはああいう事をしているわけで……。でも、それって私にとっては未知でも、普通は自然としているんだよね。だったらなにが恥ずかしいのかは想像できないけれど、とにかく人それぞれか。もしくは、私もそうならばわかるのかもしれない。

どうやら彼女が約束を取り付けたのは、本当にプライベートの時間らしく、診療時間外だった。

あの人も本当に仕事と関係なく会おうとしたのか。

彼女目当てなのか、ただのいい人なのか。多分後者だろうけれど。

「よし、行こう」

診療時間外に正面からというのはどうなんだろう。彼女は普通に入ろうとして——

「あれ？」

自動ドアは反応しなかった。

黒沢さんが不思議そうに私を見る。

そうして、もう一度前に立つ。

やっぱり反応しない。

当たり前でしょ。診療時間外なんだから、入れるはずがない。

なのに、彼女は意外だとばかりに、何度も試している。

「黒沢さん、ちょっと」

私は黒沢さんを手招きして呼ぶ。

「なにになに？」

黒沢さんがこっちに来る。

「診療時間外に入れるわけないでしょ」

「でも、約束したし。間違いはないって」

彼女はスマートフォンの画面を見せてアピールする。そこに表示されている時間は間違っていないのだろう。間違っているのは彼女の行動だ。

「だからでしょ。診察じゃなくて、プライベートとして約束したんじゃないの？」

「そうだけど」

「だったら、彼に連絡したら。今着きましたって」

そうだね、と言って彼女は連絡を入れる。

「すみません」

しばらくして、自動ドアの向こうから彼が現れた。街コンで知り合った産婦人科医。名前は――深田さんだったか。

「お久しぶりです。お電話の時は、まさかって思ったんですけど、また会えて嬉しいです」  
その笑顔は営業用には見えなかった。どうやら本当に歓迎されているらしい。

「時任さんもお久しぶりです」

私の事も覚えてくれていたようだ。

「お久しぶりです」

返事をする私の横で、黒沢さんは目を輝かせつつも緊張している。器用な。というか面白い。  
「とにかく中へどうぞ。午後の診察までしか時間がありませんが……」

「すみません。わざわざお時間を作ってください」

あわあわしている黒沢さんの代わりに私が答える。

「いえいえ。正直なところ、また会えるのが楽しみでしたから」

素直だな。彼の場合、その正直さが嫌味にならない。

「黒沢さん、行くわよ」

黒沢さんの手を引いて中に入る。

中に入るとパステル調で、病院には見えなかった。設えられている調度品も可愛らしく、ここは本当にそうなのか、もしかして別の場所と間違っていないか不安になった。

「どうぞこちらに」

と、普段は入れなさそうな場所に案内される。診察室を予想していたのだけれど。

それは私が相談内容を知っているからか。

案内されたのは、彼の作業部屋のような場所だった。ここの院長だろうから院長室か。

応接室も兼ねているのか、テーブルとソファもある。

「散らかってますけど」

そう言って、応接用と思われるソファをすすめられる。

「すみません」

私と黒沢さんはソファに座る。ふかふかだが沈みすぎない、私好みのソファに感動する。合皮じゃなくて本革みたいだし高そうだな……。

「どうぞ」

と、温かいお茶を出される。

「ありがとうございます」

そう言って、私たちはお茶に口をつける。

「それで、相談ってなんですか？ 僕にできるかわかりませんが」

そう言って向かいに座る。

「あの……」

相談の本人の黒沢さんは、あの……と俯いてもじもじしている。ここまで来てこれか。

「ほら」

と、肘でつつく。

「わかってるわよ」

弱々しい声が似合わない。

「えっとですね……」

そう言いながらも、私に助けを求めてくる。

「お願い。説明して」

どうやらギブアップのようだ。

やれやれ、とため息を吐く。結局こうなるのか。

「彼女、シングルマザーになる予定なんですけど、その事について相談にのってあげて下さい」

離婚とかそういうものは面倒なので省略して、細々した事はいまさらなので、端的に説明するところになってしまった。間違っではないはず。

「えっと……正直な事言わせてもらおうと、リアクションに困る感じですね」

深田さんは苦笑いしながら言う。

そりゃそうだろう。これをすぐに受け入れられる人は、なかなかいないはずだ。じっくり説明すると、もっと面倒になるでしょうけれど。

「時任さん、もうちょっとオブラートに包んでよね」

黒沢さんが抗議してくるが、そんなものは私の知ったところじゃない。

「どう言っただって、最終的にはそうなるんだし、間違っではないでしょ」

「そうだけど……」

こういうものは、さっさと核心を言った方が楽になれる……と思う。自分だったらどうだろう？ うん、もう少しオブラートに包んで欲しいかも。

でも、これは私なりの意地悪だ。そういう事にしておこう。

「そういうわけで彼女、今妊娠しているんですけど、パートナーがいないんですよ。でも産むって決めていて、それで深田さんの事を思い出したんです」

ちょっとだけフォロー。

「なるほど。もしよろしければ、当クリニックで出産のお手伝いはさせていただきますが、その先は僕よりも孝太郎の方が専門かもしれないですね」

孝太郎？ ああ、彼と一緒にいた人か。

確か福祉関係だとか言っていた気がする。

「孝太郎さんって？」

どうやらこの深田さんにご執心だった黒沢さんは、彼と一緒にいた友人は記憶にないようだ。

「街コンの時にいたでしょ。福祉関係のお仕事をしているって人」

どうにも忘れていたようなので説明する。

「街コンの時ね……」

黒沢さんはなんとか思い出そうとするが、どうやら諦めたらしい。

「ごめん。あんまり覚えてないや」

「あらあら。なんでしたらあいつも呼びましょうか。あいつがいた方がいいと思いますし。あいつの専門分野ですから」

なんだか大勢での相談になってきている。不思議な縁だけれど、こういう事を相談できる人がいるなんて、黒沢さんって幸せなんじゃないだろうか。

「彼の専門って、どういう事なんですか？」

産婦人科医の深田さんよりも専門って、どういう事なのかいまひとつわからない。福祉関係って……。言葉としてはわかっているけれど、ぼんやりとしていてよくわからない。

「そういえば、詳しくは言っていなかったかもですね。別に本人はいないけど大丈夫だろ。孝太郎は児童福祉施設で働いているんですよ」

児童福祉施設？　なんとなくは想像できてもピンとこない。

「それって、孤児院？」

黒沢さんがそんな事を口走る。

「孤児院ね……。ちょっと違うかな。親がいる子どもがほとんどだしね。ちなみに、そういうのはあいつの前では言わないで下さいね。そういうの、あいつすっげえ怒るんで」

「わかりました」

黒沢さんの返事はいいけれど、きっと口が滑るといふか、うっかり言ってしまいそうだ。

そういう私も、あまり区別ができていない。

親がいるのにそういう施設か。やっぱり、捨てられた子どもって事かな。

「とにかく、あいつも交えての方がよさそうなので呼びますね」

そう言って、深田さんは連絡をとってくれる。

「時任さん。なんだか本格的になってきてない？」

本格的？　意味がわからない。

「意味がわからないんだけど」

「ちょっと大袈裟になっているっていうか、ちょこっと相談するつもりだったんだけどさ……」

「いいんじゃない？　それだけ真剣に考えてくれているって事でしょ」

「そうかもしれないけど……」

どうにも歯切れが悪い。

「孝太郎、今少しだけ大丈夫みたいなんで、これから来てくれるみたいですよ」

なんとアポがとれたらしい。

「ありがとうございます」

予想外の事にあたふたしている黒沢さんの代わりにお礼を言う。

「まあ、あいつの事だし、来ないはずはないと思ってましたけどね」

深田さんが意味深に頷く。

「それじゃ、あいつが来る前に、少しだけ診察しておきましょうか。ちょっと状況を知っておきたいんで」

「えっと……」

黒沢さんはもじもじとしながら私を見る。

「ほら、診てもらいなさいよ。そのつもりだったんでしょ」

「そうだけど……」

どうしてここで恥じらう。あれだけ強気だったくせに。

彼女っていざという時に弱いみたいだ。こういうのも内弁慶って言うのかしら。

「どうぞ、診察室に」

「あ、はい。わかりました」

黒沢さんはずっと私に助けを求めるような目をしている。

しょうがないか。

「私も一緒にいていいですか？」

サービスだ。

「もちろんですよ。こちらです」

「助かった……。ありがとう」

黒沢さんが私に寄りかかってくる。

「いいから行きましょう」

私たちは案内されて診察室に向かった。

「順調みたいですね」

お決まりとも言えるような事を言う。それが普通なのだろうけれど、どうにもフィクションみたいに思えてしまう。

「信二はいるか？」

外からそんな声が聞こえた。

「どうやら孝太郎が来たみたいですね」

そう言って、深田さんが迎えに行く。

「すごい緊張してきた。絶対ここにいてよね」

黒沢さんが不安そうに私の腕を掴む。

これって、本当なら彼女のパートナーがすべき役目だと思うんだけどな……。

「わかってるわよ。ここまできて、先に帰ろうとは思わないわ」

「うん。お願いね」

掴む手に力が込められる。

彼女とてわかっているだろうけれど、やっぱり不安なのだろう。

大丈夫だと伝えるために、彼女の手を軽くポンポンと叩く。

「お久しぶりです」

そうこうしていると、笑顔で手を挙げながら雛見さんが入ってきた。

「まさか本当にまた会えるとは思いませんでしたよ。信二、サンキュな。っていうか、連絡しなかったってわかったら、すっげえ恨んでたけどな」

と、深田さんの肩をばしばし叩いている。

「今回はそういうんじゃないかな。まあ、本気でそういう時は、連絡してやらねえ

けど」

普段というか、街コンという場じゃないからだろうか、あの時よりも親しげな感じがある。そうだね。どうしてもああいう場だと、多少は緊張もあるし取り繕ったりもする。猫を被る事だってあるだろう。

こうして普段で会ってみると、親しみやすいと感じる人が他にもいたかもしれない。しかしそれはそれで、会う運命ではなかったというだけだろう。

「それにしても、街コンの時は医者ってのをアピールしなかったくせに、今は猛烈に利用してやがるよな」

「今回ばかりはしょうがないだろ。そういう用件なんだよ」

「そういう用件？ ……ってというか、結構マジな用件で呼ばれたのか？」

どうやら話は伝わっていないらしい。確かに考えれば、電話でする話でもないだろう。

「そういう事だ。どうしますか？ 僕から話しましょうか？」

黒沢さんからというのは難しいと判断して、深田さんは私を見る。

「どうする？」

一応、黒沢さんに訊く。

「ごめん。時任さんからお願い」

やっぱりそうなるか。しょうがない。

「かいつまんで説明しますと、彼女——黒沢さんは現在妊娠してまして」

「マジですか。まさか信二の……って、それはないか」

雛見さんが素直に驚く。少し冗談混じりだけれど、結構な驚きようだ。

「続きいいですか？」

「あ、すいません」

へこへこと謝られる。とにかく続けよう。

「これから出産という事になるわけですが、彼女は現在独身でして、入籍の予定もなく父親がいない状態なんです。シングルマザーという事になると思います」

雛見さんは大きく頷く。

「しかし彼女は、子育てをする自信がない。というよりも、私から見ても彼女にできるとは思えないんです」

「それで施設に？」

今まで笑顔だった雛見さんが、引き締まった顔になる。いや、険しいといった方がいいだろうか。怒っているわけではないだろうが、それにかかなり近い感情がある。

「そういう所って、どうなんだろうって」

ここで初めて黒沢さん本人が言う。

「そうですか」

雛見さんは、ゆっくりと大きくため息を吐く。

「育てられないなら産まないで欲しい——正直言うと、そういう気持ちがないわけじゃないです」

それだけを言って雛見さんは黙る。

黙ったままじっと黒沢さんを見ている。

「あ、あの……」

じっと見られて、黒沢さんが戸惑わないはずがない。

「あの……」

私に助けを求めてくる。さすがにこれは可哀想か。

「産婦人科医の僕が言うのもなんですけど、孝太朗の考えもわかるんです。生まれてくる子どもには関係のない事です。ですが、親の都合で不幸であって欲しくない。だからこそ、きちんと育てる事ができる——そういう最低条件があって、はじめて妊娠そして出産という風になって欲しいです」

彼は今までに大勢の子どもを取りあげてきたのだろう。もちろん、ほとんどの子どもは幸せだったろうけれど、中にはそうでない子どももいたはずだ。

出産の時にはそういう兆候はなくても、友人である雛見さんの職業を考えれば、自然とそういう情報が入ってくるだろう。

「だからといって、墮ろせなんて言わないですよ。黒沢さんの場合、愛情がないわけじゃなさそう。不安なだけなら、俺が相談にのりますよ。だから、安易にそんな事を考えないで下さい」

雛見さんは黒沢さんを見て頭を下げる。

「でも、そういう場所って、そのためにあるんじゃないんですか？」

さすがに孤児院という単語は使わなかったが、そういうニュアンスがはっきりとある。不躰とまでは言わないが、無神経ではあるかもしれない。しかし、それを自然と言ってしまうのは、彼女の遠慮のなさなのか、素直というか考えなしという事なのか、どちらにせよあまり歓迎できるものではない。

「確かに最近、育てられない赤ん坊を預ける場所があるのは事実です。実際に利用する人もいます。世間からすれば、それは悪い事じゃないのかもしれない。事情があるんだ。そういうものかもしれない。だけど、俺たちからすれば、そういうのは悪なんです。少なくとも俺は、そんな事をする親を赦せません」

次第に声が大きくなっていく。

「親になるという事は、責任が伴うんです。望まない妊娠だってあるでしょう。だからといって、安易に施設に預ければいいとか思って欲しくないんです。親がどうであれ、子どもは親と一緒にいるのが一番なんです。……例外はありますけど。たとえ親失格の親であっても、子どもは親を求めているものですから」

「ちょっと熱くなり過ぎ」

深田さんが笑いながらそう言ってくれたお蔭で、しんみりとした空気にはならなかった。

「すいません。やっぱりこうなっちゃうんですよね。で、引かれておしまい。本当にすいません」

雛見さんが恥ずかしそうにしながら、何度も頭を下げる。

「まあ、許してやって下さい。こいつは、この事になると熱くなっちゃうんで」

「それだけ、真剣って事ですよね」

「そう言ってもらえるとありがたいです」

雛見さんは頬を染める。

彼は本当に真剣で真面目で、正面から受け止めているんだ。

「でも、やっぱり育てるのは難しいってあると思うんです。親になるって不安だもん。無理かもって思うもん」

黒沢さんが素直な気持ちを言う。

私も彼女が親という存在になる事が想像できない。妊娠出産ならともかく、子どもを育てているなんて、とてもじゃないけれど無理だ。

それは自分に置き換えてもそうだ。もっとも、私は妊娠の時点で想像できないのだけれど。

「雛見さんって、施設で働いてるんですよ。だったら、親がいない子どもだっているんですよ」

素直なのは長所でもあり短所でもある。無遠慮と表裏一体だ。

「そうですね。ごくわずかですがいますよ」

雛見さんの表情が強ばる。それでも、私たちが相手だからだろう、ギリギリ笑顔を保っている。

「ほとんどの子どもは、親がいるのに施設にいるって事は、捨てられたって事ですか？」

黒沢さんは学習せずに、強烈な爆弾を落とす。

「落ち着け、孝太郎」

雛見さんは、さすがに我慢できないのか立ち上がったが、深田さんがなんとか宥めてくれる。

「黒沢さん。ちょっと無神経すぎ」

「でもさ、そうじゃないの？ だったら、どうしているわけ？」

そういう事を真顔で言うのだから怖い。

だからといって、私も彼女と同じような知識しかないのが現状だ。

事故や病気などで親がいなく預けられる場所が孤児院だとすれば、彼が働いている児童養護施設とはなんだろう？ 名前が違うだけだろうか。それとも、明確になにか違うのだろうか。

幸いながらと言うべきか、そういう場所に縁がなかったし、関わる事をしてこなかったのだからわからない。無知もいいところだ。

だとすれば、黒沢さんの質問は私の質問でもある。

雛見さんは、自分を落ち着かせるために深呼吸をする。

「預けられる理由は様々です。親がいなくなってしまった子どももいますが少数です。ほとんどは、親に育児能力がない場合です。自らの意思で入所を希望する人もいますが、うちに関してはほとんどは虐待や育児放棄で保護している場合です」

そうか。そういう事もあるのか。自分の親はそういう意味では普通だったので、そういう事はどこか別世界のように思っていたのかもしれない。なので、全く思いつかなかった。

「そういう場合は、行政と連携して、なんとか元のように暮らせるように、親と面談をしたり、期間を決めて家に戻したりとか、とにかく普通に暮らせるようにサポートをする場所なんです。

もちろん、それが実現せずに、出所期限がきて、一人立ちをしていく子たちもいますけど」

雛見さんは寂しそうな顔をする。きっと色々あるのだろう。

「入所したからといって、親の責任がなくなるわけでも、繋がりがなくなるわけでもないんです。なにかあれば、サポートするのは親です。金銭面はもちろんですが、進学や就職に関しても、親を交えて面談をしたりします」

話を聞けば聞くほど、私が想像していた場所とは違ってきている。

そういう場所になれば、もう親とは隔絶されて、大人になって出ていくか、そこを手伝うかするイメージだった。

そもそも、そのイメージもなにが根拠になっているのかわからない。そういうドラマでも見たのかもしれない。

「時間があるようでしたら、これから見学しますか？ できれば、利用して欲しくないんですけどね」

「どうする？」

黒沢さんが訊いてくる。

興味はある。だけどそれは完全に興味本位だ。茶化すわけではないけれど、野次馬のようなものだ。そんな私が行ってもいいのだろうか。それこそ失礼じゃないだろうか。

「あまり気負わないでいいですよ。俺たちだって、ちゃんと知ってもらいたいですし」

「せっかくの機会ですから、行ってみるのもいいと思いますよ」

深田さんが背中を押す。

「じゃあ、せっかくですし」

向こうが言ってくれているわけだし、こんな機会がこの先あるとは思えない。

そんな機会を不意にするのはもったいない。

「もしかしたら、お世話になるかもしれないし」

黒沢さんに悪気はないのだろうけれど、やはりその言い方は問題があるように思う。そもそも前提が間違っているのだけれど、指摘しても意味がなさそうだ。

「すみません。彼女の事は気にしないで下さい。案内をお願いしてもいいですか」

なんとかその場を取り繕う。

「わかりました。それじゃ、行きましょうか」

「僕はクリニックがあるので。孝太朗、あまり厳しい事はするなよ」

「わかってるって」

深田さんの言葉が少し気にかかる。厳しい事ってなんだろう？ とにかく行けばわかるのだろう。

雛見さんが働く施設は、クリニックからそれほど離れていなかった。

住宅街にあるその場所は、私が思っているものとは全然違った。

勝手に学校のようなものを想像していたのだけれど、そこにあるのは小さなマンションというか、どこかの学生寮のようだった。

ただ普通のマンションと違うのは、小さな校庭のような場所がある事だろう。遊具などはないけれど、それが唯一の学校らしさだった。

「へえ～、なんか思ったのと違う。結構綺麗だね」

黒沢さんも意外そうにしているが、どうも私と同じではなさそうだ。

「もっと昔からある感じをイメージしてたんだけどな」

「中へどうぞ」

雛見さんに続いて中に入る。

観音開きのガラス戸を開けると、公民館のような雰囲気玄関だった。

両脇にはげた箱が並んでおり、そこに雑多に靴が放り込まれている。

きちんと整理された場所もあるが、ほとんどはあちこちバラバラになっている。

「片づけろとは言ってるんですけどね」

雛見さんは、あいつらは……とぼやいている。

どうやらきちんと片づいているのは、年齢が上の子たちの区画らしい。小中学生の区画は、男女関係なく散らかっている。

「片づけないんですか？」

さすがに整理した方がよさそうに思える。

「俺たちはあいつらの親じゃないですし、召使いでもないですから。こういうのは、ちゃんと自分でできるようにならないといけないんで」

「なんか厳しい」

黒沢さんがそんな事を言うが、私も似たような感想だった。

子どもたちの面倒を見るという事は、そういう身の回りの世話をするものだと思っていた。

確かに親とか召使いではなくても、親が片づけてくれていたりするみたいにするものだと思っていた。

ここはそういう方針という事なのか、それともどこでもそうなのだろうか。私には未知の世界すぎてよくわからないし、知る機会はないのかもしれない。

「家だと親がそういう事をしてきていたかもしれないけど、ここは家とは違うんです。子どもたちを自立させるというのも大切な役目なんです」

「やっぱ厳しい。あたしは無理かも」

さすがに今は一人でしている事も、それが子どもの頃からだと思うと、さすがに私もできる自信はない。高校の頃まで、家事なんか全くした事はなかったし、しようとさえ思わなかった。

一人暮らしを始めて、必要に迫られて今のようになっただけだ。

「これを使って下さいね」

そう言って、雛見さんは来客用のスリッパを出してくれた。

お礼を言って私たちはスリッパを履く。

玄関のすぐ右手には、大きな部屋があった。

たくさんの机が並べられていて、その上には書類がたくさんある。数人の大人がなにやら事務作業をしている。

「学校の職員室みたい」

黒沢さんが暗い過去でも思い出したかのように顔をしかめる。

「まさに職員室ですから」

雛見さんが苦笑する。

「あたし、こういうの苦手」

自分の肩を抱いて震えるほど、いったい彼女の学生時代になにがあったのだろう。なんとなくの想像はできるけれど。

その反対——玄関の左手にも大きな部屋がある。中を覗くと、食堂のようだった。それに併設するように、リビングのような場所がある。大きなテレビが設置されているので、きっと憩いの場所という感じだろう。

他にもいくつか部屋があるようだけれど、居住する場所というわけではないようだ。

「子どもたちは上で生活しています。その前に、ちょっと報告してきます」

雛見さんは職員室に入って、私たちの見学の事を説明に行ってくれた。よく考えれば、雛見さんが誘ってくれたにしろ、施設の承諾なしに勝手に来たという事になる。

それほど厳しい場所ではないだろうけれど、かといって無関係の人間がほいほい来ていい場所でもないだろう。

「なんだか寮みたいだね。楽しそう」

黒沢さんは色々な場所を覗いている。

「ちょっと、勝手に……」

「いいじゃない。別に減るもんじゃないし」

まさに <sup>しょうとうく</sup>常套句。

その身勝手さに肩身が狭くなる。

しかし彼女は、言ってどうにかなる相手ではないし、ここは諦めるしかない。

ちょこちょこと見ている黒沢さんが、うわっ洗濯機だ、お風呂大きい、合宿所みたい——などはしゃいでいる。

「お待たせしました」

雛見さんが戻ってきた。と、すかさず黒沢さんも、何事もなかったかのようにしゃんとしている。うわっ、さすがと言うべきだろうか。彼女は今までもこうしていたんだろうと、容易に想像できる。

「いえいえ」

黒沢さんの営業スマイル。雛見さんはデレデレしているが、男ならこうなってしまうものだ

ろう。そうなるようにしているわけだし。

「申し訳ないんですが、ちょっと担当している子の事で、どうしても時間がとれなくて……代わりに彼が案内しますので」

と、雛見さんの後ろから、すらっとした男の人が姿を見せた。

歳の頃は私たちと同じくらいだろう。眼鏡のせいもあるだろうけれど、頭がよさそうな印象がある。真面目そうだが、少し堅物っぽさがどこかにある。

「新海しんかいです。よろしくお願いします」

見た目と同じで、きちんと礼をする。

「というわけで、みのる実 っち——えっと、新海くんが案内しますので」

雛見さんは慌てて言い直す。普段はそう呼んでいるのか。

かなり親しいようだけれど、彼の印象とその呼び方が一致しない。

「新海さんっていうんですか。時と——」

「お久しぶりです。時任さん」

黒沢さんの言葉を遮って、新海さんが私に笑顔を向ける。見た目よりはフレンドリー感がある。

お久しぶり？ どこかで会った事があるのだろうか。しかし、私に覚えがない。

でも、名乗っていないのに名前を知っていた。いや、雛見さんが先に紹介していたのかもしれない。でも、それだとやっぱり、久しぶりというのはおかしい。少なくとも初対面ではないようだ。

「おいおい、もしかして知り合いなのか？」

雛見さんも驚いている。という事は、先に紹介していたわけではなさそうだ。

「ちょっと。時任さん、どういう仲なの？」

黒沢さんは妙に盛り上がっている。

「あの……えっと……」

どこかで会った事があるのだろうか、それを訊くのは失礼だろうか。でも、本当にわからない。名前を知っているという事は、それなりに話した事があるはずだ。

新海実——その名前を頭の中で反芻する。

ありきたりな名前というわけでもないのに、覚えていても不思議じゃないんだけどな……。

仕事関係でなにかあったらだろうか。しかし、こういう場所と縁がないので、仕事関係ではなさそうだ。

だとすればあの街コンだろうか。あの時に、たくさんの人と連絡先を交換したので、その中にいたのかもしれない。そう思ったけれど、どうやらそうでもないらしい。黒沢さんは完全に初対面のようなのだ。それに雛見さんも、彼が私を知っている事を知らなかった。

「やっぱり覚えてないかな。放課後の図書室」

放課後の図書室？

そのキーワードから、彼の事を思い出そうとして、

「あっ」

そのキーワードから出てくるのは一人しかいない。本当にそうなの？ 思わず彼を凝視してしまう。

「思い出してくれた？」

彼は少し恥ずかしそうに笑みを浮かべている。

すっかり忘れていた昔の思い出。青春の一ページ。そういうものがあつた事すら忘れていたもの。

それが今ようやく開かれる。

しかし、その衝撃が強すぎて、私は無言で頷くしかできなかった。

「なにになに？ どういう知り合い？」

「おいおい、まさか知り合いって……マジかよ」

黒沢さんは目を輝かせているし、雛見さんは額に手を当ててショックを受けている。

そんな二人に答える余裕はない。

「高校の時のクラスメイトです」

彼が淡々と答える。

私の記憶にある彼と、目の前の彼が少しずつ重なっていく。

まさかという事もあつたけれど、当時よりもさらに大人っぽくなったのは当然だし、少し垢抜けた感じがある。それに、こんな親しげに話さず、少し堅い話し方だった気がする。内向的だったイメージしかなかったので、社交的になっていれば別人のようなものだ。

それに引き替え私は――変わっていない。いや、外見だけなら、今は少し化粧をして化けていたんだつた。だとすれば、あの当時と別人になっているはず。はずだつた。なのに、彼はすぐに私だとわかつていた。自分では化けたつもりなのに、結局私は私のままで、化ける事はできなかったようだ。

「それにしても時任さん、すごく綺麗になったよね。間違っていたらどうしようかと思つたけど、本人でよかった……」

胸に手を当てて大きく息を吐く。

心底安心したのだろう。その無邪気な笑顔は、少年らしさを感じさせる可愛さがあつた。

「なにになに？ 高校の同級生と再会。これって恋の予感じゃない？ 同窓会ラヴ？」

黒沢さんが私にだけ聞こえるように言う。

「そういうのじゃないわよ。ただ同じクラスだつたつてだけだし」

「充分じゃない。あの時の彼が大人になって……ロマンスの予感じゃない」

なんでもないから、という意味だつたのに、彼女にはそうではなかつたらしい。どうしてもそういう事になってしまうようだ。

「彼女はあんな事言つてるけど、ぶっちゃけどうなの？」

私相手では無理だと判断したのか、黒沢さんは彼に直接訊く。

「俺もちょっと気になるな」

「彼女の言うとおりですよ。クラスメイトつてだけでした」

「本当？」

「正直に言え」

二人が詰め寄る。どこか鬼気迫るものがある。

「本当ですって。それよりも、孝さんはこんな事してていいんですか？ 待ってますよ、きっと」

「おわっ、そうだった。ヤバいな。つまらん事で怒らせると、後が面倒なんだよな。とにかく、後でじっくり聞かせろよ」

そう言って雛見さんは、慌ててどこかに向かう。

それを見送りながら、彼が大きなため息を吐く。

「それじゃ、施設を見学したいんですよ。たいして珍しい場所はないですけどね」

親しげな笑みを私たちに向ける。

「お願いします。っていうか、もしかしてあたしってお邪魔かな？」

なにを言っているのか。

「私が付き添いで、黒沢さんがメインじゃない」

「あれ？ そうだっけ」

わざとらしい。余計な気遣いだ。

「とにかく、黒沢さんが思ってる関係じゃないから。新海くん、よろしく」

私たちの再会なんかどうでもいいから、黒沢さんの用件を終わらせたい。普段見る事なんかないので、私も少しは興味があるし。

「わかりました。それでは、案内させていただきます」

新海くんは、丁寧に施設を案内してくれた。

共同スペースはもちろん、入所している子どもたちの部屋も、本人の許可が出た場所は見せてもらう事ができた。

基本的には相部屋になっているようだ。小学生は三人から四人で一部屋だし、中学生以降は二人部屋だった。例外として、奇数人となった時だけ一人部屋になるらしい。

こういう大人は珍しくないのか、特に騒ぎ立てられる事もなかった。もちろん、小学校低学年の子は騒いでいたけれど。

高校生くらいになると、すっかり大人という感じだ。もちろん様々な子がいるのだが、しっかりしていると感じさせる子は、むしろ黒沢さんの方が年下に思えるくらいにはしっかりしていた。

。

施設はもちろん、入所している子どもたちも、私が想像していたものとは違っていた。

もっと鬱々として厳しいイメージだったが、和やかで楽しそうな印象だった。しかし、やはり家庭というものは感じられない。

共同生活をしているだけでは、家族にはなれないのだと思った。それだけ家庭というものを作るのは難しいのだろう。

「思ってたのと全然違った」

と、黒沢さんも純粹に感心していた。

「そうだ。連絡先交換しませんか」

「えっ？ あ、はい」

唐突な黒沢さんの提案に、新海くんは戸惑いながらも携帯電話を取り出す。

「ほら、時任さんも」

「私も？」

私は別に必要ないと思うのだけれど……。

「なにしてんの。ほら、交換しとかないと」

「わかったわよ」

強引に言われ、新海くんと連絡先を交換する。

私はこういう場所と縁がありそうにないので、本当に必要ない。

「もう、照れちゃって」

と、ニヤニヤしながら私を見るが、自分としてはなにも変わらない。

ただ新海くんは、嬉しそうに携帯電話の画面を見ていた。黒沢さんって、見た目はいいからね。やっぱり男とすれば、綺麗な女の人の連絡先って嬉しいものなのだろう。

「案内は終わった？」

私たちがそういう話をしているところに、雛見さんが戻ってきた。

「ええ、ちょうど。だいたい案内はしましたよ」

新海くんが報告する。

「そっか。本当なら、こういう施設がない方がいいんでしょうけど、やっぱり必要なんです。でも、できればあなたたちには利用する事がないように願っています」

雛見さんは、真面目な顔で私たちを見る。

「ボクもこの仕事をするまでは、全く知らない世界でしたからね。価値観がガラッと変わりました」

「誰も通る道ではあるな。妙な気負いがあるんだよな……」

「ですよね……」

と、完全に二人で盛り上がっている。

男っていくつになってもこうだ。周囲に関係なく、自分たちの世界を作ってしまう。そこに女は入れない。

「まあ、それはともかく、きちんと親になって下さいね」

「は、はい」

黒沢さんは萎縮して答える。

それが簡単にできれば、こういう場所に足を運ぶ事はないだろう。だけど、それができそうにない——不安だからこそ、この場所にたどり着いたのだ。

自分の責任を放棄して、完全に他人任せというのは感心しないし、認めたくはないけれど、それでも子どもが放置されて不幸になるよりは——少しでも幸せを感じられるなら、それも仕方ないのかもしれない。

「ちなみに、誰の話を聞かせた？」

雛見さんが新海くんに訊く。

「雄太です」

「まあ、そんなとこか。他は？」

「翔子は不在でしたので、美咲に」

「なるほど。ちょっとヘビーじゃなかったですか？」

雛見さんが心配そうに私たちを見た。

「美咲ちゃんですか。ちょっとヘビーだったかも。あれって本当なんですよ」

「本当ですよ」

新海くんが肯定する。

嘘だとしたら、なかなかのストーリーテラーだろう。

「フィクションとしか思えなかったし。あんなの本当にあるんだ……」

そこには私も同意だ。あんな事が実際にあるなんて、想像もできない。完全に犯罪だとしか思えない。

雄太くんに関しては、親の暴力でというもので、それもそれなりにヘビーなものだったけれど、よくあるというのは問題だろうけれど、想像の範囲内ではあった。だけど、美咲ちゃんももっとヘビーなもので、想像もできなかった。。

虐待だけでなく、子どもを子どもと思わない親。家事やらなにやらを全てさせていたらしい。それだけでも大変だと思うのに、さらに性的なものまであったらしい。

実の親による売春。

当の本人は、不幸にも受け入れてしまっているのか、もう心が壊れているのか、あっけらかんとそんな話を私たちにしてくれた。

それが余計に辛かった。

同じ女だから話せるのか。同世代ではないから、ここだけの関係だからなのか。私にはそういう間柄であっても、絶対に話す事はできないだろう。

それを話すという事が、どれだけ自分を抉り傷つけるのか。

「ちなみに、美咲の事は職員しか詳しくは知りませんからね。美咲本人がこの誰かはもちろん、他に話すなんてないでしょうし」

雛見さんが補足してくれる。

「そっか。そうだよ」

それはそうだろう。あんな事を自分から言いふらせるはずがない。

だとしたら、私たちに話してくれたのはどうしてだろう。それもあんな表情で。

「辛かったんだね」

黒沢さんが真面目な顔で頷く。

そう言うだけなら簡単だ。

私たちにすれば、それだけで完結してしまう。

自分が可哀想だと思っているのだという、その満足感が全てだ。それだけで解決した気分になっている。

それがわかっていても、それ以上の事はできないし、それ以上のなにかを考える事すらしない。

「別にあの子たちの話をしたからって、俺たちにもなにもできません。俺たちは親じゃないですから。突き放すようですけど、自分たちでなんとかするしかないんです。俺たちは、それを手助けするだけ。俺たちからなにかをするわけじゃないんです」

「そうなんだ。親代わりになってくれるんじゃないんだ」

黒沢さんの感想は、私にも通じるものがあった。

こういう施設は、親の代わりになってくれて、まるで本当の家族のように過ごすものだと思っていた。

もともと、普段から考えるわけでもなく、気に留める事すらないので、勝手なイメージしかなかったけれど。

それが、今日の事で完全に覆された。

「ボクも最初は、ここは`家、`なんだと思ってたんです。だけどそうじゃなかった。ボクたちは`家族、`にはなれない。ただの`他人、`です。学校のように生徒と教師という関係ですらない。世話人でも召使いでもない。ただの`他人、`だったのは、最初はショックだったな……」

新海くんは遠い目をする。

学生時代の彼を考えれば、こういう職業には慈愛の気持ちがあったのだろう。

可哀想な子どもたちのために——そんな熱い気持ちだったはずだ。

だけれどそれは幻想でしかなく、そういう気持ちすら身勝手なものだったわけだ。

「まあ、そんなもんですよ。だから、妙に熱意があると、この仕事は続かないんですよ。そこそこ適当じゃないと」

なっ、と新海くんの肩を叩く。

「ボクは真面目にしていますけど」

「もうちょっと、肩の力は抜かないとな」

「善処します」

それでも、やっぱり新海くんは真面目だから、そう簡単にはできないだろう。責任感が強いから。

雛見さんだって色々あつただろう。根は真面目なのは伝わってくる。

「さて、社会科見学はこれで終了としましょう。もしよければ俺たちはもうすぐ終わりなんで、食事でも一緒にどうですか？」

「食事ですか。どうする？ 時任さん」

嬉しそうな、期待いっぱいの顔で私を見る。しょうがないから確認しましたという建前は、ここで必要だろうか。これで行かないと言うのは、さすがに空気を読めていないだろう。

「ちなみに深田さんは？ 彼は一緒しないんですか？」

黒沢さんは本命の都合を確認する。

「あいつはちょっと難しいでしょうね。診察時間があるし……とりあえず、ちょっと確認してみます」

と、雛見さんが連絡をする。

「彼も行けるかな。っていうか、時任さんの元彼、結構いい感じじゃない。お似合いだし」

「そういう関係じゃないんだけど」

「いいでしょ。そんな感じだし」

視線を感じた黒沢さんは、ひらひらと新海くんに手を振る。彼は恥ずかしそうに視線をそらした。

「ピュアそうじゃない。時任さんの好みのタイプじゃない？」

「どうでしょうね」

確かに好きか嫌いかでいえば好きなのだろう。高校時代も、それなりに会話があった。

彼氏彼女というわけではなかったけれど、仲がいいクラスメイトではあった。

だからといって、彼女が言うような関係というわけではなかった。意識した事もない。

「参加できるってさ」

雛見さんが報告すると、黒沢さんの表情がわかりやすく明るくなる。

「じゃあ、行きましょう。仕事が終わるの、待ってますね」

参加決定。

「それじゃ、駅前の喫茶店でも行きましょうか」

さすがにここで待つわけにはいかないだろう。かといって、住宅街で時間をつぶせそうな場所はない。

「そうね。それじゃ、終わったら連絡下さいね」

黒沢さんは携帯を持って振る。

「わかりました。ああ、早く終わらないかな……」

雛見さんは、テンション高く職員室に戻っていった。

「それじゃ、楽しみにしてますね」

そう言って、新海くんも続く。

「じゃあ、あたしたちも行こうか」

「そうね」

私たちは時間をつぶすために駅前に戻る事にした。

## 好きな人の存在

---

「久しぶりの再会に乾杯」

雛見さんの号令でグラスをあわせる。

男性陣は生ビールだが、黒沢さんと私は烏龍茶だ。黒沢さんは最初はカシスオレンジにしようとしていたが、深田さんのストップがかかった。妊婦が飲酒しようとしているのを、産婦人科医が止めないはずがない。そもそも、黒沢さんに自覚がなさすぎやしないか。

夕刻に合流して、個室スタイルの居酒屋にやってきた。まだ時間が早いからだろうか、他の個室はまだ埋まっていないようだ。もっとも、個室ばかりなので、他の人を気にする必要がないの  
がいい。

「しかし、今日は本当に驚きましたよ」

雛見さんは、ぐいっとジョッキを一気に飲み干す。

「信二から連絡もらった時は、本当に驚きました」

同じ事を言った。まだ始まったばかりなのに酔っている……というわけではないか。しかし、テンションが高いのは事実だ。

「こいつがこういうテンションなのは珍しいですよ。あの後も、また会えたら……とか、連絡しようかとか、しつこかったですからね」

深田さんが苦笑する。

「そういう信二だって、そわそわしてたくせに。だいたい、本当なら実っちと行く予定だったのが、担当の子の用事で、信二と行く事になったんだぞ」

本当なら、あの時に新海くんが来るはずだったのか。

「大袈裟なんですよ、こいつは。っていうか、少しは落ち着けて」

「そうですね。さすがに落ち着いた方がいいですよ」

新海くんが雛見さんの肩に手を置く。

「なんだよ。今度はちゃんと誘うからさ。拗ねるなよ」

「そんなんじゃないですって」

「そうか。お前は彼女と知り合いだっけか。余裕ってやつか」

酔っていないはずなのに、妙に絡んでいる。

「そんなのないですって」

「なあ、知り合ってどういう事だ？」

深田さんが訊く。そういえば彼は、私たちのやりとりを知らないんだった。

「こいつと時任さんって、同級生だったらしいんだよ」

「それって本当か？ どうして言わないんだよ」

雛見さんも絡みだす。

「無茶苦茶言わないで下さいって。知ってるわけがないんですから。ボクこそ驚きましたよ」

どういう話を聞いていたとしても、確かに彼が言うとおりにわかるわけないだろう。

「そうだ。新海と同級生って事は、こいつが好きだった子って誰か知らない？」

「ちょ、なに言ってるんですか」

深田さんが突拍子もない事を言ったのを、新海くんが慌てて遮る。

「そーいやそーうだな。もしかして、彼女だったりするんじゃないだろうな」

「なにになに？ 面白そうじゃない」

雛見さんと黒沢さんが追随する。

「いいじゃないですか別に」

新海くんは、顔を真っ赤にしている。

へえ〜。高校の時に好きな人がいたんだ。

「ねえねえ、誰か教えてよ。二人は付き合っはなかつたんでしょ。でもさ、そういう話くらいしたでしょ。どんな子とか教えてよ」

「ええ。そういう関係じゃなかつたから。それと、そういう話はわからないわ。初耳なもの」

本当に知らないものは知らない。だいたい、そういう話をする事を当然のように言われるのはどうだろう？ 私からすれば、そういう話をする方が珍しいと思う。同性同士ならともかく、異性とそういう話なんかするものなのだろうか。

「とにかくいいじゃないですか。どうでもいいでしょ、そんな事」

新海くんが話を終わらせようとする。

「よくない。せつかく、他から情報を得られそうだったんだぞ」

しかし、雛見さんは引き下がらない。

「ボクの情報なんかどうするんですか」

「面白いだろ。ほら、現在思春期の子らの参考になるし」

「自分の体験を参考にして下さい」

「それはイヤだ。恥ずかしいだろ」

「だったら、ボクのもやめて下さいよ」

「お前のはいいんだよ」

「よくないですって」

などという、微笑ましいやりとりを三人で見ていると、注文した料理が運ばれてきた。

「ほら、食べましょうよ」

ここぞとばかりに、新海くんは再び話を終わらせようとする。

「生ひとつお願いします」

雛見さんは追加の注文をして、運ばれてきた漬け物を口に運ぶ。

「ほら、みんなも食べましょうよ」

新海くんに言われるまでもない。正直、お腹はペコペコだ。

「いただきます」

と手を合わせて、出汁巻き玉子を一口大に切って口に運ぶ。

おいしい。

基本的には自炊なので、居酒屋料理はあまり食べる機会がないので新鮮だ。誰かが作った料理も久しぶりだ。……って、コンビニやスーパーやお店のお弁当とかがあるか。とにかく、他の人

が作ったあたたかい料理は久しぶりだ。

「ねえ、それってなんですか？」

黒沢さんは、深田さんの前のお皿を箸で指す。行儀が悪いけれど、それを言うのはやめておく

。

生魚のようだけれど刺身じゃない。ネギトロのような状態だけど、マグロじゃなくて青魚だ。

「なめろうですよ。日本酒の方が合うんですけどね」

なめろう？ へえ、なんだか面白い名前だ。

「ちょっともらっていいですか？」

黒沢さんが箸をのぼす。

「少しだけですよ」

「ケチケチしないで。いっぱい食べちゃおうかな……」

「妊婦さんなんですから、食べ物には注意しないと」

「なあんだ。わかりました」

親に注意された駄々っ子のような。それでも言う事をきいて、少しだけ食べていた。そこは素直なんだな。

「私も少しいただいていいですか」

どういう料理なのか気になる。

「いいですよ。どうぞどうぞ」

「あっ、俺も」

雛見さんも箸をのぼす。結局、私たちでほとんど食べてしまっているかも。

「まあ、また注文すればいいんだけどな」

深田さんは、ほとんど空になったお皿を見てため息を吐く。なんだか申し訳ない事をしてしまったのかもしれない。

「出汁巻きどうですか？」

代わりにならないだろうけれど、私のお皿を出す。

「それじゃ、いただきます」

深田さんは笑顔で出汁巻きを一切れ頬張る。

「うん、うまい」

「おっ、いいな。俺も」

と、雛見さんも食べる。

「じゃあ、あたしも」

と、黒沢さんが食べるとなくなってしまう。

「また注文しよう」

と、早速黒沢さんが注文する。

「やっぱり居酒屋って、みんなでつつくのがいいよね」

アルコールを飲んでいないはずなのに、黒沢さんはハイテンションになっている。本当に飲んでいないのか疑問になるほどだ。

私もアルコールを摂取していないけれど、なんだか楽しくなってきた。この場の空気がそうさせるのだろう。

「それじゃ、今日はありがとうございました」

なんだかんだあったけれど、今日は楽しかったとしていいだろう。

明日も仕事があるという事で、日が変わる前にはお開きになった。黒沢さんは、二次会に行こうと言っていたが、深田さんが止めたので解散となった。

「それじゃ、名残惜しいけど、ここで解散ですね」

雛見さんが本当に名残惜しそうな顔で言う。

「しかも反対方向とか……なんだよ、これ。信二、俺たちは親友だからな」

お酒には強そうだったけれど、結構酔っているようだ。相当飲んでいたので当然か。

「すみません。こいつ、結構酔ってるみたいなんで、僕が送って行きます。新海君、彼女たちをよろしくな」

「わかりました」

「おいおい、送り狼になんかなんなよ。うらやましいな、ちくしょう」

「孝太郎、飲み過ぎだぞ。じゃあ、今日はお疲れ」

ほら行くぞ、と深田さんは雛見さんに引率されるように引っ張られ、千鳥足で帰っていった。

「それじゃ、ボクらも行きましょうか」

そうね……と答えて駅に向かおうとした時、

「ごめん、あたしちょっと寄りたいたいところあるんだ」

黒沢さんが顔の前で手を合わせる。

「今からどこに行く気？」

こんな夜にどこへ行こうというのか。まさか、別のお店とか？

「大丈夫だって。ちょっとしたところだから。無茶しないから安心して二人で帰るよ。じゃあね」

そう言うが早いか、黒沢さんは足早に駅の方へ向かった。

同じ方向ならわざわざ別行動する必要はないでしょうに。

しかし、行ってしまったものはしょうがない。まさかここで追いかけるわけにもいかない。

「じゃあ、私たちも行きましょうか」

「そうだね」

そう言って歩き出す。

新月だからだろうか、普段よりも暗く感じる道を並んで歩く。街灯の明かりもそれほど多くないので、星がいつもよりも綺麗に見える。

そういえば、高校時代でさえこういう事はなかったように思う。

一緒に下校とか青春だな……とは思っているけれど、それは今だからこそで、当時はそんな事を考える事すらなかった。

定番なのは自転車の二人乗りかな。小説の中にはよく登場していた。青春の代名詞かもしれない。違法だけど。

さすがに今はできないか。違法とかそういうのは関係なく、自転車の二人乗りが怖かったりする。バランスを崩しそうじゃない。

「あ、あのさ」

そんな事を考えながら言葉なくただ歩いていると、唐突に緊張して震えた声が聞こえた。誰かと思っただが、そういえば隣には新海くんがいたんだ。

そういうシチュエーションだったから、こんな事を考えていたはずなのに、私ったら……。

「なに？」

学生時代はそれなりに話せていたはずなのに、しばらく会わなかったせいなのか、それとも彼の緊張している雰囲気につられて引張られているのか、私も緊張してきてしまう。それでも、できるだけ平静を保つ。

「時任さん、もう少しだけ時間あるかな？」

一世一代の告白とでもいわんばかりの勢いだった。

明日も仕事ではあるけれど、終電までにはまだ時間がある。

「別に少しなら大丈夫だけど」

そう言うと、彼はわかりやすくホッと胸をなで下ろした。

「じゃあさ、ちょっとだけこっちいいかな」

そう言って彼は、駅とは違う方向に歩いていく。

初めての場所なのでもちろん土地勘はない。この先になにがあるのかわからないが、灯りがだんだん少なくなっている。住宅街からも離れてきている。

特に田舎というわけではないけれど、いわゆる郊外のこの街には、山などの自然がまだ残っていたりする。

どうも山の方に向かっていているようだ。

まさかどこかに連れ込んで……なんていうのは、小説の読みすぎだろう。新海くんがそんな事をするなんてあり得ない。

彼は無言で先導していくので、なんとなく声をかけづらい。

そう思っている間にも、徐々に暗くなってきている。

当然ながら誰の姿もない。かすかに虫の音がするくらいで、聞こえるのは私たちの足音だけだ

。道も舗装されてはいるものの、気分は登山でもおかしくないくらいの坂になってきている。

「この上なんだ」

と、彼が小高い山を指す。暗いので先が見えないけれど、頂上に向かって階段が続いているようだ。

冗談でしょ。まさかこれから山登りなんて、考えもしなかった。

もちろんそんなに高い山ではないけれど、夜に登るようなものではないはずだ。

道の入り口にはなにか看板があるけれど、暗くて読めなかった。

私が戸惑っていると、新海くんは黙って登り始めてしまう。仕方ない。登るしかなさそうだ。予定外の夜の登山に一步踏み出した。

下から見ると、夜という事もあったのか、高そうに見えたけれど、登り始めるとすぐに到着した。

山の上は広場のようになっている。

当然ながら見晴らしがよく、街灯りが満天の星空のようだ。

「こっち来て」

新海くんがベンチの脇に立って手招きする。

言われるままに行くと、彼が先にベンチに座ったので、私も隣に座った。

「すごい……」

思わず声が出た。

目の前には街の灯りはもちろん、今までも綺麗だった星空がさらによく見えるようになっていて、見える範囲は光で埋め尽くされている。まるで光の海に沈んでいるみたいだ。

ここは地上ではなく、宇宙の真ん中と言われても信じてしまいそうだ。このベンチが宇宙に浮かんでいても不思議じゃない。

「ここさ、意外と穴場なんだ。せっかくだから見せたくて」

新海くんは嬉しそうに笑みを浮かべている。

「こんなの初めて見た。すごい」

他に言葉が出てこない。

本当に綺麗なものを見た時は、綺麗としか言えないらしい。人間なんて単純なものだ。

「よかった……喜んでくれて」

新海くんは照れているようにはにかむ。学生時代にも見た事がない笑顔だ。むしろあの頃よりも幼く感じる。なんだか、私まであの頃に戻ったようだ。

「ここを見つけた時、時任さんと一緒に見れたらな……なんて思って、そんなの絶対無理だって思ってただけど、まさか叶うなんて思わなかった」

新海くんは遠くの光を見つめている。

それはどこを見ているのだろうか？ あの頃の――学生時代だろうか。それとも、これからの未来だろうか。現在いまを見ていない気がする。

「月が綺麗だ」

「……………」

唐突なその言葉に、私は声が出なかった。

急にどうしたんだろう？

隣に座っている新海くんを見るが、彼は星空を見続けている。わずかな光だけれど、彼の頬が少し赤くなっている気がする。

「月が綺麗だ、

脳内でその言葉を繰り返す。

あまりに平然と——自然すぎたけれど、どうにも引っかけりを感じる。  
まさか……ね。そう思って空を見ても、やはりそこに月は浮かんでいない。  
だとしたら——  
本当にそうなの？　そういう意味なの？  
彼の横顔に無言で問いかけても、彼はこちらを見ようとしなない。  
今まで——学生時代も含めて、そんな風に考えた事がなかった。別に彼に対してというわけではなく、誰に対してもそうだった。  
だからこそ、一瞬本当にそういうつもりなのかわからなかった。

「月が綺麗だ、

その言葉には、そのままの意味だけでなく別の意味がある。

「I love you.」

昔の有名な作家が使った有名なフレーズだ。  
本当にそうだとしても、本当にそれを使う人がいるなんて思わなかった。  
さて、私はどう答えればいいのかろう。  
新海くんの事は嫌いではない。だけど、そういう風に考えた事がない。  
彼がどうこうではなく、完全に私の側の問題だ。あまりに縁遠すぎて、考える事がなかった  
ので、どう応えればいいのかわからない。  
だけど自分の中ではっきりしているものがひとつだけある。  
誰かの言葉を借りた二番煎じは面白くない。  
だからこう言うだけで精一杯だった。  
「新海くんだけの言葉を待ってる」  
そう言って私は立ち上がって、来た道に戻っていく。

*F i n o .*

## 初恋

---

あれは初恋だったんだろうか。

当時は、そんな事すら考えもしなかったけど、今になって思うとそうだったんだとわかった。

それでもまだ曖昧だ。

恋——ね。

どうにもわからない。

恋をした事がないのか——それもわからない。

あの子って可愛いな、なんて思った事はある。だけどそれって、どこか憧れのようなものもあったんじゃないか？ 画面の向こうのアイドルが、たまたま目の前にいるってだけなんじゃないのか？ そんな疑念が常にあった。

女性と付き合った事がない——というわけでもない。

向こうから声をかけられ、特に断る理由もないし、可愛いと思ったので付き合う。

そしてすぐに別れる。

そんな事が、わずかだけあった。

大学の友達には、もったいないとか、やっぱりすぐに別れると思ってたとか、どうなんだろうという事ばかり言われた。

別に別れるつもりで付き合ったわけじゃないんだ。

そう言う、そんなの当たり前だと言われた。

そりゃそうだ。

別れるために付き合うヤツなんかいるはずない。

だったら何故すぐに別れるのか。

そんなの、わかっていたらこうなっていない。

けどなんとなくわかる。

つまらない。

色々理由はあるんだろうけど、まとめて一言でそうなんだろう。

勝手な自己分析だけど。

そうわかっている、どうにもできないっての。

できればこうならないんだから。

そんな状況になった時、必ず高校時代の事を思い出す。

夕日に照らされた放課後の図書室。

優雅に、静かに、ただ本を読んでいる女の子。

風が吹いてカーテンを揺らせば、その風は勝手にページをめくるというイタズラをする。

ボクはそれを、本を読む振りをしながら、ちらりと横目で見ると。

毎日のように繰り返される時間。

それが初恋だったと気付くのは、ずっとずっと後の事——

## 普段の仕事

---

「実（みのる）っち、学校の課題ちょっと手伝ってよ」

女子高生がそんな事を言う。なにをするのかわからないけど、とにかく現状はそれが無理。他にす

るべき仕事があるんだ。

この児童養護施設に入所している子どもたちの面倒は、ボクたち職員は最低限だけで、基本的には

一人でさせる事になっている。

ボクたちは親じゃないし家族じゃない。ましてや召使いじゃない。

最低限のサポートはするものの、自立できるようにさせるためだ。

それがこの施設の方針だ。

普通と言われる家庭の子どもたちは、親に頼ってばかりで甘え放題だけど、ここはそういう場所じ

ゃない。

知識としては知っていても、いざこうして働くようになると、厳しい現実を突きつけられた。

ついこうして頼られると手伝ってあげたくなる。

もっとも宿題など勉強に関しては、わからないところは教える事もある。

だけど彼女の場合は、すぐに手伝ってもらおうとするので、簡単に了解できない。

「一人でしなさい」

忙しい時になにを言うんだ。わかっていて言ってるだろ。

確信犯だ。

あいつは――美咲（みさき）は派手そうに見えて真面目だ。そういうキャラを演じる事で、自分の

上手な見せ方を知っているしたたかなヤツだ。

「やだよ」

「他の誰かに頼んでくれないかな」

「実っちがいいんだよ」

普段とは違うお澄まし顔だ。しかもちょっと上目遣い。

まったく……。

もうそんな手は通じないってのに。

「悪いけど無理。だいたい、ボクらにそんなの通じないぞ」

「つまんない。昔の実っちは、これでイッパツだったのにな……。ホントつまんない」

ぶつぶつと文句を言っているが、これも美咲の演技だ。

確かに最初は、これに騙されまくったが、さすがに今じゃこうしてあしらえる程度にはなった

。

だけど、これでも先輩職員からは、まだまだ未熟だと言われてしまう始末だ。

「雛見（ひなみ）先生に頼みなよ」

雛見先輩は彼女の担当なのでその方がいい。

「こーちゃんはダメ」

雛見孝太郎（こうたろう）なので「こーちゃん」。この施設の伝統なのか、職員はだいたいあだ名

で呼ばれるのが普通だ。着任した時に誰かが言い始めて、定着したものがその人のあだ名になる。自

分のそれは誰が言い出したんだっけ？ もう忘れてしまった。

「どうして？」

「だって、こーちゃんさ、この本のタイトルを『コッロ』とか読んだんだよ」

そう言って見せてきた本の表紙には『こゝろ』と書かれている。

「なるほどね」

そう読もうと思えば読めなくはない。読めなくはないけど、さすがに難しい気がする。

そもそも、読書をしない人でも、この本のタイトルくらいは知ってると思うんだけどな。

普通なら冗談だと思うところだけど、雛見先輩の場合マジな気がする。

「だからこーちゃんはダメ。実っちは結構本読むじゃない。だから頼んでんの」

「感想文かなにか？」

「まあ、そんなとこ。登場人物の考えとか、なんかそういうのをまとめるの」

なるほど。これだと雛見先輩には不向きかもしれないな。

それにしても、定番の課題かもしれないけど、この本の場合はちょっと重いんだよな。どこまでオ

ッケーなんだろうか。

「後で時間を作るよ」

「やったあっ！ だから実っちってチョロ……素敵だよ」

そう言うと美咲は、逃げるように自室に戻っていった。

今チョロって言いかけたな。

はあ～。

やっぱりボクはまだまだらしい。

結局、美咲の課題を手伝うのは、夕食を食べ終わってからだった。

彼女の入浴の順番待ちで、時間ができたタイミングだった。こっちは就業時間は終わっている

ので、完全にサービス残業だ。

実っちは真面目だなあ。帰っちゃえばいいのに。仕事終わったんだし——そんな事を言いながら、

雛見先輩はさっさと帰ってしまった。

他の職員からも、真面目だな……と似たような事を言われた。どうせ帰ってもする事ないです

から

——そう言ってかわしたのだが、これが満更嘘でもない。

「実っち、あんがと」

そう言って美咲は共用スペースのテーブルにノートを置いて座ったので、その向かいに座る。

「さっそくだけど、この人たちってどういう関係なわけ？」

「……………」

いきなり核心か。

「美咲は読んでどう感じた？」

「まだ読んでない」

「……………」

とんでもない返事だけど、ある程度は想定内だ。

「まずは読みなさい。話はそれから」

さすがに読んでもらわないと。

「無理だって。こんな本なんて読めないもん。内容教えてくれればいいから」

「手抜きは認めません。自分でちゃんと読みなさい」

ここで引くわけにはいかない。

「そんな事言わないでさ。教えてよ」

「読まないんだったら、ボクはこれで帰るから」

そう言いながら席を立つ。

「帰っても一人なのに？ 彼女もいないし、一人で寂しいんじゃないの？ 一人で悶々と過ごすなん

て、ムツリなんだから」

散々な言われようだが、だからといって彼女を甘やかすつもりはない。

「別にいいだろ。一人で静かに過ごすのもいいんだよ。夜に読書ってのはいいんだよ」

さすがに月明かりを頼りに……というのは無理だが。それでも深夜の読書は捗る。

「うっわあ。なにそれ」

美咲が本気で顔をしかめる。

「そんなんだから彼女できないんだよ。根暗な趣味はやめた方がいいよ」

「余計なお世話だよ。別に今は一人でいいんだよ。そうだ、色恋沙汰に興味があるなら、なおさら読

んだ方がいいよ」

「えっ？ これってそういう話なの？」

「まあ、ちょっとドロドロした感じかもしれないけどね」

「……わかった。じゃあ、読んでみる」

渋々といった感じだけど、とりあえず読んでくれるみたいだ。

動機はともあれ、名作にふれるのはいい事だ。

「じゃあ、読んだら教えて。その時、一緒に考えるから」

「わかった。読んでみる」

結局、勉強会はこれだけで終わった。

「実っち。めっちゃ面白かった。なにあれ。昼ドラみたい」

翌朝出勤するなり、美咲が制服姿で駆け寄ってきた。かなりテンションが高い。ひらりとスカート

が舞う。

「もう読んだの？」

読書家なら一晩で読むのは珍しくないが、普段全く読まない彼女が一晩で読んだ事には驚かないわ

けにはいかない。

「うん。最初は難しかったんだけど、なんか気が付いたら一気に読んじゃった」

今まで見た事のない純粋な笑顔だ。普段の澄ましたものと違って、純粋な笑顔はいつもよりグッと

子どもっぽかった。

達成感のせいだろうか。

「わかったわかった。じゃあ、今晚にでも時間作ろうか」

これでようやく課題の手伝いの出発点だ。

昔の読んだので記憶があやふやだ。休憩の時にでも読んだ方がいいかもしれない。

「ううん、いい。なんかね、読み終わった後、勢いでやっちゃった。古くさいと思ってたけど、結構

昔の人もすごい事してたんだね」

「あ、ああ、そうだね」

あまりの勢いに気圧される。

それにしても、課題まで終わらせてしまうとは。そこまで美咲にヒットするとは思わなかった。

「お蔭で眠いんだよね。とにかく、遅刻しそうだから、学校行くね」

ハイテンションのまま、ボクとすれ違うように出ていった。

「おはよう。美咲は朝から元気だね」

そんな美咲とすれ違うように、雛見先輩が出勤してきた。

「朝からイチャイチャと。未成年に手を出しちゃダメだぞ」

「そんな事してませんって」

全力で否定する。

「ムキになりなさんな。彼女がいない者同士だが、女子高生に手を出すのはやめような」

ぽんぽんと肩を叩かれる。

「だからそんな事しませんって」

さすがに今は、未成年相手にそんな事は考えないって。そもそも犯罪臭がする。

そんな事を言っても、どうせ聞き流されるだけだろう。無駄な事はしないでおこう。

「わかったわかった。今日もガキどもの相手だ」

とそんな事を言いながら、雛見先輩は誰よりも親身に向き合っているのになにも言えない。

「そうですね。今日も頑張りましょう」

とにかく今日も頑張ろう。

そして、久しぶりに読み直そう。せっかくの機会だし。

そんな事があって、しばらく漱石を読んでいた。

一度読んでいても、読み返すと新鮮な面白さがある。気付かなかった事に気付ける。

そんなある日、近所の診療所の深田先生に呼び出されて、昼間に施設を抜けていった雛見先輩が誰

かを連れて戻ってきた。

大人の女性二人だ。どういう用件だろう？

どちらかの子どもを入所させたいという相談だろうか？ それにしては、今まで見てきた親たちと

は雰囲気が違う。

だとすれば、彼女たちの知人だろうか。

なににせよ、今の時点ではボクに関係ない。

少し気になったものの、書かないといけない書類が目の前にあるので、それを片付けなければなら

ない。

雛見先輩が所長に、施設の見学の申請をしている。もっとも、基本的に断る事はないので、話を通

す程度だ。

ん？

それにしては、ちょっと長い気がする。なにやら話し込んでいるようだ。

どのみちボクにどうこうできるわけじゃないので、目の前の仕事を片付ける事にする。

「ちょっといいか」

作業をしていると、雛見先輩が声をかけてきた。

「どうしました？」

作業の手を止める。ちょうどキリもよかったので問題ない。

「施設を見学したいって人を連れてきたんだけどさ、担当の子の進路でちょっとな……」

雛見先輩は残念そうな顔をしている。

深刻そうというよりは残念そうだ。

「ボクが代わりに案内ですか？ 大丈夫ですよ」

先んじて確認する。見学希望はたまにあるので、何度か経験がある。

「チクショウ。せっかくのチャンスなのにな……。お前に譲るのは……ホントは俺が……」

雛見先輩はしきりに残念がっている。そんなに案内したかったのか。

「よくわかりませんが、とにかく案内すればいいんですよね。ちなみに、どちらが入所希望の関係

者ですか？」

どういう目的なのかは確認しておかないといけない。

「いや、入所して欲しくないんだ」

なるほど、そのパターンか。

「入所させないように、ですか？」

普通は見学してもらって、納得して入所してもらうものだ。

といっても、ボクとしても入所する子どもがいないに越した事はないので、先輩の気持ちもわかる

。

「それはわかりましたけど……とにかく、いつもの感じで案内しますね」

「ああ。とにかく頼むわ」

「わかりました」

## 初恋との再会

---

雛見先輩と一緒に部屋を出る。そこには、同年代の女性が二人いた。

「お待たせしました」

「いえいえ」

一般的に`美人、と称されるだろう人が、これでもかというくらい笑顔を向ける。

綺麗だ.....と惚れ惚れしてしまいそうだ。現に雛見先輩は完全にやられている。

「申し訳ないんですが、ちょっと担当している子の事で、どうしても時間がとれなくて.....代わりに

彼が案内しますので」

雛見先輩はできるだけ平静を装いながら言う。残念そうなオーラがはっきりと伝わってくる。

ちょっと申し訳なく思いつつ、紹介されたので前に出て挨拶をする。

「新海（しんかい）です。よろしくお願いします」

「というわけで、実っちーえっと、新海くんが案内しますので」

言い慣れているせいで、あだ名で呼びそうになっているし.....。対外的にはきちんと名前でなのだ

が、どうしても言うので、ボクは普段からあだ名は極力使わないようにしている。そのせい

で、先輩たちからは、実ちは堅物だと言われるのだけど。

そんな事を考えながら改めて見ると、もう一人の女性で目が釘付けになった。

綺麗だった。

それはもちろんある。

派手さはなく清楚な雰囲気、落ち着いた美人だ。

だけど、そうじゃない。

それだけじゃない。

彼女を見た瞬間、脳内が夕陽で照らされた。

そして、白いカーテンが風に揺れる。

目の目の景色が変わった気がした。

そこは高校の図書室だった。

紙とインクの匂い。

他の誰もいない静かな空間。

そこにはボクと彼女だけがいる。

まさか。

他人の空似だ。

そう思ったけど、目の前の彼女と記憶の中の彼女がピタリと一致する。記憶が美化されているとか

、脳内補正がかかっているとか、そういうのはない。

そもそも、今まで当時の事は忘れていたんだ。ただの過ぎ去った時間——そうではなかった

。

それなのに、急に鮮明によみがえってくる。

同時に、どれだけ大切な時間だったのかを思い知らされる。

一緒の本を読んで、一緒の時間を同じ空間で過ごして、徐々に言葉を交わすようになって、少しだ

け会話をするようになって——それ以上発展しなかった。

「新海さんっていうんですか。時と——」

「お久しぶりです。時任さん」

彼女の言葉を遮って挨拶する。

驚いているようだけど、間違っているわけじゃなさそうだ。

「おいおい、もしかして知り合いなのか？」

雛見先輩が驚いた顔でボクを見る。

「ちょっと。時任さん、どういう仲なの？」

連れれの女性が、紅潮して彼女に訊いている。

「あの……えっと……」

当の時任さんは、どうやらわからないらしく困惑している。それはそうだろう。ボクは奇跡的に思

い出しただけで、お互いに忘れていた過去だろうから。

知っているはずなのに覚えていないのは失礼だと思って、必死に思い出そうとしているのが可愛

ったけど、あまり困らせるのも可哀想だと思って助け船を出す。

「やっぱり覚えてないかな。高校の図書室」

思い出して欲しいキーワード。

これで思い出してくれなかったら、この再会はここまでだったという事だ。だけど、もし——もし

なにか引っかかってくれれば。今になって期待してしまう。

「あっ」

どうやら思い出してくれたらしい。

「思い出してくれた？」

これはどうしても期待してしまう。

「なにになに？ どういう知り合い？」

「おいおい、まさか知り合いって……マジかよ」

連れれの女性と雛見先輩が、興味津々という目でボクたちを見ている。

雛見先輩に至っては、ボクを彼女に会わせたのを失敗だったと思っているんだろう。額に手を当てて、わかりやすくショックを受けている。

「高校の時の同級生です」

淡々と告げる。

単純な種明かしだ。

それほど深い関係でもなかったわけだし、これ以外に答えようもない。

「それにしても時任さん、すごく綺麗になったよね。間違っていたらどうしようかと思ったけど、本人でよかった……」

今になって安心して、胸がドキドキしてきた。大きく息を吐いて落ち着こう。

深呼吸をしていると、連れの女性が時任さんになにかを言っている。

「そういうのじゃないわよ。ただ同じクラスだったってだけだし」

どうやら、もっと深い関係だったんじゃないか、そんな感じの事を訊かれたんだろう。

他人からすれば照れ隠しに思えるんだろうけど、これが事実なんだからどうしようもない。

「充分じゃない。あの時の彼が大人になって……ロマンスの予感じゃない」

女の人からすればそうんってしまうんだろう。

「彼女はあんな事言ってるけど、ぶっちゃけどうなの？」

目を輝かせてそんな事を訊かれる。

「俺もちょっと気になるな」

雛見先輩も前のめりだ。そこまで興味を持たれてもな……。

「彼女の言うとおりでですよ。クラスメイトってだけでした」

「本当？」

「正直に言え」

本当の事なのに、言った途端詰め寄ってくる。

「本当ですって。それよりも、孝さんはこんな事してていいんですか？ 待ってますよ、きっと」

なんとなくあだ名呼びになってしまった。

とにかく、話をここで終わらせないと。これ以上訊かれても、答えられるような事はないし。

「おわっ、そうだった。ヤバいな。つまらん事で怒らせると、あとが面倒なんだよな。とにかく、後でじっくり聞かせろよ」

そんな捨て台詞を残して、雛見先輩は担当の子が待つ部屋に向かった。

ようやく質問攻めから解放されたかなと思うと、ついため息が出た。

「それじゃ、施設を見学したいんですよね。たいして珍しい場所はないですけどね」

奇跡的に再会して、積もる話をしたいところだけど、今は業務時間内だ。

むしろその方が楽なので、無理矢理にでも気持ちを切り替える。

「お願いします。ってというか、もしかしてあたしってお邪魔かな？」

連れの女性が余計な事を言う。

「私が付き添いで、黒沢さんがメインじゃない」

「あれ？ そうだっけ」

わざとらしい。余計な気遣いだ。

「とにかく、黒沢さんが思ってる関係じゃないから。新海くん、よろしく」

「わかりました。それでは、案内させていただきます」

時任さんもこれ以上は昔の事を話すつもりはないようだ。ボクもその方がいい。

素敵な偶然に胸をときめかせながらも、いつもするように施設の中を案内する。

途中で美咲に会ったので、生活の様子を見てもらうために部屋の中に入れてもらい、この施設に入る事になった経緯を話してもらった。

これに関しては、今までも見学の度に誰かに頼んでいる事なので、素直に受け入れてくれた。ただ、なんとなくニヤニヤしていたのが気にかかるけど。

## 月の音色を奏でて

---

案内を終えて雛見先輩に報告すると、どういう流れか……いや必然だったのかもしれないけど、深田先生を交えて食事をする事になった。

それぞれ仕事を片付けて、居酒屋に行ったわけだけど、これがまた大変だった。

色々と詮索されるされる。挙げ句には、高校時代に好きな子がいたって話になり、まさか時任さんに訊くという事態に。

時任さんとはそういう話をした事がなかったから、もちろん彼女は知らなかった。

ってというか、雛見先輩とそんな話をした事があるなんて覚えていなかったのも、そもそも不意打ちだった。

自分でも覚えてないけど、そういう話をした時の相手って、時任さん以外はいないよな……。やっぱり、どこかにそういう気持ちがあったみたいだ。

そういうのを誤魔化すのが大変で、落ち着いて食事ができなかった。

「それじゃ、今日はありがとうございました」

なんだかんだあったけど、今日は楽しかったとしていいだろう。

明日も仕事があるという事で、日が変わる前にはお開きになった。

二次会に……という話もあったけど、深田先生がストップをかけた。さすがに妊婦さんと飲み明かすのは難しいだろう。

「それじゃ、名残惜しいけど、ここで解散ですね」

雛見先輩が名残惜しそうに言う。

「しかも反対方向とか……なんだよ、これ。信二、俺たちは親友だからな」

普段はこんな事ないんだけど、今日はどうも悪酔いしているようだ。

ボクたちが同級生だったのが、そこまでショックだったのか。

街コンはかなり本気だったみたいだし、確かに二人とも魅力的だから、雛見先輩じゃなくてもこういうチャンスはものにしたいだろう。

「すみません。こいつ、結構酔ってるみたいなんで、僕がおくって行きます。新海君、彼女たちをよろしくな」

「わかりました」

深田先生に任せれば安心だ。

「おいおい、送り狼になんかなんなよ。うらやましいな、ちくしょう」

送り狼って……と言おうとしたけど、そうでもしないとこのままだなとも思った。

「孝太郎、飲み過ぎだぞ。じゃあ、今日はお疲れ」

深田先生が雛見先輩と帰ったのを確認する。

「それじゃ、ボクらも行きましょうか」

ボクたちは駅方面だ。

「ごめん、あたしちょっと寄りたいたいところなんだ」

時任さんの連れの女性――黒沢（くろさわ）さんがそんな事を言い出す。

「今からどこに行く気？」

こんな夜にどこへ行こうというのか。まさか、別のお店とか？ いやいや、それはない。

「大丈夫だって。ちょっとしたとこだから。無茶しないから安心して二人で帰りなよ。じゃあね」

そう言うが早いか、黒沢さんは足早に駅の方へ向かった。

残されたボクたちは、どうすればいいのか迷ったけど、

「じゃあ、私たちも行きましょうか」

時任さんの言葉で時間が動き出す。

「そうだね」

そう言って二人歩き出す。

新月だからだろうか、普段よりも暗く感じる道を並んで歩く。街灯の明かりもそれほど多くないので、星がいつもよりも綺麗に見える。

そういえば、高校時代でさえこういう事はなかったように思う。

一緒に下校とか青春だな……とは思うけれど、それは今だからこそで、当時はそんな事を考える事すらなかった。

定番なのは自転車の二人乗りかな。小説の中にはよく登場していた。青春の代名詞かもしれない。違法だけど。

そんな風に考えていると、どうしても言いたくなってしまった。

今しかない。

今行動に移さないと、ボクたちはこのままになってしまう。

「あ、あのさ」

緊張のしすぎで声が震えてしまった。

恥ずかしい……。

やってしまった感しかない。

「なに？」

少し緊張した声で返事があった。

「時任さん、もう少しだけ時間あるかな？」

一世一代の告白だ。ここで断られたらもうおしまいだ。

とにかく変に思われたらどうしよう。

「別に少しなら大丈夫だけど」

その言葉を聞いた瞬間、全身から力が抜けるみたいだった。ホッと胸をなで下ろす。

「じゃあさ、ちょっとだけこっちいいかな」

あそこに行こう。

とっておきのあの場所しかない。

姑息かもしれないけど、シチュエーションは大事だろう。

返事をもらえて安心したのも束の間、この先を考えると胸のドキドキが止まらない。

緊張したままゆっくりと駅とは反対の方に向かって歩き出す。

繁華街とまでは言えないかもしれないけど、それなりに賑わっている駅から離れていくと、街灯が少しずつ少なくなっていく。

新月なのか月明かりがないので暗い。

なにを話せばいいのかわからないので、ひたすら無言で歩いている。

ますます街灯が少なくなって、いよいよ真っ暗だという頃、目的の場所が見えてきた。

「この上なんだ」

立ち止まって目的の場所を指す。そこは小さな山だ。ハイキングというほどじゃなく、気軽に登れるもので、近所の人々の散歩コースにもなっているみたいだ。

昼間だと、頂上からの眺めは素晴らしい。

しかし夜もまた素晴らしい。

だけど、灯りのないこの場所に、夜に来ようとする人はおらず、結構な穴場だった。

とにかく頂上に行かないとなにも始まらない。

暗い道をゆっくりと登る。

黙々と夜の登山をして頂上に到着。

「こっち来て」

公園というか広場になっている頂上に設置されているベンチの脇に立って時任さんと呼ぶ。不安そうにしながらも来てくれた。

緊張しながら座ると、彼女も隣に座る。

ここに座れば言葉はいらない。

目の前には、ボクが見せたかった景色がある。

「すごい……」

彼女は純粹に感動してくれていた。

ここは地元の人しか知らない穴場で、だからといって地元の人が頻繁に来るわけじゃない場所だ。

ここからだと街灯りがほとんどなく、星空がどこまでも広がっている。まさに星の海だ。

この素敵な景色を素敵な女性と見たい——ちょっとした願望があった。

今までそんなに強く思ってたけど、彼女と再会したら途端に思うようになった。

そして実現した。

勇気を出してよかった……。

「ここさ、意外と穴場なんだ。せっかくだから見せたくて」

「こんなの初めて見た。すごい」

感動してくれている。それだけで充分……なんて思ってしまう。

「よかった……喜んでくれて」

安心して口元がゆるむ。

「ここを見つけた時、時任さんと一緒にみれたらな……なんて思って、そんなの絶対無理だっ  
て思ってたんだけど、まさか叶うなんて思わなかった」

変なテンションのせいかな、思わずそんな事が口から飛び出した。

言った瞬間、どうして言ってしまったのかと思ったけど、こうなりゃ勢いだと思う事にした。

「月が綺麗だ」

こうなれば全部勢いだ。でないと二度と言うチャンスはないだろう。気持ちは勢いじゃない。

「……………」

唐突なせいもあっただろうけど、彼女が黙ってボクを見ている。

じっと見られてそんな時間が続くと、徐々に顔が熱くなってくる。

見られてるってだけじゃなく、言ってしまった事が原因だろう。

彼女はどのような気持ちなんだろう？

「月が綺麗だ、

この言葉の意味がわからないって事はないと思う。

もちろん、文面そのままじゃない。

その言葉には、別の意味がある。

「I love you。」

昔の作家が使った有名なフレーズだ。その人は、その英語をそういう風に訳した。

最近、その作家のものを読む機会があったので、頭に浮かんできた。そうじゃなくても、一度く  
らいは言ってみたいという憧れがあった。

なにせ、相手が意味をわかってくれないと意味がない。つまりは、それなりの読書家じゃない  
と使えない。

彼女なら問題ないし、もしかするとロマンティックに思ってくれるかもしれない。

この場ですぐに返事をくれるのかどうか。とにかくどうなるにしろ、この時間は心臓に悪い。

そろそろ耐えられないかもと思っていると、彼女がゆっくりと口を開いた。そして紡がれた言  
葉は――

「新海くんだけの言葉を待ってる」

時間が止まった。

そんなボクを置いて、彼女は立ち上がって、登ってきた道に戻っていく。

去っていく背中をただ見ているしかできなかった。

「えっと……」

これってどういう事だろう？

頭が働かない。

フられたって事だろうか。

だけど、ボクだけの言葉を待ってるって……。

もしかすると、まだチャンスがあるのか？　――なんて、都合がよすぎるか。

とにかくボクは動けず、座ったままでいた。

働かない頭に、ただ月の音色だけが聞こえていた。

***Fino.***

月が綺麗なんて言わないで。

<http://p.booklog.jp/book/110262>

著者：芳田尚哉

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/studiosaix/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/110262>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト